「ほう、シネラリア――溫室で咲かせたのですな。」
「これ、サイネリアといふのですわ。シネラリアでは、「死」ぬといふ嫌な音がありますので、病人のお見舞にあげる時には、サイネリアといふのだと、植木屋さんから敎はつて參りましたの。」
「はゝあ、サイネリアか」と・靖也は微笑して、「日本人はどこまでも緣起をかつぎたがるものですな。だが、僕にはシネラリアといつたつて構ひませんよ。」
「嫌ですわ。――ね、サイネリア。綺麗な可愛い花ですわね。紅と紫とありましたが、わたくし紫が好きだつたものですから、こちらを貰つて參りましたの。」
「あなたは紫が好きなのですか？」
「え、、……君塚さんは？」
「僕も紫は好きな色です。優雅で氣品があつて好きです。」
「まあよかつたわ。わたくし、紅か紫か、どちらにしようか、どちらがお好きだらうかと、心配したのでございますわ。」
「いや優雅で氣品があるといへば、そのシネラリアといふ花、それ自身がほんたうに靜かで淸い形をもつてゐますね。」
「まあ、嫌ですわ。シネラリアなんて……サイネリアと仰有いまし。」

「だつて、シネラリアがほんたうでせう。」
「でも、シネラリアでは嫌ですわ。サイ……ネリアね、サイネリアでございますよ。」
美知子は念を押すやうにいつた。
「シネラリアはいけませんかね。……シネラリア……」
靖也は面白がつて反抗するやうに繰りかへした。
「いけませんわ！　わたし、ほかの花を持つて來ればよかつた……でも、この花は好きな花だつたから……」
「そのシネラリアが？」
「まあ、また、わざとわたくしの嫌がることを……」
美知子は鉢を床の上におろしてしまつた。
「それでは見えません。膝の上においてもつと見せてください。」
「嫌ですわ。君塚さんは案外お人のわるいお方ね。わたくしが嫌がることを、繰りかへして仰有るのだもの……」
「僕はまた美知さんが、そんなことを氣にするのがをかしいのです。」
靖也は快よげに笑つて「僕は、これでなか〳〵死なぬ男ですよ。櫻の花でこの病床を一杯に飾られ

ても、決して死なぬ男ですよ。自分の仕事をしてしまふまでは、どんなことがあつても死なぬ男ですよ。御安心なさい。」

「まあ、そのお元氣！　嬉しうございますわ！　……ほんたうに一日も早くおなほり遊ばして、立派なお仕事を御完成なさると、どんなに嬉しいことでせう。」

美知子は祈るやうに、胸に兩手をやつた。

「御安心なさい。」

靖也の聲は活々してゐた。そして感謝にみちたやうに眉が動いた。

バツタリ四つの眼と眼が合つた。燃えあがるやうな感激の光が互ひに強く閃いた。

襟を正すやうな嚴肅な沈默が、しばらく續いた。

突然、繃帶せぬはうの靖也の右手が、蒲團から差し伸ばされた。美知子の幽かに震へる右手が、その上に靜かに置かれた。

――ドアのそとの跫音。

「あゝ、こゝだ〳〵。第十室だなんて嘘を敎へて……第七室ぢやないの。こゝの看護婦はよつほど不親切だわ。」

その聲に、美知子はハツと手をひいた。

叩闘――

「は……どうぞ。」美知子は心もち病床から椅子をゐざらせて、ドアのはうを見たが、「あら、龍子姉さま……」

靖也はすぐ頭を、窓のはうへ向けた。

ズツと入つて龍子は、ジロリとあたりを見まはしたが、

「まあ、美知子さまが御看病？」

「いゝえ、お加代さんがつき添つてゐるのですが、唯今ちよつて食事に行つて……」

「さう。その間の御看病……？」

「看病のなんのと……ほんのお加代さんに代つて。こゝにゐただけでなんのお役にも立ちません。」

美知子は、この時はじめて龍子のうしろに立つた菊江の姿に氣がついて、「まあ、菊江さんも御一緒でございますか……さあどうぞこの椅子へおかけ遊ばしまし。」

「難有う。……さあ、龍子姉さま。」

菊江は龍子の背中を、ちよつとつゝいた。

「靖也さん」

「……」

龍子は椅子に腰もおろさず、聲をかけた。
「靖也さんお見舞に來ましたのよ。」
「……」
「……眠つてゐますの？」
「……え、……」
美知子は、彼方に寢返つた靖也を見て、なんと應へてい、かわからず、立ちあがつて枕もとをのぞき込まうとした。
「今までおきてゐましたの？」
龍子は、まるで靖也の家族かなんぞのやうな口をきいて、ツカ〳〵と病床のそばへ歩み寄つた。
「……え、、さつきお藥をお飲みになつて、そのまゝあの通り靜かにしてゐらつしやるのでございますが……」
美知子は言ひ譯のやうにいつた。
「熱があるんですか？」
「い、え、お熱は昨日あたりから、ズツとさがつて……」
「まあ、美知子さんは昨日もお見舞にゐらつたしの？」龍子は、チラと强く光る片眼を美知子にくれ

たが「熱がさがつてゐれば、おこしたつてい、わ。」
「……え、……」
美知子は、いよ〳〵困つてしまつた。
「靖也さん。靖也さん。わたしよ。龍子よ。菊江さんとお見舞に來たのよ。」
龍子は蒲團に手をさしのばした。
靖也は動かなかつた。
「まあ、眠つてゐるのか知ら？　いま廊下で係りの看護婦といふのに會つてきいたら、おきてゐるやうにいひましたのよ。部屋の番號の第七室を第十七室だと教へたり、眠つてゐるものをおきてゐるといつたり……こゝの看護婦は、ほんたうに嘘つきねえ。で、なけりや、よつぽど頭腦の惡い人間ねえ。」
「お姉さま。眠つてゐらつしやるなら、おこさないがい、わ。」
椅子から菊江がいつた。
「だつて、折角二人で見舞に來たのですもの。」
「そのうち、おおきなさるわ。こゝで美知子さまとお話をしてゐませう。」
「お待ちなさい。」と、龍子はグツと蒲團にノシかゝるやうに、靖也の顏へすれ〳〵に首をのばしたが、
「……あら！　眼をあけて！　おきてゐるんだわ！」

「まあ。」
菊江も椅子をはなれて病床のはうへ來た。
「どうしたの？　靖也さん！　おきてゐながら默つてゐるなんて……え、靖也さん！」
「君塚さん。龍子さまと菊江さまが、お見舞にゐらつしやいましたのよ。」
美知子も聲をかけた。
靖也はジツと窓のそとを見つめたまゝ、なんとも應へなかつた。
「靖也さん。なぜ默つてゐるの？　菊江さんと一緒にお見舞に來たのですよ。」
龍子は飽くまで患者を許さなかつた。
「……難有う。」
吐くやうに、靖也はいつた。
「もう熱はズツとさがつたのですつてねえ。」
「痛みはどう？」
「もう、いゝのです。」
「さう。それはよかつたのね。なんにも知らせがないし、わたしは新聞をろくに讀まないから、さつぱり知らなかつたの。でも、今日、日比野のはうから電話があつて、ほんたうに驚いてしまつたの。

日比野の父も、今日はお見舞にあがるつていつてゐましたよ。」
「……それは……なに、もう大丈夫なのです。御多用の先生に來て頂いては、濟みません。どうか、大丈夫だから御安心くださるやうに、どなたか先生へ電話をおかけください。」
「そんなことをいつたつて、日比野の父は來ますよ。――父は、靖也さんをどんなにか可愛がつていらつしやるんですもの。」
「……だから……先生のお心持は、來て頂かなくつても、僕に充分わかつてゐるんだから……」
靖也はせき込むやうにいつた。
「いゝぢやないの、靖也さん。父は大變心配してゐますのよ。わたしに電話で、すぐ見舞にゆけと命令しましたのよ。わたし驚いたら、新聞を見ないのかつて叱られたの。で、そんな記事があつたのかと、家の書生にきいてゐますと、棟吉が、あゝ、あの自動車の衝突なら、たしか五六日前の新聞に出てゐたやうだよつていふんでせう。わたし口惜しくなつて、棟吉をウンと叱り飛ばしてやつたの。それをわたしに注意してくれないなんて、ほんたうにボンヤリ過ぎる……」
「隈部さんは、僕の怪我が大したものでないことを、ちやんと記事で御判斷なすつたのです。決してボンヤリしてはゐらつしやらない。」
「ぢやあ、わたしがボンヤリね。……さうだ。たしかにボンヤリだ。靖也さんの身に凶事があれば、

わたし、なにか胸騒ぎなんかで感じずにはゐられない筈だ。それを第一わたしとして感じなかつたといふのは、たしかにボンヤリに違ひなかつた。」

龍子の言葉は靖也に對する皮肉といふよりも美知子に、或る心持の掣肘を加へてゐるやうに聞えた。

「……氷をすこしどうぞ……」

靖也は龍子の肩越しに、美知子の眼を見ていつた。

「お氷？　喉がおかわきなさりますの？」

美知子は氷嚢の、氷の量をたしかめるやうにのぞいていつた。

靖也はうなづいた。

龍子は、美知子がバケツから氷の小さな一片をさがしてゐる後に、またジロリと眼をくれた。ゆがんだやうな微笑が、眞赤な唇にのぼつた。

美知子は匙から、氷を靖也の口にふくませてやつた。

「ほんたうにこゝの看護婦は氣がきかなくて不親切だ。病人をおいて、お見舞の美知子さんにあとを頼んで出てゆくなんて、あんまり無責任だわ。」

「でも、ちやうど今頃が午後の回診の時間なので、忙がしいのでございませう。」

「附添ひの下女も下女だ。田舍者だけに、悠々と御飯を頂いてゐるから、ほんたうに間尺にあはない。」

龍子は椅子に歸つた。

美知子と菊江は、彼女の左右に腰をおろした。

妙にはづれたやうな氣分で、三人の間にはしばらく言葉がなかつた。

「……おう、さう〳〵、大事な御用があつた。それをまづ靖也さんにいはなければならなかつた……」

「なあに、お姉さま？」

菊江は龍子の顏を見た。

「大事な御用なの……日比野のお父さまから、今日、見舞にゆくから、その先にちよつと靖也さんにいつて置いてくれと、電話で頼まれた御用なのよ。」

「おや、いま、いつてあげるがいゝわ。」

「でも。……ちよつと、秘密に聞かせてあげなければならないことなのだから……」

龍子はチラと美知子を見て、口をつぐんでしまつた。

「秘密な御用？」菊江はなんにも氣づかぬさまで、「秘密な御用つて、どんな御用？」

「それをいつちや、秘密でなくなるぢやないの。なにをいつてるの、菊江さん。ほゝゝ。」

「さうね、秘密の御用を、どんなつて訊く人もなかつた。ほゝゝ。」

菊江も笑つた。

「お父さまが、お仕事のことで、秘密にちよつと靖也さんの耳に入れて置きたいと仰有つたのよ。もし病院へ行つて、ちやうど靖也さんがよく眠つてゐるところだつたら話すこともできないから、お前が行つた時、都合よくおきてゐらしつたら、これだけいつておいてくれと頼まれたのよ。なあに、病人を興奮させることではないし、ほんのちよつといつて置いてくれと頼まれたのよ。……しかし、なか〳〵大事なことだから……」

「菊江さま。では、わたくし達二人は、しばらく中座いたしませう。」

美知子は靜かに椅子からはなれた。

「さうね。では、お姉さま、控へ室かどこかに行つてゐるわ。どの位時間がかゝるの?」

「いえ、ほんの十分か十五分ばかりで濟むことなのよ。」

「ぢや、ちよつと出て來るわ。」

「ほんたうにお氣の毒さま。」

龍子は美知子にいつた。

「いえ……どうぞ、御ゆつくり。」

美知子は一禮して、菊江とともに室を出た。

龍子はジツと廊下の足音に注意してゐたが、それでもまた立つて、ソツとドアをあけて、廊下の左

右を見た。

飛ぶやすに彼女は病床のそばに歸つて來た。

「靖也さん。」

靖也は不審らしく、默つて彼女を見あげた。

「靖也さん。お話があるのよ。」

「……先生の御用つてなんです。」

「あら……靖也さんまで、だまされてしまつたの? ほゝゝゝゝ。」

「だまされて……?」

「靖也さんも、ずゐぶん人が好すぎるのね。いまのはみんな嘘よ。あゝして兩人を出してしまつて、わたしが靖也さんに話があるのよ。」

「え。ぢやあ、先生の御用ではないのですか。」

「えゝ、父の御用でなくて、實は龍子の御用なのよ。大事な御用なのよ。それこそ秘密を要するね。」

「あなたの用事なら、癒つてから承りませう。それに、僕はあなたから、どんなことでも、秘密なお話を聞くべきいはれない。」

「ところがあるの。」

「あなたの話なら、大抵わかつてゐる。」
「あら、わかつてゐるの？――嬉しいわ。わかつてゐてくだされば！」
「しかし、あなたには、僕の返事もわかりきつてゐる筈です。」
「いゝえ、まだわかりませんわ。」
「僕はかうして病院にゐるのです。こゝであなたの不快なお話を聞くことは、たまりません。」
「わたしのこれからいはうとすることが、不快だかなんだか、どうしてわかるの？」
龍子は詰め寄つた。
「僕を不快がらせないお話なら、さあ、いつて御覽なさい。」
「さう。ぢや、いひますよ。」龍子はまた蒲團にノシかゝるやうに、「靖也さん……」
「……」
「あなたは、わたしをどうしてくれるの？」
「どうして……？」
「わたし、あの、赤坂の珈琲店でお別れした晩から、苦しみぬいてゐるのよ。」
「……その話なら聞くのは御免だといつてるぢやありませんか。」
靖也は憎悪にみちた眼で、キツと龍子を睨みつけた。

「あなたが嫌だ、不快だといふのなら仕方のないことだけど……こんなに苦しみに苦しんでゐるわたしを、どうにか救つてくれるのが靖也さんだと思ふわ。……わたし、この頃では、いつそ棟吉に、なにもかも秘密をうちあけてしまはうかと思つてゐるのよ。」
「秘密……？」
「わたしの最初の唇を與へた人は、靖也さんだといふことを、キツパリいつてしまはうかと思つてゐるのよ。」
――靖也はサツと色を變へた。
龍子はかまはず續けた。
「わたし、ほんたうに苦しいの。わたしこのまゝでゐることは、棟吉をあざむき、また自分をあざむくことになるので、苦しみぬいてゐるの。病床にゐる靖也さんに、こんなことをいつて、怒らせたり嫌がらせたり、興奮させて惡いといふことは知つてゐます。……けれど、わたしとしても、とてもたまらない。あのクリスマスの晩にも、是非このお話をしようと思つてゐたの。でも、あゝした多勢の中だから、機會がなかつたのです。むやみに家を飛び出して靖也さんに會へるものでもないし、また靖也さんが、なるべくわたしに會ふまいとしてゐることも、それは充分知つてゐるのだから、今日、かうしてお見舞に來たこの機會を――自分では無理な、差控へねばならぬ時だとは感じてゐながらも

――どうしても逃すことができないの。靖也さん。わたしは苦しい。ほんたうに苦しいのよ。」
「……龍……龍子さん……お願ひだ、もう默つてください。なんにも言はないでください。」
靖也は、苦しげにセイ〳〵喘いだ。
「靖也さん。あなたはわたしのいふことを、また聞きたくないつていふの?」
「……お願ひだ……もう、ゆるしてください。」
「ほんたうにわたし惡いわ。かうして病床にゐる靖也さんに、こんなことを聞かせるのは。でも、わたし、苦しいの、ほんたうに苦しいの。わたし、どうしたらいゝでせう。え、どうしたらいゝでせう。」
もの狂はしく、龍子は靖也の手を犇とつかんだ。
「龍子さん。この靖也が一生のお願ひだ――以前のことは、どうか、すつかり忘れてください。……そして……そして眞實にあなたはあなたの道を歩んでください。あなたはどこまでも隈部さんを愛して立派に女としての美しい淸い一生を生きとほしてください。……僕は、それほどまでに思つてくださるあなたに感謝する……しかし社會の制度、人間の道德、運命の約束は、どうすることもできない……お互ひに道は一つです。正しい道は一つです……」
靖也は、彼女を戒めるといふよりも、むしろ彼女に哀訴するやうにいつた。
「それはわかつてゐます。わたしはかうした心が間違つてゐる、まつたく惡いといふことを考へて幾

度か、幾十度か、いえ、幾百度か自分で自分の心を責め叱り罵り嘲りました。――が、どうすることもできない惱みが、責めれば責めるほど、罵れば罵るほど、なほ强くわたしの身を虐みます。ほんたうに生きながら地獄道に墮ちた苦しみです。もうわたしは、世間のすべてから、惡魔とも、畜生とも、人非人とも呼ばれたつていゝ。わたしの心はあなたから離れることはできない。わたしは生命にかけてもあなたを愛します。さうするより外に、この苦しみをのがれる道はありません。わたしはなぜ以前あなたの愛をうけいれることができなかつたか、それを思ふと、みづから悔い恨み、胸をかきむしりたい氣がします。このまゝでゐたら、やがてわたしは、狂人になるか死ぬかです……靖也さん。わたしを、哀れな龍子を、どうかしてください。どうかしてください……」
半狂亂の體で、龍子は搔きくどいた。
「……まだわからんですか……お互ひにもう、道は一つです……」
靖也は嚴然と宣告した。
「靖也さんは、わたしが狂人になつても、死んでもいゝといふの?」
「……道は一つです……」
靖也は、あらゆるものを見まいとするやうに、堅く眼を閉ぢて動かなかつた。
「靖也さん。」

「……」
「……靖也さん。」
「……」
——一秒——二秒——三秒——
兩人の鼓動の聞きとれるやうな、無言の瞬間が過ぎた。
——と！
突然、靖也は、乾ききつた自分の唇に、火よりも熱い唇が、サツと烙印するやうに、襲つたのを感じた。
愕然として彼は眼をあけた。
人か魔か——彼は、恐ろしいものを跳ねのけるやうに、夢中で片手を突き出した。
氷嚢の紐がきれて飛んだ。
羽根蒲團がなかばまくれて、靖也は痛む半身を起してゐた。恥ぢと怒りに震へて、彼の齒はギリ、と鳴つた。
床の上に突き倒された龍子の頰には、蒼白い、痙攣的な笑ひがあつた。
なにか言はうとして、なにも言へぬ息づまつた二三秒が、また過ぎた。

輕くドアをあけて、どんなことがあつたとも知らぬお加代が急いで入つて來た。
「あ……！」
彼女も、たゞならぬこの場の光景に、立ちすくんでしまつた。
——陽がスツと暮つた——カーテンの上に鈍い光線が、憑きものゝやうに搖れた。
強い沈默——
龍子は苦笑しながら起ちあがつた。
お加代は、恐る〳〵病床のまくれあがつた蒲團をなほし、床の上に落ちた氷嚢をとつて、叮嚀に手拭で塵をふきとり靖也の額にあてがつた。
菊江と美知子がもどつて來た。
「お姉さま。もうお話濟んだの？」
「え　……」
「いまね、美知子さんと一緒に、屋上庭園へのぼつて見たのよ。そして……ほゝゝ、ほゝゝゝゝゝ！」
菊江はをかしさが、こみあげて來るやうに笑つて、「そして思ひがけなく……大變な、素晴らしいものを見たのよ。ねえ、美知子さん。ほゝゝゝゝゝ。」
美知子は困つたやうに足もとに眼を落した。

菊江は委細かまはず、

「そりやあ、大變な戯曲的な場面だつたのよ。もう退院に間もないらしい若い患者が松葉杖をついてね、附き添ひの看護婦と、素晴らしい戀の場面がはじまつてゐたの。ほんたうにお姉さまに見せてあげたかつたわ。」

「菊江さま。あれはそんなことぢやないのですわ。足のわるい患者さんが、往來をのぞき下さうとするから、看護婦が、危ながつてとめてゐたのですわ。」

美知子がいつた。

「いゝえ。どうして……あれは立派な戀の場面よ。」と、菊江は口を尖らせて、「だつて、いくらなんでも、あんな抱きかゝへやうはないわ。まるでピツタリ身體と身體をつけあつて、女の右手が男の右肩にかゝつて左の手で男の左手を、グツと握つてゐるんですもの。顏と顏が、まるで摺れ〳〵に寄つて、それこそ、わたし達の足音が聞えなかつたら、當然接吻でもはじまりさうな樣子だつたのですもの。

――ほゝゝほゝゝゝゝゝゝ！」

美知子は默つてしまつた。

菊江は、まだなにか續けようとしたが、ふと龍子の顏を見て、眼をパチクリさせた。

「おや、お姉さま。お顏の色がよくないやうよ。どうなすつたの？」

「……さう……別にどうもしないのだけど……」と龍子はお加代をチラと見て、「すこし頭が重いやうなの……」

「そりやいけないわ。今日は朝、格別寒かつたから、風邪でもおひきなすつたのぢやないの？　今年の風邪はわるいといふから、用心しないぢや……」

「大丈夫よ。」龍子はなに氣なく笑つたが、「さあ、そろ〳〵お暇しませうかね。」

「さうね。」

「……では、靖也さん、これで失禮しますわ。また、お見舞に來ますからね。ほんたうに昨日今日、寒さがメツキリ强くなつたやうだから、充分用心してね。……附き添ひの下女もゐるし、美知子さんも毎日來てくださるでせうが、わたしは毎日は出られないから、ほんたうに用心してね……」

靖也は彼方を向いたまゝ身動き一つしなかつた。

棄てばちに、自嘲するやうな微笑が龍子の唇をゆがめた。

「……では美知子さま、靖也さんの御介抱を、どうぞ、この上ながらお願ひいたしますよ。……あなたの眞心こめた御看病を、靖也さんは、今も、大變感謝してゐらしつたのですわ。」

龍子と菊江が去つた後、美知子とお加代はまたしばらく、椅子をよせて靜かに病床を守つてゐた。

午後の回診があつた。

靖也の熱は、少し高まつてゐた。

彼は眼を閉ぢたまゝ動かなかつた。時々フツと深い呼吸をもらして、悪夢に襲はれた様に呻つた。

お加代は、先刻の不可解な光景を思ひ出して、しきりに心を痛めてゐたが、それを美知子に話さうとはしなかつた。たゞ、なんとなく龍子といふ女が、恐ろしい企みを、靖也にしかけてゐることだけは彼女にも察しられた。大事な主人に、呪はしい影のやうにつきまとつてゐる龍子が、いかにも憎くてならなかつた。龍子の妖しく輝く眼を、彼女はあの嫌な蜥蜴の眼にくらべて見た。痙られたやうに動く唇を、あの氣味わるい蠑螈の腹の赤く波うつにもくらべて見た。――そして、ヂツと美知子の姿に振り返つた時、彼女は、そこにほのめく、ほんたうに清い靜かな美しさを感じないわけにはいかなかつた。疑ひや恨みといふやうなものを、この人に、かりそめにもかけてはならぬといふ氣がした。

――こんな美しさをもつてゐる人にこそ、眞實の美しい心が宿つてゐるものだ。好きな人だ――馴れ親しめる人だ――。

彼女は再び美知子を見た。とその時、心が通じたやうに、美知子も彼女を見た。

彼女はニツと笑つて、頭をさげた。美知子も微笑して、輕くうなづくやうに頭をさげた。

「……あなた、お眠むくはない？」

美知子が訊いた。

「え？……なんで？」

「でも、こゝへいらしつてから、夜もろくにお寢なさらないといふことを、をばさま（康子）からきゝましたもの。」

「いゝえ……そんな……」

「でも、昨日、あなたがなにか御用でこゝにおいでなさらなかつた時、をばさまは、あなたが無理して身體を使つてゐらつしやることを、隨分心配してゐらしつてよ。看護婦さんとかはる〳〵起きてゐらつしやればいゝものを、あなたは一晩中まるきり横にもならないで、椅子によつたまゝほんの五分か十分、トロ〳〵としてはすぐ眼をさまして、蒲團の端やら氷嚢やらを、御注意なさるのですつてね。……ほんたうに、誰にも出來ないことですわ。」

美知子は、まつたく感じ入つていつた。

「いゝえ……そんな……わし、椅子に腰かけても、よく眠られるんですから……それに身體もこのとほり丈夫ですから……山にをつた時分、木を負うたり車を押たりして、雪の中を二里も三里も、よくあるいてをつたんですから……この位のこと……」

「でも、ほんたうに無理をなさらないやうにね。あなたのお身體も大事ですよ。」

「わしの身體、どんなにこき使うても、ちつともどうもなりません。」

「晝間、わたしがお見舞にあがつた時にでもちよつと横におなりなさるがいゝわ。お藥をあげたり氷を割る位のことなら、わたしにも出來ますから。」

「えゝ……難有うございます。……ほんたうに、わし、ちつとも眠たうはないので……」とお加代は親切な言葉を喜んだが、「でも、昨夜、とう〳〵居眠りをして、椅子ごとひつくりかへりかけて……ほゝゝゝゝ。」

「まあ！」

美知子は笑ふよりも氣の毒さうに、眼を瞠つた。

「……でも、今日はもうなんともありません。」

——靖也は、何やら低くうめいた。

兩人はまたハツと枕もとを、のぞき込んだが、彼がそのまゝ靜かに動かぬのを見て、兩人は安心したやうに、またうなづき合つた。

看護婦が入つて來た、手にもつた藥罐を臺に置いて、時計を出しながら靖也の脈を見た。その間にお加代は廊下に出た。

「……いかゞでございます？」

「すこしまだ多いやうですが、もうズツと經過がようございますのね。」

「さうでございますか。」

「お傷のはうも、昨日今日は、よほど癒えかけて參りましたよ。」

「まあ、さうでございますか。」

——嬉しげな美知子の低聲を彼女もまた嬉しく聞きながら、お加代は氣をつけて音をたてぬやう、コツ〳〵氷を割つてゐた。

光に立つ

「おい、君はなんとなにゝする？」

「なんでもいゝよ。」

「なんでもいゝつて、君は君の好きなものを選ぶがいゝぢやないか。」

「なんでも食ふよ。」

「僕は、まづ、刺身と甘煮だね。」

「僕もそれにする。」

「それから鯛の潮。」

「僕もそれにする。」
「それから、老海のフライと行く。」
「僕もそれにする。」
「それから――と、酒の芳醇なるものを一二本燗けさせたいね。」
「そのはうは僕は駄目だから、君に一任しよう。」
「いけない。今夜は一杯つきあふんだ。」
「だつて、日本酒は駄目だ。葡萄酒ならすこしはいゝ。」
「葡萄酒？　――あんなものは、病人の飲むものだ。まだ病院にゐるつもりぢやいけない。今夜はなんといつても、二三杯はつきあはせる。」
「それは壓制だ。」
「なに壓制ぢやない。僕はこの轉地療養の間、小母さんから君の一身の監督を頼まれてゐるのだ。君はこゝに逗留する今日から、監督者たる僕の命令に服從しなけりやいけないのだ。」
「酒を飲めつていふ監督者があるものか。」
「監督者は規則通り勵行するばかりが眞の職能をつくしたものとはいへないのだよ。規則以外に信念をもつて是なりとしたことを斷行する必要があるのだ。」

「ぢやあ、信念をもつて君は酒を飲めつていふのか。」
「無論」
「――驚いた監督者だ。」
「はゝゝゝゝ。」
――顔見あはせて笑つたのは、靖也と高柴であつた。
彼等二人は、この日の午後、伊豆山に着いて、S溫泉旅館へ投宿したのであつた。
靖也は負傷が全癒して退院すると、その二日目に高柴がやつて來て、轉地を勸めたのであつた。それは、豫後の療養といふよりも、靖也の氣分を轉換させるに十日ばかり呑氣な旅に出るがいゝといふのであつた。高柴自身も、學校の講義を休んでも、急に書きあげたいと思ふ戯曲があり、旁一緒に出かけたいと、康子に相談したのであつた。康子は、よろこんで承諾したので、彼等はすぐ身輕に支度くして、こゝへ來たわけなのであつた。
汽車に乘つてから高柴の、例の屈託のない快活で滑稽に富んだ會話に、靖也はすつかり元氣になつてゐた。S旅館につくと、彼等はすぐ宿の褞袍に着かへて大きな浴場へ行つた。透明な溫泉の中に、首だけ出して四肢をウンとのばして、あたゝかく柔らかく、身體ぢうを按摩されて、サツパリした氣持になりながら部屋へもどると、宿の女中が夕食の献立表をもつて、註文をきゝに來たのであつた。

——笑ひながら頭をさげて女中が去ると、靖也はいつた。

「なか〳〵浪の音が高いね。」

「高いさ。外海だからね。それに二月では、まだ冬の海の感じだよ。いや、こゝは三月でも四月でも、春の海ひねもすのたり〳〵かなつて風にはいかないよ。どうしても外海は冬の凄愴と、夏の豪快の感じだね。」

靖也は障子を開けて見た。

蒼く暮てゆく空の下に、幾百の白馬が頭をもたげて競ひ狂ふやに轟々と泡立つて捲き崩れる浪の姿は、勇ましくすさまじかつた。

「壯觀だね。」

彼は柱にもたれて微笑した。

「寒いよ。」

「まあ、見たまへ。この空と海の色を！」

「おい、寒いよ。障子を閉めたまへ。」

「壯觀だよ。」

「壯觀だつてなんだつて、寒くつてたまらない。早く閉めたまへ。」

「はゝゝゝ。君が病人だか、僕が病人だか、わからないな。」

「君はもうすつかり全癒したのだ。病人ぢやない。君はこゝで、たゞもとの元氣を回復してくれゝばいゝのだ。」

「元氣を恢復するために、海を見てゐるのだ。」

「理窟をいつちやいかん。監督者の命令だ。障子を——閉めろつ！」

高柴は號令をかけるやうにいつた。

二人はまた顏を見あはせて笑つた。

——なにごとも忘れた、暢氣な快活な日が過ぎた。朝は七時に床を出て、すぐ溫泉に入る。それから靖也は氣のむくまゝに讀書、高柴は宿の一閑張の机を借りて、原稿紙にペンを走らせた。その間にも、高柴の滑稽諧謔は靖也を笑はせつゞけに笑はせるのであつた。

彼は戲曲を書きながらも、調子が乘つてくると、急に彼が描きつゝある人物の聲色をつかつたり、身振りをしたりして、ひとり賑やかに騷ぎたてた。また、思ふやうにペンが動かぬと「ウーン」とうなつて、原稿紙を睨めつけ、壁を睨めつけ、天井を睨めつけ、それでも足りぬと、靖也の顏まで睨め

つけた。それがまたをかしかつた。靖也が笑ふと、

「人の苦しみを見て笑ふなんて不人情な男だ。あゝ」

とばかり仰山らしく長大息を漏らす。——かと思ふと、すぐ口笛を吹いたり、英詩を反誦したり、しまひには大島節や佐渡節など、頓狂に唄ひ出す。なにがなんだかわからない。要するに茫だ暢氣で屈託がない。靖也も知らず〳〵、彼のあかるい氣分に感染して、すべてを忘れてしまふのであつた。

——ところで、この逗留の四日目である。——朝食をすませて、靖也が東京の新聞をひろげてゐるところへ、タオルをブラさげながら、高柴が躍るやうな歩調で、部屋へ歸つて來た。

「大層長湯だな。溫泉でおめかしでもあるまい。」

靖也は笑つた。

「溫泉情調つてものを知らないね、君は。——ゆつたりと浴槽につかつてゐると、いろんな變つた顏が、あちこちにニヨキ〳〵浮んでゐる。それを見てゐるのが茫だ愉快だよ。お互ひに心持よくうだりながら、自然に言葉をかはすやうになる。どうです、景氣はつていひたくなる、そして宿に泊つてゐる人々に、だん〳〵親しくなる。つまり浴場が社交室だつてわけさ。そこが溫泉の一種の情調なのだ。……君みたいに、ほかの人達にはまるで無關係な顏をして、ツイと入つてツイと出るだけぢやなんにもならない。君はまさに、浴場をダンテの地獄にする人間だ。」

「ダンテの地獄？……なぜだ。」

「ダンテの描いた地獄に、泥濘地獄つてやつがある。大きな泥沼みたいな中で、首ばかり出して、澤山の人間が喘いでゐるのだ。みんな無關係に、自分の苦しみだけを苦しがつて、フウ〳〵してゐるのだ。君が浴槽に入つてゐる態度は、まるでこのダンテの泥濘地獄にあたつてゐる。たゞ默つて、眼をつぶつてジツとしてゐるのだ。見てゐていかにも變屈に苦しさうだ。浴場はそんなものぢやない。すくなくとも日本の浴場史觀からは、あんなシヤチコ張つた無言の行はいけない。三馬の「浮世風呂」を讀んでも、浴場はたしかに社會生活の最上の交際場であつたことがわかる。漱石の「猫」にも、浴場は上下貧富の差別なく、みんな裸の一切平等のつきあひができるので、面白いつていふやうなことが書いてあつたぜ。」

「なるほど。」

「人生はすべからく素つ裸だ。素つ裸でつきあはねば、人間の眞實はわからない。」

「それはまつたくだ。」

「お互ひに隱しだてとか、心の隔てがあつてはならない。すくなくとも君と僕の間にはね。」

「無論の話だ。」

「そこで僕は、大いに君に抗議しなけりやならんことがある。」

「抗議？」
「君は僕に隠しだてがある。甚だ面白くない。」
「なに、隠しだて？　……そんなことがあるものか。」
「きつとないか？」
「ない。ないとも。」
「いよ〳〵か？」
「なにを言ふのだ、今更……はゝゝゝ。」
「よろしい。」と、高柴はグツと大きく頤をシヤクつて、「大いによろしい。……ところで、いま浴場の歸りに帳場から貰つて來たのだが、こりやあなんだ？」
「え……？」
靖也は怪訝な眼で、高柴が懷中から、さも重大なものらしく引き出したものを見た。それは一枚の小形な西洋封筒であつた。
靖也は、三四尺はなれた高柴の手にある文字を讀んだ。そしてハツとした。
「どうだ。その封筒は？」
「……」

「なんとどうぢや、恐れ入つたか。」と、聲色まがひにいつて、高柴は笑ひながら「朝倉美知子――こりやあ、いつたい、どこの誰なんだ？」
「あゝ、美知子さんか。その人は朝倉重憲つて人の……」
「朝倉重憲つて、あの、貴族院議員の？」
「さうだ。」
「あの朝倉子爵の令嬢なのか？」
「……さうだ。」
靖也は新聞を膝から落して、坐りなほした。
「ぢやあ、この令嬢だね。君が自動車の衝突の時、助けようとして怪我したのは？」
「……うむ。」
「さうか……まだお會ひしたことはないが、朝倉子爵の令嬢といへば、評判の高い美人だ。」
「いや、形よりも、心の美しい人だ。」
「さうかね。」
高柴は、靖也の態度があまりに眞面目になつたので、もつとからかひたさうな顏を、急にやめてしまはなければならなかつた。彼は默つて封筒を靖也の手に渡した。

「高柴君……この人については、いつか君に話さなければならんと思つてゐたのだ。」
「聞かう。大いに聞かう。」
「率直にいふ……」
「うむ。」
「僕は……」
「うむ。」
「僕は、この人を……」
「うむ。」
高柴は乗り出した。
「……」
靖也は苦しげに默つた。
「なんだ。率直にいふといつて、ちつとも率直らしくないぢやないか。君が率直にいふといふから、僕も率直に聞かうとしてゐるんだ。さあ、率直にいつて……それからなんだ?」
「高柴君……僕は……僕はこの人を愛してゐる。」
「うむ。」

「そして……」
「うむ。」
「……そして……」
「わかつた。うむ、わかつた。その美知子さんも君に愛をもつてゐるといふのだらう?」
「高柴君……」
「わかつた。いや、よくわかつた。」高柴はもう靖也になにも言はせず「それは當然のことだ。さうあるべきことだ。いや、よくいつてくれた。いや、頗る愉快だ。うむ、うむ。」
靖也はジツと考へ込んだ。
高柴はむやみに嬉しげに、机の位置をなほして、この愉快さで原稿を書くのだといはぬばかり、威勢よくペンを取りあげたが、
「おい。なにを考へ込んだゐるんだ。もう考へる餘地なしぢやあないか。……おい。障子を開けたまへ。」
「え、障子を?」
「こんどは僕が海を見るんだ。空を見るんだ。光り輝いた自然を見ながら、この大傑作の戯曲を書くんだ。」

靖也は立つて障子をあけた。

うらゝかな春光にみちた海と空が、いつぱいに見はるかされた。

高柴は萬年ペンで、コン〳〵机をうつた。

「さあ、君もこの光りみなぎる海と空を見るんだ。光り輝く自然を見るんだ。——いや、待つた〳〵まづその前に、君の手にもつた、その手紙を早く見るんだ。はゝゝゝゝゝゝ！」

正午を過ぎたばかりの、ほがらかに澄んだ日光の下に、靖也と高柴は立つてゐた。

旅館の裏庭の、この小高い築山からは、あかるい樹々と屋根庇の間から、遠い海の一部分が、青ガラスをはめ込んだやうに、キラ〳〵と空と反映してゐるのが見えた。

韃！　韃！　……韃！

捲いては碎ける浪の音が、爽快に耳に響いた。

兩人は、向きあふでもなく、また肩をならべるでもなく、しばらく無言のまゝ、立ちつくしてゐるのであつた。

微風すらない。高柴が喫かす煙草の煙が、スイ〳〵と、羊毛のやうに輕くたゞよつて、頭の上を一

二間も昇ると、フツと日光の中に融け込んでしまふのであつた。

「實にいゝ天氣だ。酒精のやうな天氣だ。」

高柴がいつた。

「酒精のやうな。」があまり奇拔なので、靖也は高柴の顏を見た。

「ホカ〳〵して、透明で、まるで酒精のやうな天氣だ。……や、ウーン！」

高柴は、兩手を高く突き出して、反りかへるやうに伸びをした。

「酒精のやうな……妙な形容だな。」

靖也は笑つた。

「これが新感覺派の形容さ。いや、新々感覺派の形容さ。や、ウーン、や、ウーン！　……あゝ、いゝ心持ちだ。」

「新々晩酌派の形容だらう。はゝゝ。」

「この燦爛たる太陽のもとで、かう思ふさまに伸びをすると、手のさきが天國まで屆くよ。僕のやるとほりにやつて見たまへ。や、ウーン、や、ウーン！」

高柴はつゞけざまに反りかへつて見せたが、ヒヨロ〳〵とよろめいて、尻餅をついた。

「はゝゝ、駄目だね。やつぱり地びたに倒れるぢやあないか、人間は天國のなんのといつても、足の

裏は大地からはなれることはできない。——駄目だ。」

「ところが世間には、單に本さへ積んでゆけば、それを足場にして天國が覗けるつていふやうな顏をしてゐる學者があるし、金箱さへ重ねてゆけば、それを梯子にして天國まで昇れると思つてゐる實業家がある。そのくせ、積んだ本や、重ねた金箱は、ちよつとゆすると、ガラ〳〵と崩れてしまふことを知らないのだ。あいつ等は人間の眞實と信念とによつて、天國見物が易々として出來るものだといふことを知らない。ダンテやスエデンボルグなんか、天國の狀況を實にくはしく書いてゐるが、あれは所謂「見て來たやうな嘘をつき」では決してないのだ。あれは眞實と信念によつて、ちやんとたしかに天國を見屆けたのだ。僕もいまに、眞實と信念によつて、空想や妄想でない天國を戯曲に書いて見せてやる。」と、高柴は起きあがつて著物の砂をはらひながら「君もいまに、君の眞實と信念によつて、立派な船をつくる。その船のマストの先は、きつと天國に屆くんだ。愉快だな！」

「おゝ、さうだ。僕もきつと、そんな立派な船をつくつてやるぞ。——眞實と信念——まつたくさうだ！」

靖也は勇んで大空を見あげた。

「賴むぜ、君塚君！　立派な船をつくつてくれ！　……天國に敷きつめられた柔かな絨氈が、君の船のマストの先にひつかゝつて破れて、天國から君に損害賠償を訴へてくるやうな、そんなどえらい船

をつくつてくれ！」

「うむ。つくる。きつと、つくつて見せる。君も立派なものを書いてくれ！」

兩人は勵まし合ふやうに握手した。

「その船が出來たら、君は美知子さんの手をとつて、マストの上から、一度ゆつくり天國見物をして來るんだね。」

「うむ……」

「僕はなんだか、無闇に愉快になつた。今夜も大いに祝杯をあげたいな。君の所謂新々晩酌派としてね。どうだ、異議があるか。」

「うむ……」

靖也は微笑した。

「どうだ。美知子さんから、なんといつて來た？」

「なに、あの手紙は、その後どうしてゐるかつていふ、見舞の言葉だけなのだよ。」

「なんだ。それつきりか……すこし物足りないな。君は今日返事を書くだらう。その返事のなかへ、僕も一筆、君の第一の友人としてまた監督者としてなにか二三行書き入れたいよ。」

「うむ。是非書いてくれたまへ。」

兩人は又ブラ〳〵歩き出して、樹立の中の小さな亭に入つた。

その縁に腰をおろすと、高柴はいつた。

「君塚君、僕はなんだか、身體ぢうがムヅ〳〵するほど嬉しいよ。君の怪我も案外はやく癒えて、指一本損じないでゐてくれる。元氣もすつかり恢復してくれる。そして君の前途には、新らしい仕事が待つてゐる。それからその仕事に熱と力を與へるべき、美しい光が現はれた。すべては祝福されてゐる。萬歳だ。——この上は、頼む。自重してくれ。自愛してくれ。みづから守つてくれ。」

「有難う。」

靖也の眼には涙があつた。

高柴は消えた煙草を、勢ひよく遠くへ投げた。そして高らかにうたつた。

O Spring! of hope; and love and youth, and gladness, Wind-winged emblem! brightest, best, and fairest!

「——誰の詩だ?」

「シエリイの詩さ。希望と愛と若さとよろこびにみちた春! 光りと美しさにみちた春をうたつたのだ。新しい力が、更に新しい最上の世界をつくることをうたつたのだ。この詩で君をちよつと祝福したのだよ。」

「有難う!」

「それから美知子さんも祝福したのだよ。」

「……」

「默つちやいかん。君の口から、美知子さんに代つて、有難うといつてもらひたいね。」

「……有難う。」

「なんだ。そんな低い、景氣のわるい有難うは有難くない。もつとハツキリ、もつとしつかり、有難う! と、いつてくれたまへ。」

「……有難う!」

「それでよろしい。」と、高柴は、愉快げに笑つた。——が、「時に君塚君、この頃、龍子さんが、君に妙に接近しようとしてゐるさうだね? 病院にゐる時も、なんだか君を困らしたつていふぢやあないか。僕はそれを小母さん(康子)から聞いたのだが、それが事實なら、君はよほど用心せんといかんよ。あの女は恐ろしいぜ。」

「うむ……」

靖也は急に苦い顔をした。

「いつたい、どうしたのだ? どんなことをいつて君を困らせたのだ? すつかり僕に言つてくれた

まへ。」
「……龍子さんには、まつたく困りぬいてゐる。あの人は、いまさら僕に要求してはならないものを要求してゐる……」
「そんな抽象的な言ひかたをしないで、つまり龍子さんは、君に愛の復活を迫つてゐるのだらう？」
「……さうだ。そして……」
「わかつてゐる。あの女のことだ。良人を棄てゝも、君の愛を得たいといつてるのだらう？」
「うむ……」
「怪しからん女だ。英國にゐる時からこつちへ歸るまで、さんざ君の眞實の愛を愚弄した態度をつゞけて、苦しみに苦しませて置きながら、いまさら君に破廉恥な愛を強要するとは、實に憎い、怪しからん女だ。無論君は手きびしくはねつけただらうが、あゝした女は、うぬぼれた矜持のために、また執念ぶかい我儘のために、どんな企らみをするかもわからんから、充分用心して、絶對に顏をあはせぬやうにしなけりやいかんよ。君の前には、新しい美しい光がある。その光の中に、惡魔の影を投げさせてはならぬ。かさねて言ふが、充分自重してくれたまへ。みづから守つてくれたまへ。」
「有難う。大丈夫だ。」
靖也は强くうなづいた。

それから、とりとめもない雜談が、しばらく續いたが、高柴はまた思ひ出したやうに、
「――時にまたをかしな話がある。小宮が隈部鐵工所へ、こんど上級の技師として入つたさうだぜ。」
「え、小宮君が？――あの××船渠會社をよして？」
「さうだ。君が入院してゐる間にきまつた話ださうだが、隈部鐵工所といへば、君の叔父さんの出てゐられる造船會社とは、とかくに事業上の感情が、圓滑にゆかないで、今では絲緣同樣になつてゐるといふぢやあないか。さうすると、君と小宮とは、自然敵味方の關係になる。あいつなか〳〵佞奸邪智にたけてゐるから、君も仕事が同じ上から、用心が必要だよ。」
「だつて小宮君は小宮君の仕事、僕は僕の仕事――別々のところで、別々に働いてゐるんだ。用心のなんのと、どうしてそんなことを言ふのだ？」
「いや、あいつは君に、外面上は巧みな笑ひ顏を見せてゐるだらうが、心のうちではどんなことを考へてゐるかわからない。油斷はならない。」と、高柴はいましめるやうに、「ことに龍子さんのことではあいつが君に、どんな惡い感情をもつてゐるか知れないのだ。」
「え、そりや、どうして？」
「君にはわからないのか？――あの男が龍子さんに、不純な戀をしかけてゐるといふことが？」
「どうして、それが君にわかる？」

「そこはふだん人間の義理人情をとり扱つてゐる戯曲家の直感さ。僕はすべてをちやんと直感してゐる。しかもこの直感に誤りはない。いゝか、用心してくれたまへ。あいつは、龍子さんが、君に迫りつゝあることも知つてゐるぞ。自分の不純不潔をよそにして、内心君を恨み君を仇としてゐる。あいつのことだから、どんな奸謀を弄するかもわからない。勿論僕も、よそながらあいつに監視はおこたらぬが、君自身の用心も必要だ。あいつも龍子さん同様、決して身邊に近づけてはならない。」

「うむ。注意しよう。」

「ほんたうに注意してくれたまへ。」

——風が出はじめた。浪音が高くなつた。

「すこし寒くなつて來た。部屋に歸らう。」

高柴は立ちあがつた。

「うむ。歸らう。」

「溫泉に入つて、それから美知子さんへ兩人で手紙を書かう。」

「うむ。」

彼等は築山を下りて、庭づたひに部屋へもどつた。

高柴は、原稿紙を五六枚出して、靖也にペンをとらせた。靖也が書き終つた餘白へ、彼は、叮嚀な

挨拶と自己紹介とを書き、それから、自分が君塚君の監督者としてついてゐる以上、大いに安心して頂きたい、決して酒などはすゝめないと書いた。靖也は笑つて、高柴君は監督者の名のもとに、酒を強ひて困ると書いた。高柴は、またそのあとへ、いづれが眞、いづれが僞なりや、あなたは信じなければならぬはうを、お信じなさいと書いた。

笑ひながら封筒に入れて、靖也は女中に投函を命じた。

——その夜、高柴は祝福だ〳〵といつて、ひとりで酒を飲んで氣焰をあげた。最近、東京の或る大劇場で上演された、某老大家の作などは、皮肉な比喩と諧謔に富んだ彼一流の論法によつて、完膚もないまでに、たゝきつけられてしまつた。それから、銀座を散歩するモダン・ガールがやつゝけられた。再び龍子がやつゝけられ、小宮がやつゝけられた。彼は、そのくせ酒量はすくないので、二本の德利を持ちあつかひながら、海老の樣に眞赤な顏をして醉を吹いた。

酌をしてゐる女中も、飯を食ひながらそれを見てゐる靖也も聲をあはせて笑つた。

女中が膳部さげてしまふと、彼は、頭をフラ〳〵させながら、「さあ、いよ〳〵大傑作を完成だ。」といつて、机に向つたが、もとよりペンは動かなかつた。一二行をやつと書いたと思ふと、そのまゝ疊の上にゴロリと倒れて、すぐ他愛もなく鼾をかきはじめた。

靖也はソツと立つて、ひとりで押入れから蒲團をひつぱり出し、高柴の床をとつてやつた。靜かに

高柴を抱きおこして、蒲團の上に運ぶと、彼は、縁に出て、ガラス戸越しに夜の海をながめた。

くまなく晴れ渡つた月光のもとに、大きな浪が、銀のしぶきをあげて輝き散つた。

靖也は、この浪よりも幾十倍か、幾百倍か大きな怒濤狂亂のなかに、小ゆるぎもせず巍然たる城廓のごとくにそびゆる、一萬噸、一萬五千噸、二萬噸の船のことを思ひうかべた。——いつしか彼は、兩の拳を痛いほどにぎりしめてゐるのであつた。

「……ほんたうだよ……自重してくれ……みづから守つてくれ……」

高柴の聲がした。

靖也はちよつと驚き怪しんで、部屋をのぞいて見た。

蒲團から胸まで出して、醉つた高柴は前後不覺に眠つてゐた。

寢言をいつたのか——と、靖也はクスリと笑つた。が、夢寢にも自分のことを忘れてくれぬ眞情に彼は心に「有難う」といひながら、蒲團にむけて頭をさげたのであつた。

山の祈り

靖也が轉地してゐる間に、留守宅では、母の康子が、暇々に彼の冬着のほどき物や、また、春の不

斷着を新らしく縫ひあげて置かうとした。靖也は、小さつぱりした木綿の飛白が好きだつた。それで康子は、呉服屋からこまかい柄の久留米を取り寄せた。こんな時に、よくお加代に針仕事を教へようと思つて、康子はなるべく彼女に手傳はせることにした。

「これは靖也の不斷着だが、お前の手でひとつ縫ひあげて御覽。あれが歸つて來たら、お加代が縫つたのだといつて着せてやる。靖也に笑はれないやうに、上手に縫ふのだよ。」

と、康子は、襟のくけ方、褄の形などを叮嚀に敎へてやつた。

「若旦那さまに笑はれぬやうにつて、わし、とても……」お加代は、恐る〳〵裁ち片を膝の上にひきよせたが、「わし、きつと、若旦那さまに笑はれる……わし、一生懸命にやつて見ますけど……」

「一生懸命にやれば、笑はれるやうなことは、ありやしないよ。お前は感心にものをよくおぼえるから、もう靖也の不斷着位立派に縫へるよ。」

「え……一生懸命にやります。でも、若旦那さまは、いつ頃お歸りでせうな？　わし、手がおそいから……急にできんと困るから……」

「十日位つて豫定で行つたのだが、高柴さんがあの通り呑氣だから、それに高柴さんには、できるだけゆつくり遊ばせて、元氣をつけてやつてくださいとお賴みして置いたのだから、まだ〳〵歸りはしないよ。今夜靖也に手紙を出すが、その中へ、お加代が今日からお前の着物を縫ひはじめて、急には

できあがらないといつてゐるから、ずつと長く逗留しておいでといつてやらうかね。」
康子は、輕く笑つた。
「あれ、そんな……わし一生懸命に早く縫ひます。若旦那さまにおそく歸れつて……そんな手紙書かずに置いて……」
お加代は、もう康子の言葉を眞にうけて、オド〳〵しながらいつた。
「戯談だよ。お前はどうも正直すぎていけない。いや、しかし、その正直は、お前の一番にいゝところなんだから、正直すぎてくれないぢやいけないが……」
康子はまた笑つた。
お加代はそれから、ほんたうに懸命に針をうごかした。夜は、自分の部屋に縫物を持ちこんで、一針〳〵々々に注意ぶかい眼を見はりながら、動かぬ指をもどかしがるやうに、仕事に熱中した。
靖也の袷が、彼女の手によつて出來あがつたのは、それから三日目の夕方ぢかくであつた。
「ほう。早く出來あがつたのね。なか〳〵よく縫へてゐます。お前も、これだけの仕事ができるやうになつた。感心だよ。」
と、康子は彼女の差し出した着物を、ひろげながらいつた。
「若旦那さまのお氣に入らなんだら、わし、申しわけがないのですが。」

と、お加代は心配さうにいつた。
「いゝえ、これで充分。よくできましたよ。いまね、靖也から葉書が來て、明後日は歸ると書いてあつた。すこし間に合ひすぎた位だよ。結構々々。」
さういはれて、お加代はまつたく嬉しかつた。彼女の顏は輝いた。
「若旦那さま、明後日お歸りでございますか？　もうお身體は、ずつとよくおなりでございますか？」
「あゝ、すつかりもとどほりの元氣になつたといつて來た。歸つたら、すぐ仕事にかゝるといつて來ましたよ。」
「まあ？　早くよくおなりくださつて……それでも、明後日なら、十二日になります。二日ながくおいでました。十日なら、間にあはなんだのでございます。」
「なに、歸つて來るのは夕方だから、豫定のとほり十日目で歸つて來ても、いま縫ひあがつたところへちやうど玄關から入つて來る位で、やつぱり間に合つたよ。ほゝゝゝゝ。ほんたうに御苦勞さまだつたねえ。」
康子は滿足らしく、また着物をうちかへして見た。
——それから半時間の後だつた。お加代は靖也の部屋の掃除を終へて、ソツと本棚の上の、アルバムをひき出し、一枚々々めくつてゐた。靖也の學生時代の寫眞がそこに幾つも貼られてあつた。彼女

は、自分が縫ひあげた着物を、心のなかでその寫眞に着せて見ながら、ニツと恥かしくひとり微笑んでゐた。

もう十二時を過ぎてゐた。良助とお加代の部屋にあてられた、湯殿のわきの六疊でも、そろ〳〵寢支度にかゝつてゐた。

お加代が敷きならべた木綿蒲團の上へ、良助はヤツト腰を落しながら、疲れた手足をのばしてゐた。いまゝで臺所の土間で、洗濯物をしてゐたお加代は、氷のやうにつめたくなつた兩手を、消えかゝつた火鉢にかざしながら、しきりに擦りあはせてゐた。

「お加代、お前ももう寢るがいゝよ。昨夜も大分ながく起きて縫ひ物をしてゐたし、今夜も洗濯なんかして遲くなつたり……無理をして身體がわるくなるといけない。」

「なに、お父つあん、わし、こんなに健康だからな。」

「健康でも、生身の人間だよ。働くのはいゝが、それでかへつて身體をわるくして寢込むやうなことでもあると、折角働いてをりながら御奉公ができんことになる。いゝか。」

「あゝ。」

「さつき大奥様のお部屋の雨戸をしめてをると、大奥様は、お加代はこの頃お針仕事がよつほど上手になつたといつて、ほめてくださつたよ。」

「さうかな。」と、お加代は嬉しげな顏をしたが、「若旦那さまに、あの着物、お氣に入るか知ら？　お氣に入らいで着てくださらなんだら、わし、大奥さまに、なんというてお詫びしようか……？」

「あの着物は、よく縫へてをつたよ。若旦那さまは、お前が一生懸命に縫うたことをお知りなさつたら、きつと、よろこんで着てくださるよ。」

「さうかな？　それだと、わし、うれしいがな。」

「ほんたうに、お前とわしとがかうして一日を樂に過してゆけるのも、大奥様や若旦那様のお蔭だ。さうしておかくれになつた大旦那様のお蔭だ。……あの時、大旦那様がおいでなさらなかつたら、今頃、わしとお前はどうなつてをるかなあ。考へても恐ろしいことだ……」

「お父つあんは、お山の木を盗んだといふので、暗い牢へ入るし、お母さんはわしを生んだばかりで病氣……それに、兄やは、どこへ行つたかわからんのだし……ほんとうに恐ろしいことだな。もしその時、大旦那さまがお父つあんを助けてくださらなんだら、わし、今頃……」

お加代も恐ろしげに、身震ひをした。

「さうだ。お前は盗人の娘といふことになつて、誰も相手にされず、どこをどんな風でうろついてを

ることか……山の叔父だつて、あのやうな正直ないつこく者だから、盜人の娘は育てられんというてお前を引きとつてこれまでに大きうしてはくれなんだらう……」

良助も、いまさらのやうに難有さうに、眼に見えぬ影にぬかづいたのであつた。

「お父つあん。兄やは、どこにをるんだらう？」

「さあ、どこにをるかな……」

「どこにをるかわかつたら、わし達がこのお家にをることを知らせてやつて、兄やもこゝへ置いて貰うて、三人で働くとほんたうにうれしいのだがな。」

「さう……だな……」

「兄やも立派な人になつて、今頃、わし達を探してをるかも知れんな。」

「いや、そんなことはない。もしわし達を探してをるのなら、山の叔父へ聞きあはして見ればなんとかわかるのだ。それを一向に消息がないのだから、探してはをらんよ。また、わし達を探さん位だから、立派な人間にもなつてはをるまい。立派な人間になつてをるなら、その出世を見せたいのが、親や兄妹にむけての情愛だし、義理といふものだが、それがもう十何年といふもの、まるきりゆきがたがわからんところを見ると、どんなことをして暮してをるか……」

「お父つあん。兄やに會ひたくはないかな。わしは、時々、會ひたうてならなくなる。」

「それはわしも會ひたいには會ひたい。が、會つて見て、立派に出世してをらずとも、まつとうな人間になつてゐてくれゝばいゝが、もし、道をまちがへて、わるい人間にでもなつてゐたらば、會つて苦しみを増すことになる。……會ひたいのは會ひたいが、會ふのはなんだか恐ろしい……それよりは會はないで、あいつは立派な人間になつたらうと思つてゐるはうが、どれほど樂しいよ……いや、會はんはうがいゝ……わしは、お前と二人だけでかうして働いてをるはうがいゝ……」

「さうかな……」と、お加代は、ヂツと考へ込んだが、「いや、兄やは、きつと立派な人間になつてをるよ。わしの兄やだもの……きつと……」

「あいつは、ちひさい時分から、なか〳〵智慧もあつたし、腕っ節も強かつたから、眞面目で働いてゐてさへくれゝば、すこしは、もう、人の頭に立つて、やつてゆけてると思ふが……」

「さうだよ、さうだよ。お父つあん。きつと兄やは、立派になつてをるよ！」

「しかし、北海道のはうへも消息がないことを思ふと……」良助は、ちよつと暗い顏をしたが、「いやもう、こんな話はよさう。なあ、お加代、今夜はもつと、ほかの面白い話をしながら寢よう。」

「……でも……わし、兄やに會ひたいなあ。」

「お加代、山ではもうそろ〳〵、カルシめのこのお祭りをする時だな。」

良助は、話の穗先をつぎ變へるやうにいつた。

「あゝ、さうだ。もう、カルシめのこめお祭りだな……」お加代は、まばゆい山の雪を、遠く仰ぎ見るやうな眼をしながら「カルシめのこは、今年も生きてもどるかな……カルシめのこは可哀さうだ……」

「お前はよく、あのお祭りに、聲がいゝからといつて、カルシめのこの唄をうたはされたもんだな。」

「あゝ、あの唄も、わし、好きだ。……好きだけど、うたふと今でもカルシめのこが可哀さうになつて、涙がこぼれて來て……」

——それは、かうした哀話なのであつた。

まだ蝦夷の民族が、本州の東北部にひろがつてゐて、石狩の國のどの村も、アイヌ種族が全盛をほこつてゐた頃の事——山の麓の小さな村に、カルシといふ美しいめのこ（娘）がゐた。十七歳の彼女には、純潔な戀心が、深い雪の下に、陽春の光を待つてゐる鈴蘭の芽のやうに萠え出でゐた。ながい冬を越えて、なつかしい黑土を踏む時分ともなれば、瓣のさきのほのかな紅もはづかしげに、うつむいて香ひ出づる鈴蘭——そのごとく清くつゝましく、戀の花咲く時は待たれた。

彼女の戀人は、勇ましくたくましい筋肉をもつた、眉の濃いアイヌの若者であつた。

兩人はいつもうれしく顏をあはせて、黑土に眼もさめるやうな新綠のあらはれる日——それは彼等が人も羨む夫婦になれる日と定められてゐたのだが——を、指折りかぞへて待ちこがれてゐた。

或る日、若者は元氣よく身支度をして、弓矢を手に熊狩の人數に加はつて、山深く登つて行つた。——夕暮、思ひのほかの大きな獲物に歡呼して、人々が山を下らうとした時、若者の姿は見えなかつた。人々は若者の名を叫んだ。が、彼等の谺のほかに若者の聲はかへらなかつた。峰から谷を、人々は探しまはつたが、つひに無益だつた。

麓に歸つた人々から、戀人の危難を聞いたカルシは、狂氣のごとく、ひきとめる人々の手をふり拂つて、吹雪の中を山に駈け登らうとした。かよわい乙女の足は、風にすくはれ雪に彈かれて、幾百度かころんだが、彼女は屈しなかつた。聲は涸れて血を吐きながらも、彼女は若者の名を呼びつゞけた。

カルシがひとり山へわけ入つたと聞いて、彼女の父と兄とは驚いた。彼等は弓矢をもつて、彼女のあとを、まつしぐらに追つた。——が、もうカルシの姿は見えなかつた。彼等はむなしく麓の村に歸つた。翌日も翌々日も、熊狩の人々は彼女の父と兄とに助勢しながら、峰から峰、谷から谷を探しまはつた。——が、彼女の姿も、若者の姿も見えなかつた。

——かうして、十日、廿日ぢかくも捜索はつゞけられた。しかし、日に日に降りつもる雪は、峰や谷の形を變へるばかりで、遂に、父も兄も人々も、すべてを斷念して、神の救ひを祈るよりほかはなかつた。

雪の四箇月がすぎて、黑土のあらはれる時が來た。その或る日、カルシと若者の折り重なつた死骸

が、二つの峰を越えた谷間から發見された。かたはらに大きな熊が、のどぶかに矢を射込まれて斃れてゐた。カルシの肩には鋭い爪跡が、無慙にのこつてゐた。――若者が道を踏みまよつたか、雪崩に遭つたかして、谷間に落ちた時、彼は突然熊の襲撃をうけた。そこへカルシが飛び込んで、戀人のために身をもつて熊にあたつたが、たちまち跳りあがる猛獸の前足に斃され、若者も、ながい搭闘の疲勞のために氣を失つて、そのまゝ雪に埋もれてしまつたのだ――と、人々はそれにきめてしまつた。

哀れな戀にたふれたカルシめのこと若者は、それでも手と手とを、シツカリにぎりあはせてゐた。彼等は、いかにも滿足げに、やすらかな顏をしてゐた。カルシの父は、その場で涙ながらの夫婦の誓ひを、彼等にかはつて人々に披露した。雪が解けて黑土があらはれた時が、やつぱり彼等の戀の遂げられる時であつたのである。

その谷間には、その時から鈴蘭の花が、カルシの美しい戀心を宿して、年毎に咲きみちるのであつた。麓の乙女等は、この鈴蘭を、わざ〳〵二つの嶺を越えてわけ入つて摘んで來た。そしてわが戀の純潔と熱情の護符とした。谷間にもし鈴蘭が咲かぬ年があつたら、彼等は凶兆だとしてその年中婚姻には應じなかつた。今年も谷間に美はしの花咲き出でよ、わが戀よ、まどかにあれと祈つて、彼等はカルシの行方知れずなつた日に、そのいぢらしい心を唄にうたひながら、山の祭りをいとなむのであつた。そして鈴蘭の花が咲けば、カルシめのこが生きてもどつたといつて、麓の若い男女はよろこび

祝つた。――この風習がながく〳〵傳はつて、今でも山の祈りの一つにのこつてゐるのであつた。――

「ほんたうに、カルシめのこは毎年生きてもどつてくれるといゝがな……」

お加代はうるんだ眼を、ポツと夢見るやうにあげていつた。

「うむ……お前が、みんなにかはつて雪のお山を見ながら唄をうたつた時分には、きつと生きもどつてくれたがな……今はお前の唄をきかんから、生きもどつてくれんかも知れん。」

と、良助は笑つた。

「いゝや、種田のお高さんは、わしよりもずつといゝ聲で上手にうたうたよ。あの人がうたふからカルシめのこはきつと生きかへるにきまつてゐるよ。」

「あゝ、種田のお高――あの娘も、もう大きくなつたらうなあ。お前と幾つちがつたかな？」

「二つちがひだよ。」

「二つちがひとすると、もう十八だな。早いものだ。もうあの娘も、この頃では唄はうたはんで、谷の花を摘みに出かけて、そしてお嫁にいつてゐるかも知れんな。」

「あゝ、さうかも知れんな……」

「お前もそのうち、あの花を摘みに出かけるんだな。」

「嫌だ……お父つあん。」

お加代は顏を赭らめた。
「嫌ぢやない。もうお前には、今年か來年のうちに、あの花が要るんだよ。」
「わし……お嫁になんかいかないからいゝ。」
「ぢや、どうするのだ？」
「お父つあんと、ながくこのお家にをるのだよ。」
「馬鹿な……いつまでそんなことをいつてゐちやいけない。わしはお前がお嫁にゆくのを樂しみにしてゐるのだ。」
「嫌！　嫌！」
お加代は本氣に怒るやうに首を振つた。
「はゝゝゝ。困つたやつだ。」
良助はおだやかに笑つた。
しばらく良助は、お加代をあやすやうにからかふに、嫁入り話をつゞけた。お加代がムキになるほど彼は面白がつて、なか〳〵やめようとはしなかつた。そして實際、彼は近き日のお加代のしほらしい嫁入姿を、目前に描いて樂しんでゐるのだつた。――かうして人に仕へてゐる身分ではあるものゝ自分は正しい血統と、恥かしからぬ家柄をもつてゐる。たとひ今がどうであらうと、お加代には立派

な夫をもたせてやりたい。立派といつても、富や地位や權勢を望むのでは、もとよりない。氣性のやさしい身體のすこやかな、理非の分別にたけてゐる男をもたせてやりたい。自分は決して彼等夫婦にたよらうとは思はない。自分はこのまゝひとりでやつてゆく。忠實に君塚家の恩義にむくいて、まつとうに暮してゆく。そして彼等の樂しい生活をよそながら見守つて樂しんでゆく。それですべてが滿足である。ほんたうに善良な健全な夫――お加代の夫らしい夫を早く見つけてやりたい。彼女も今年が廿歳だ。いつまでかうして置けるものではない。――
良助は、無心に火鉢に手をかざしてお加代の姿を、ホク〳〵するやうに眼を細めながらながめてゐた。そして彼女の傍らに坐らせていゝ男の姿を、まぼろしのやうに思ひうかべた――凛とした、目鼻立ちの、情愛と理智と禮儀に正しい、男性的な或る形象が次第にハツキリした輪廓をつくつて來た。そのまぼろしの男は、どうやら誰かに似て來るやうであつた。突然そのまぼろしは輕い微笑をたゝへて良助のはうをスツと振り向いた。
「あ！」
思はず良助は聲をあげた。男の顏は靖也であつた。
お加代は驚いて、父を見た。
「どうしたの？　お父つあん。」

「いや……なんでもない。」
「でも、急に、大きな聲を出して……」
「なに、その、ちよつと忘れた用事を思ひ出したのでな。」
「どんな用事？　明日までにして置かにやならんことなら、わしがして置くから……」
「いや、明日でいゝ用事なのだ。」
「なんの用事？」
良助は困つて、
「いや、骸炭がなくなつたと思つたのだ。明日の朝、大奥様のお風呂を焚くのに……いや、明日の朝位はある。たしかにある。」
「さうかな。なけりやあ朝早く起きて、わし、炭屋さんに頼んで來る。」
「なに、大丈夫だ。まだ一度位焚けるだけ充分あつた。……おう、もうおそくなつたぞ。そろ〳〵寢るとしやうや。」
「あゝ、さうしよう。」と、お加代は火鉢を片づけながら「わしも、明日は、よく本棚や机やを、綺麗にして置かにやならん。若旦那さまは、明後日お歸りなさるのだから。」
「若旦那樣は明後日お歸りになるのか？」

「あゝ。さつき、大奥さまにお手紙が來たのだよ。」
「さうか。そんなに早くお歸りなされずとも、せつかく湯治においでたのだから、もつとゆつくりして、お身體を充分なほしてお歸りなさればいゝに……」
「お身體はもうすつかりよくおなりなさつたのだつて。」
「だが、お歸りになると、あの御氣性だから、すぐ無理な御勉强をなさるにちがひない。それはよくない。ほんたうに、せつかく湯治においでたのだから、もつとゆつくりお遊びになつて……」
「でも、大奥さまが御心配なさるから。」
「なに湯治に行つておいでなさるのを、大奥さまが御心配なさるもんか。」
「でも矢張り健康になられたお顏を、大奥樣も早く見たいと思つておいでなさるに違ひないから……」
「お前も見たいと思はないのか。」
「……」お加代は、火鉢の灰をならした上にならしながら、「……お父つあんも見たいと思はない？」
「わしは……見たいには見たい。」
「それぢや、わしも見たい……」
父娘は眼をあはせて笑つた。
——十五六分の後、つかれた彼等は、枕をならべて深い平和な眠りに陷つてゐた。

十燭燈の暗い光りをさけて、壁へ顔をそむけながら眼を閉ぢたお加代の頰には、時々、夢の中の、また美しい夢をさがすやうな微笑が浮んでは消へた。――彼女はおほかた、山の乙女が、ゆくての幸を祈るべき鈴蘭の花の咲きみちた谷間に、ひとり立つてゐたのでもあらう。

八疊の、庭に面したあかるい座敷に、康子は美知子を迎へてゐた。

「まあ、結構なものを……いつも頂戴いたしてゐるばかりで、ほんたうに恐縮でございます。」

「いゝえ、小母さま、結構なものだなんて……」と、美知子は手の甲を輕くなでながら、「そんなこと仰有つて頂いては、かへつて氣まりが惡うございますわ。わたくしが拵へましたもので、大變なものでございますのよ。ほゝゝゝ。」

「おや、あなたのお拵へなされたものでございますか？　それは……」と、康子は膝に置いた紙函の紫の絹リボンをほどきながら、「失禮でございますが、ちよつと拜見させて頂きます。」

「あら、小母さま、こゝでお開けなさいましては、わたしほんたうに氣まりが惡うございます。どうかそのまゝ、お豪所へおさげくださいまし。」

「いゝえ、あなたがお拵へなされたものなら、是非、拜見いたしたうございます。……おや、まあ、

美事な西洋菓子！　これがお手製なのでございますか？　まあ！」

「嫌でございますよ。小母さま、どうか早くおさげくださいまし。」

「まあ、これは美事な……林檎のパイでございますねえ。まあ、ほんたうにおいしさうな。これはわたくしも靖也も大好物なのでございます。」と、康子はちよつと押し頂いて、「失禮でございますが、ほんたうにお器用でゐらつしやいます。やはりこれは、學校でおならひ遊ばしたものでございますかねえ。」

「いえ、本で讀みましたものを、一寸いたづらして見たのでございます。やり損ひで重樹（弟）にわけてやりますと、こんなお菓子まづいや〳〵と、大變な不評でございましたが、母がまあ一つ君塚さまの小母さまに御覽に入れて笑つて頂くがいゝと、さう申すものでございますから……ほんのお目にかけるだけで、召し上つて頂かうとは存じません。どうぞ、早くおさげくださいまして……」

「どういたしまして、これは是非、わたくしと靖也とで頂くことにいたします。靖也も明日歸つてまゐりますから、早速よろこばせてやるつもりでございます。」

康子は函に蓋をして、もとのとほりリボンをかけ、床の間の脇の、違ひ棚に置いた。

「君塚さまも、その後大變お元氣におなり遊ばしたさうで、ほんとうに嬉しいことでございます。明日お歸りのことも、あちらからお手紙を頂きまして承知いたしてゐるのでございます。小母さまのは

うでは、東京驛へおつきの時間が、おわかりでございませう？　わたくし、是非お迎ひに出たいのでございますが。」

「いゝえ、どういたしまして、あなたさまに出て頂くなんて……わたくしのはうへも、別に時間は申して參つてをりませんので……あの子は、どこへ旅に出かけましても、送り迎へされるのが嫌だと申しまして、どなたにも時間をお知らせしないのでございますよ。二年も英國に留學に行つて、歸朝して參りました時でさへ、わたくしのはうへは、時間を知らせて參りませんでした。一緒にお歸りになつた日比野先生と龍子さまが、お宅へ電報をおうちになりましたので、それからやうやく、到着の時間がわかつたやうなことでございます。現に、この前も秋田へフラリと出かけました時なども、たゞ心配するな、すぐ歸るからと葉書が一枚屆きましただけで、どこの宿に泊りましたか、いつの何時の汽車で歸りますのか、まるつきり知らせがないのでございます。あれの親友で高柴さんといふお方は二日ばかり、上野驛へ出かけて、朝の一番列車から、見張り同樣、迎ひに出てくださりました位で、ほんたうにお氣の毒でございましたよ。ほゝゝゝゝ。」

「高柴さまと仰有るお方には、まだお目にかゝりませんでございますが、よほど君塚さまとお親しいやうでございますねえ。」

「えゝ、あのお方とは高等學校以來のお友達なのでございますが、まるで兄弟も同樣で、めづらしい

仲よしなのでございます。また高柴さんといふ人が、竹を割つたやうな、氣持のサツクリしたお方で情義の深い、いゝお方なのでございます。それに靖也とちがつて、なか〳〵碎けた、面白いお方で、話してゐると、笑はせづめに笑はされるのでございます。こんどお會ひなすつて御覽じまし、そりや氣さくで愉快なお方でございますよ。」

「さうらしうございますねえ。」と、美知子は微笑んで、「君塚さまからのお手紙のなかに、あのお方が四五行ばかり、お書き入れなすつてゐらつしやいましたが、それだけでも、文句が實にをかしくつてわたくし、思はず聲を出して、笑ひ出したほどでございます。なんでも小母さまから、君塚さまの監督者であるやうにと嚴命されたから、死を賭してもこの大責任を果さねばならんといふやうなことが面白い文章で書いてございました。」

「おや、さうでございましたか？　ほゝゝゝゝ。」

「ほんたうに、君塚さまは、いゝお友達をお持ちになつて、おしあはせでございます。……そこへゆきますと、女といふものは、ほんたうにつまらないものでございます。學校にゐます時は、それこそ姉妹のやうに親しいお友達であつて、どんな秘密もなしに、苦しいこと、樂しいことをうちあけあつてゐたものが、もう學校を出てしまひますと、妙によそ〳〵しくなつて、結婚のこと、それから家庭生活のことを隱しあふやうになるのでございますもの。ほんたうにつまりません。仲がいゝといつて

ねたところで、お揃ひの著物を著たり、一緒に散歩したり、音樂會などへ出かける位のことで、一生涯をいゝ忠告者、いゝ相談相手になつて、ながく〳〵隔てのない交際を續けてゐる人は、まつたくひとりとしてないのでございます。――やつぱり女は、罪の深い者なのでございませうかねえ。かうして見ますと、男の方達は羨ましうございますよ。」

「さうでございますねえ。でも、女は仕方がございません。結婚しましては、なにごとも夫の生活なり趣味なりが主になるのでございますから、そこへ暗い影をちよつとでもさゝせてはならないことですし、そのうち子供でもできればまたその養育に手をかけねばなりません。お友達の交際などは、かうなると、第三段第四段といふことになるわけで、心ではいつまでも仲よくありたいとは思つてゐましても、自然に疎遠になり勝ちなのでございます。これはどうにも仕方のないことでございますよ。」

と、康子は見るともなしに美知子の、つゝましやかな居住ひに眼をつけたが、「……あなたさまのお友達では、もう御結婚遊ばしたお方もございませうねえ。」

「えゝ……もう、一緒に卒業した三分の二以上は、それ〴〵おかたづきなさいました。早いお方は、學校にゐらつしやる頃から、御婚約のあつたのもございます。」

「……あなたさまなぞは、御器量といひお氣立といひ、そのやうにお美しくおやさしくゐらつしやいますし、御身分からお家柄から、なに一つ申し分のないお方でございますもの、さだめて降るやうに

御縁談がおありでございませう。御兩親さまもどんなにかお樂しみのことで……」

「まあ、わたくしなんぞに、そのやうなことが……」と、美知子は顏を染めて眼を伏せながら、「……まだ〳〵わたくしなどは、なんにも家といふものについての智識もなんにもないのでございますから……これからどうぞ小母さまも、お心づきのことをお敎へ遊ばして……」

「どういたしまして、ほんたうに、唯今頂戴いたしましたお菓子でも、失禮ながら、まつたく御器用なのに感心いたしてゐるわけでございます。いつか、あなたさまから、西洋料理のことなど、敎へて頂かうと存じます。靖也は、脂つ濃い肉類のものが大變好きでございますから。……ほんたうに靖也にも、あなたさまの十分の一の、器量なり躾なりをもつた人を、妻にもたせてやりたいものでございます。」

「あら、小母さま、そのやうな……君塚さまには、それはいゝ奥樣が、いくらでもお貰へ遊ばすでございませう。父や母も、君塚さまの御氣質には、まつたく敬服してゐるのでございます。かうしてお元氣を恢復なされてお歸りでしたら、きつと大きな立派なお仕事をなさるにちがひありません。その時は、父も母も……わたくしも……どんなによろこぶことでございませう。」

――縁に面した障子の隅に、フト小さくうづくまる影が見えた。

「誰？　お加代かい？」

と、康子は聲をかけた。影は驚いたやうに動いた。ハタ〳〵と走る足音がした。康子は障子をあけて見た。

「御用があればいつてゆけばいゝに……默つて逃げ出すなんて、まあ、をかしな娘だよ。」

妖術

――靖也は、すつかり元氣になつて歸つて來た。蒼ざめた艶のなかつた彼の顏は、やゝ日黝んで健康らしくなつてゐた。わづかの日數の旅行だつたが、倒げた頰などにも、見なほせるほど肉がついてゐた。言葉の調子にも、聲帶が張りきつて、强く響くものがあつた。

なにゝしても、母の康子は嬉しかつた。去年の冬、秋田沖で彼のつくつた雄康丸が沈沒して以來かうした靖也を見ることはできなかつたのである。いや、今の靖也は、雄康丸の仕事にかゝつてゐた頃よりも、より以上の活氣があるやうに見うけられたのである。彼の暗く曇つてゐた眉宇は、晴れやかだつた以前よりももつと晴れやかであつた。決定的な熱情と勇氣と、更に新らしい希望の――或は野心とまでいつてもいゝやうな鋭くめざましく動く輝きがあつた。

康子が心づくしの晩餐をともにして、愉快に高柴が歸つた後、靖也はすぐ書齋に行つた。

「ほう！　綺麗に片づいたな。なんだか僕の書齋ぢやないやうな氣がする。」

彼はまつたく新らしい氣持で、勢ひよく椅子に腰をおろしながら、塵ひとつないまでに拭き立てられた、わがデスクの上を見た。

「毎日お加代が掃除したのだよ。それに昨日と今日は、お前が歸るといふので、また特別念入りに朝から掃除してゐた。あの澤山な本棚の本を、一冊づゝ持ち出して、たんねんにはたきをかけたのだよ。」

と、あとからついて來た康子がいつた。

「さうですか。あの女も、良助の律義な氣質を受けて、實に忠實ですねえ。ほんたうにあの二人には感謝したくなる。おゝ、さうだ。お加代にはお土產を買つて來てやつた。」

「おや、それはよく氣がつきましたねえ。あとであれに、御褒美だといつてやつてごらん。どんなによろこぶだらう。――おう、さう〳〵、お前の著てゐるその著物も、お加代が縫つたのだよ。なんでもお前の歸る日に間にあはせるといつて、四日前から、夜は一時二時までも起きて縫つたのだよ。そりやあ一生懸命だつた。まはらぬ手で、それでもとう〳〵縫ひあげてしまつた。なにをやらせても素直で熱心なところは、ほんたうに可愛いよ。」

「さうですね。」

「しかし、どうもあの子に、この頃、妙な氣持が出て來たやうだよ。時々、疑ふやうな眼でソツとわ

たしの顔を偷み見したり、お客さまとの話を立ち聞きしたりするのだよ。なんにも知らぬ、無垢な、あどけないところがあの子のいゝところなんだが、この頃それに、ひよつとすると、曇りがかゝるやうに思ふ。お前がよく、お加代は好きだといつたら、あの子もすぐ、わしも若旦那さまは好きだといつて笑つたね。その調子が、いかにもこだはりがなくつて可愛いかつたが、この頃では、めつたにあの子に、あんな言葉をかけてもらひたくないやうに思ふのだよ。」

「阿母さんお加代はまだ〳〵自然のまゝの心持ですよ。阿母さんこそ、あの女を疑つてゐるんです。あの女を疑つてやつちや可哀さうだ。あの女が偷み見や立聞きをするなんて……」

「いや、どうもさうでない。昨日も美知子さんがおいでなすつた時、いつの間にか障子のむかうで、ソツとなかの話を聞いてゐるんだもの。そしてわたしが聲をかけると、あわてゝ逃げ出したりなどするんだものね。」

「……美知子さんが昨日いらつしやつたのですか？」

靖也は椅子から重ねた片足をおろした。

「あゝ、明日か明後日には、一度お前、朝倉さまのお屋敷へ、お禮に行つてもらひたいのだよ。お前の留守中、奥さまや美知子さまが、かはるがはる三四度もおいでくだすつて、そのたびに結構な品を頂戴してゐるのだからねえ。」

「えゝ、參りませう。明日は、室田の叔父さんの家へ、これからの僕の仕事について訪問しようと思つてゐたのですから、そのあとを朝倉樣のはうへ廻りませう。」

「それがいゝよ……」康子は、ふとドアのはうへ耳をすませた。「誰？　お加代かい？」

「……はい。」

「なにか御用？」

「お茶をもつてまゐりました。」

「あゝ、さうかい。お入り。」

「はい。」

ソツとドアをあけて、お加代は紅茶茶碗を二つのせた盆をもつて入つて來た。

康子は思ひ出したやうに、

「あゝ、さう〳〵、いゝものがありますよ。昨日美知子さまから、パイを頂いたのだよ。美知子さまが、御自分でお拵へになつたのだつて……あゝした御家庭でありながら、どこまでも平民的にお育てなすつて、美知子さまはお臺所のことまで、女中と一緒になさるつていふが、つまり奥さまがおえらいのだねえ。……ほんとうに御器用でいらつしやるよ。……お加代、お座敷の違ひ棚に紐のかゝつた紙函が置いてあるから、持つて來ておくれ。」

「奥さま……すまんことをいたしました。」
お加代は、恐しげに臂をすくめて、頭をさげた。
「え？　すまんことを？　……なにをしたの？」
「さつき、若旦那さまのお時計を、あそこに置かうとしましたら、袖に鎖がひつかゝつて、落ちさうになつたので、びつくりして手を出すと、あの函を振り落して、疊の上へお菓子がこぼれて出て……」
「まあ！　……でも、わたしが紐でちやんとくゝりなほして置いたのだが――」
康子は、お加代の表情以外に、なにかを見つけようとするやうに、椅子から向きなほつた。
「……すまんことをいたしました。わるいことをいたしました。どうぞ、御勘辨なさつて……」
「……そりやあ、粗相だからしかたがないが、……いや、疊の上へ落ちたのでもかまはない。そのお菓子を持つておいで。」
「……お菓子、半分に割れて……どうぞ御勘辨なさつて……」
「どんなになつてゐてもいゝ、美知子さまの御厚意を靖也に見せてあげるのだから。」
「なあに、お加代、そんなこと心配しなくつてもいゝ。疊の上へころがつて出た位なんでもない。工場にゐる時は、埃のこびりついた皿の上のパンを、油に滲んだ手でつかんで平氣で食ふのだ。うちの疊は、工場の皿よりはズツと綺麗だよ。そんなことはなんでもない。僕はパイと聞いちやあ見のがせ

ない。はゝゝ。結構だ。持つておいで、こゝで食ふから。」
「……はい……でも、きたなうございますから……わし等がふんだ疊の上に落ちたんでございますから。」
「構はないよ。工場の皿なんぞは、賄の男が、腰にブラさげた手拭で、一寸はたいて持つて來るのだからな。あの手拭なんかも、人の見てゐない所では、あの連中は手を拭いたり水っ洟を拭いたり、亂暴な奴になると、足を洗つた時にそれで拭くといふことだ。構ふもんか、持つておいで。」
靖也は彼女に同情するやうに笑つた。
「……はい。」
お加代は、頭をさげて出て行つた。
「……あの子は、山そだちに似あはぬ、もの靜かで注意ぶかくて、今までついぞ粗相をしたことのない女なのだが……」
康子はなにか考へやうとした。
「なあに、いくらもの靜かだつて注意ぶかいといつたつて、人間はしくじる時には、しくじるものです。」
「それはさうにちがひないが……」と康子は、またヂツと考へて、「靖也、ほんたうにこれからは、あ

の子に、お前は好きだなど隔てのない言葉はいはないでおくれよ。」
「え……なぜです。阿母さん。」
「もう、あの子も、なんといつても年頃の女なんだからねえ。」
「……？」
「……どうもこの頃、あの子がお前に對する素振は、以前よりはよほどちがつて來たやうに思はれてならないのだよ。あれくらゐ主從の觀念の強い父娘は、今時めづらしいほどで、まさかあの子が、隔てを越えてお前にどんな心持も持つ筈はないのだが、それでも……」
「はゝゝゝ。まさか…… 阿母さん。……いや、そんなことを考へてやつちやお加代が可哀さうだ。あのなんにも知らぬ清い心を疑つちや……」と、靖也は手を振つた。そして話をそらすやうに、「さあいよ〳〵明日から仕事をはじめますよ。大分遊び暮しましたからね。……でもこの元氣で、今度は職工からやりなほしだ。室田の叔父さんによくお願ひして、菜っ葉服を着て働くんだ。愉快だな！」

翌日、靖也は元氣よく起床して、朝食をすますと、すぐ洋服に著かへた。叔父の榮藏は、横濱の造船會社に出勤するため、午前八時には家を出るので、その前に會つて置きたいと思つて、彼は半ば走

るやうな歩調で道をあるいた。西片町から小石川植物園ぢかくの叔父の家までは、電車では迂回することになるので、徒歩でゆくことにした。
腕時計の針を見ながら、彼は大股にグン〳〵あるいた。氣がせいてゐるので、摺れかふ人の顏なんぞまるで見向きもしなかつた。かうしてグン〳〵足を動かしながらも、彼は、自分にこんな元氣とこんな健康が恢復したのを、なによりも幸福に思つた。捲土重來の奮鬪だ！ 努力だ！ と、彼はわが耳へ叫びながら、勢ひよく兩手を振つてグン〳〵あるいた。彼の頰は血で熱く、額は汗ばんでゐた。
指ケ谷町の停留場から、電車線路を横切らうとした時、一臺の自動車が、まるで大きな爆發藥ででもあるかのやうに、彼の眼のさき一尺と隔てず、ブルツと飛んで行つた。あまり夢中にあるいてゐたので、危なく彼は車輪の泥よけに觸れるところであつた。驚いて足をとめると、
「間抜野郎！」
と、運轉手の罵る聲が、もう十間ほどさきを走りながら聞えた。
「自動車か……もうお前には懲り〳〵だよ。はゝゝ。」と、彼は苦笑しながらも、すぐまたグン〳〵あるき出した。「もう滅多にこの身體は怪我をさせちやならんのだ。僕の仕事はこれからなんだ！」
——しかし、考へやうによつては、こんどの奇禍は、不思議な光明と力とを、自分に與へる種ともなつた。日比野先生の家で催されたクリスマスの祭りの歸途を、無事に別れたなら、やつぱり美婦子

さんは、あのまゝ、一夕の客として、たゞ美しい姿が眼に殘つた位のことで、會へば普通一遍の挨拶をかはす程度に、あつちでも忘れ、こつちでも忘れる緣であつたかもわからない。あの人によつて、かうも自分に新らしい熱情や勵みが振ひ起されることは、無論、ないことであつたらう。して見るとこんどの奇禍は、奇禍にして奇禍にあらずと謂ふべきかも知れない。いや、すべてはむしろ、喜ばしい運命なのだつたのだ。雄康丸の沈沒に對する、一つの精神的な苦痛、それから自動車の衝突でうけた、一つの肉體的な苦痛、この二つの苦痛を與へて置いて、更に大きな仕事を遂げさせるため、自分は或る試練を加へられたのだといつてもいゝ。——やつぱり神は光明だ。力だ。——いや、美知子さんといふ手段によつて、光明と力とを自分に與へてくれたのだ。——なに、それは、勝手な都合のいゝ理窟だつて？　——しかし神の示す威容は、畢竟人間の、勝手都合のいゝ解釋によつて難有がられる以外のなにものがある？　——そんなことを笑ふ人間にこそ、いま運轉手が自分を罵つた言葉を、そつくりそのまゝ進上してやらう！

靖也は、ます〳〵活氣づいて、身體の重心を、前方に跳らせながらグン〳〵あるいた。

電話をかけておいたので、叔父はちやんと座敷に彼の席をまうけて待つてゐた。

病院から轉地までの、クド〳〵した感謝の言葉やら健康の報告やらは抜きにして、靖也は座につくとすぐ、

「叔父さん。この顏と、この腕とを見てください！」

と、いつた。

「よし、わかつた。」

と、榮藏も、滿足らしく胸をゆすつて笑つて、たゞ彼と握手した。

「こんなに生れかはつた新しい身體と心を、僕はもう一日も遊ばせては置けません！」

「よし、わかつた。」

「こんどの僕は、技師ぢやありません。一職工として使つて頂きますよ！　いつかお願ひした通りに。」

「それは……技師でいゝぢやあないか？」

「いや、僕は新しい身體と心に更生したのです。だから、はじめつから一職工として使つて頂きます。」

「よし、わかつた。」

「ぢや、明日から工場へ出させて頂きます。」

「よし、わかつた。明日から來たまへ！」

「難有うございます。では、これからまたどうぞよろしく……」

もう出かけねばならぬ時間だつたので、榮藏は遠慮なく座を立つた。靖也もともに玄關へ出た。もつとあとでゆつくり茶でも飲んでゆけといふ叔父の言葉に一禮したまゝ、叔父の自動車が動き出すと、

靖也は足を植物園から西に向けた。このまゝ徒歩で、高等師範學校裏に出るつもりだつた。――そこには朝倉子爵の屋敷があつた。

お加代は、臺所でひとり忙がしげに働いてゐた。フライ・パンは、ジュウ〳〵脂の音をたてゝ、唾液をそゝるやうな甘い匂ひが、さかんに立ちのぼつてゐた。彼女は注意ぶかく、そこに細い菱形をつくつたオムレツを見つめてゐた。手早く瓦斯の火を消すと、靜かに皿の上にそれをうつした。飯は夙に出來あがつてゐた。

午前六時――まだ、あたりは暗かつた。壁の上方にある明り取りのガラス窓に、ほのかな紅の光が射して、一面に凍てついた霜の花の或る部分が、小さな南京玉をつゞたやうに、美しくキラ〳〵してゐた。火の氣のない臺所は、身にしむやうに寒かつたが、雪國の生活に馴れた彼女は、かくべつ苦にもしなかつた。彼女は指さきのきれるやうな冷たい水道の水で、釜を洗ひはじめた。口の中で彼女は低くなにか唄つた。かうして働くことが、今朝は、殊になんだかうれしかつた。若旦那さまも今日からいよ〳〵お仕事のためにお働きなさるのだ。自分がいつもより早く起きて働く位のことは、あたり前である。父も今さき起きて、もう門口の掃除にかゝつてゐる。その箒の音にも、どうやら意氣込

みがある。眼に觸れるすべてが、たとへば軍の出陣の朝といつたやうな、おろそかならぬ氣に滿ちてゐる。――たゞわしをもつた彼女の手には、次第に力が籠つて來た。

ふたゝび瓦斯に點火して、お味噌汁の鍋をかけた頃には、康子も起きて、臺所に顏を出した。

「おや〳〵、もうすつかり支度ができたのねえ。」と、彼女はそこの柱時計を見て、「もう七時に近いねえ。そろ〳〵靖也を起さなくちや……」

「阿母さん。僕はちやんと起きてゐますよ。」

書齋からの廊下の、遣戸をあけて靖也が入つて來た。

「おや、お早う。……よく眼がさめましたね。」

「お加代も、良助も、阿母さんも、僕のために今日から一時間早く起きてくれるんだもの。その當人が安閑として寢ちやゐられませんよ。それに今日は××造船會社職工君塚靖也の、出勤第一日ですからな。職工といふものは、自分で火を起して、自分で辨當をつめて、大急ぎで湯漬飯をかつ込んで、會社へ駈け足で出かける筈のものなんですからな。」と、靖也は笑ひながら、そこにお加代が詰めてゐるアルミニユームの辨當箱をのぞいて見た。「やあ、オムレツだな。これは職工の辨當には過ぎてゐる。お加代、職工の辨當にこんなうまいものはいらんよ。梅干の三つも、飯の上から突込んで置きやあ澤山だ。」

「そんなこと……ほゝゝゝ。」
「まあ、お加代がみんなより早く起きて、せつかくこしらへてくれたお辨當だから、持つておいでなさい。」
と、康子はいつた。
「ぢやあ、今日は、御馳走をどうも有難う——とお禮をいつて頂いてゆくよ。いゝかい、お加代。」
「あれ、あんな……」
三人は笑つた。
鍋から勢ひよく湯氣が噴き出した。窓の朝日は、いつの間にかあかるく潑溂とした光帶をひろげて立ちのぼる湯氣のひろがりを、ゆたかに照してゐた。
靖也は食卓についた。
愉快げに飯をかき込みながらも、彼は幾度となく柱時計を振かへつた。
「さあ、七時だ！」彼は箸をすてゝ勢ひよく立ちあがつた。「これから横濱まで一時間。それからあるいて十五分！　なんだか出勤時間におくれそうだぞ。こいつは大變だ。今日からは遲刻、缺勤なしで精勤善行證を貰はにやならんからな！」

——かうして靖也の、新らしい希望にみちた生活の第一歩ははじめられた。朝八時から夕の五時まで、彼はなつかしい工場で、一箇の職工となつて働くのであつた。技師、職長、組長、伍長、それから平職ど階段のあるその技師から、一足飛びにたゞの職工となつてやり直すといふ彼の意氣を、工場の人々は怪訝と興味の眼を瞠つて眺めたのであつた。しかも彼は、この會社の重役として羽振りのきく室田榮藏氏の甥であることから、そして彼の學歴と才能とから、やがては技師長になることを、當然以上の當然として、信じきつてゐられてゐたことから、彼が久しぶりに復活して、この思ひきつた勞働をはじめたには、誰も彼も、まつたく不思議な心を抱いたのであつた。
「技師には技師としての研究なり經驗なりが必要だ。それは職工とは密接な關係があり乍ら、問題は全く別なのだ。君塚君が今さらあゝして職工として働いて見た所で、それは無意義といふものだ。」
彼の同僚である——いや、あつた——技師の一人は、冷笑したいやうな顏をしていつた。
「あの人のあの位置で、あゝした職工生活をすることは、ちやうど富豪の令夫人なんかが、研究とか視察とか自稱して、貧民窟をシヤナ〳〵素通りするやうな心持に似たものがありはしまいかどうかを疑ふよ。」
「一種の衒氣かな。嫌味といへば嫌味だね。」

と、ほかにも遠くから皮肉な眼で、強い焰を噴きあげる地爐の傍らで、一心に働いてゐる靖也の姿を見ながら、批評を加へる者もあつた。

もちろん彼のために辯護を試みる者も、ないではなかつた。——が、その辯護も、靖也がこれからまつしぐらに進まうとする、あの「一つの道」を理解し得たといふことではなく、單に世間並な氣の毒だといふ心持以上には出ないのであつた。第一の仕事であつた健康丸の沈沒から、彼が感じないでもいゝ責任を感じ過ぎて、再びかうしてみづから鐵槌を振つて働かうとする、弱氣に同情しただけのことであつた。

しかし、靖也は今は弱氣ではないのだ。彼の胸にはむしろ強氣の野心が燃えさかつてゐるのである。衆評の冷やかさも暖かさも、彼には論外なのである。彼はただ、高柴の忠告通り自分を堅く守つて、日比野博士から教へられた一つの道を、まつすぐに突き進まうとしてゐるだけのことなのである。自分の耳にチラと入る、以前の同僚の冷一句熱一言に對して、彼は不平も持たなければ滿足もしない。また抗議もしなければ感謝も表しない。自分と仕事——このほかに彼は脇目もふらなかつた。

鉸釘をうつ音、錐孔穿を鐵板に加へる音、節動輪や廻轉軸のすさまじく廻轉する音——大工場の四壁をゆらがさんばかり轟々と涌きあがる騷音のなかに、彼はわが鐵槌も一つに響けと、汗みづくになつて働くのであつた。フツとひと息ついて、窓外に眼をやれば、青く晴れた空たかく、赤く塗つた

塔形起重機が幾百貫かの大鐵材を輕々と捲きあげて、悠然と方向をかへる壯快さ。黑煙をパツ〳〵と吐きながらレールを走る移動起重機や、顏も手足も油に眞黑な、たくましい工夫等によつて押されてゆくトロツコなど、いづれをいづれ、彼の心臟を、新しい希望のために鼓動させぬものはない。

「よし來た！　もうひと働きだ！」

彼は夢中になつて鐵槌を振ふのである。

辨當の飯もうまい。一杯の水もうまい。

力だ！　——彼の鐵槌は更に響く。

光だ！　——彼の鐵槌は更に火花を散らす。

さうして、へト〳〵になるまで働いて、家に歸ると彼は、入浴してサツパリした身體を、のびやかに書齋の椅子に投げる。デスクには厚い洋書がひろげられる。いつしか熱心に、彼は鉛筆で數字の計算をやつたり、製圖道具をケント紙の上にあてがつたりして、時間のたつのを知らないのである。

こんな時に、きつとお加代は、紅茶とすこしばかりの西洋菓子を盛つた皿をさゝげて、ソツとドアを叩いた。或る晩は、手製だといつて、萩の餅をもつて來た。靖也が「難有う」といひながら、いきなり一つを頬張つて、パク〳〵やると、彼女はいつも嬉しげに、恥しげに、眩しさうな眼で、デスクの上の電燈を、笑ひながら見つめるのであつた。

――一ケ月が過ぎた。

靖也は毎日、元氣よく出勤した。夕方家に歸つて見ると、時々、美知子が母を訪問してゐた。彼がブラ下げた辨當箱は、玄關に迎へに出た美知子の手によつて受取られることもあつた。

「まあ、恐れ入ります。」

こんな時、康子はあわてゝ横あひから手を出して美知子が片づけようとする辨當箱を奪ひながら、靖也の代りに挨拶して、笑ふのであつたが、それを氣がついてお加代が横あひから手を出すと、康子はチラと、はしたなさをたしなめるやうな眼をして、

「なんだねえ。お加代。そんなにひつたくるやうに、他人さまの手からものを取るものぢやないよ。失禮な。」と、なにがなしに叱るのであつた。

お加代はびつくりして手をひつこめて、こんどは靖也のぬいだ帽子を受取らうとすると、別にそこに巧みや張り合ひの心持があるわけではなくて、きつと美知子に先を越されてゐた。「まあ、恐れ入ります。」が、また嬉れげに康子の口から繰りかへされた。お加代は、どうすることもできないで、手持無沙汰に默つて見てゐるよりほかはなかつた。美知子と康子に愉快らしく話しながら、靖也が奥に入

つてしまふと、とり殘されたお加代は、ションボリと、玄關に下りて、埃だらけの靴を取りあげながら、叮嚀にブラシをかけて、靴墨をつけながら磨きはじめるのであつた。欄間にともつた電燈の光りに、彼女は自分のみすぼらしい影を、三和土の上に見出した時、人を恨むといふよりも、自分の姿のみじめさを恨むやうな涙が、ポロツと一滴頰に傳つて落ちた。奥から靖也の快活な聲と、美知子のつゝましやかな笑ひ聲が、まじつて聞えた。お加代の手のブラシは、思はずカタリと指を滑つた。靴を片づけて臺所にもどつた彼女は、ヂツと坐つたまゝ動かうともしなかつた。

やがて康子がやつて來て、夕飯の食卓の用意をしはじめると、お加代は驚いて土間に下りて、手を洗ひながら、皿や小鉢を出した。時とすると、美知子までが臺所へ手傳ひに來た。

「まあ、恐れ入ります。」と、康子はまたかう繰りかへして頭をさげるのであつた。「お客さまにこんなことをして頂きましては……いえ、わたくしとお加代で充分でございます。あなたさまはどうぞ、奥で靖也とお話してゐらしつて……」

「小母さま、わたくしお客さま扱ひをして頂いちや困りますわ。だつて、あつかましいほど長居をさせて頂いたのでございますもの。」

「なんの、あなた、長居なんて……わたくしもあなたさまに、かうお心やすくなりまして、なんのおかまひもいたしません上に、西洋刺繍やらなにやら、いろ〳〵お教へをうけてゐるのでございますも

の……」

「お心やすくしてくださるのなら、わたくしにお手傳ひさせてくださいまし。」

「……でも、どうも、それでは恐れ入りますから……」

と、康子はしきりに辭退するのであるが、美知子がかまはず、瓦斯に火をつけたりなにかすると、

「……では、こゝで、なにか新らしい西洋のお料理を敎へて頂きませうかねえ。ほゝゝゝゝ。」

と、まつたく喜ばしげに笑ふのであつた。

——賑やかな夕飯がすんで、すこし時刻がおくれて美知子が歸る時、良助はいつもすゝんで伴をして、朝倉邸まで見送るのが常であつた。

靖也はすぐ書齋に入つた。

お加代は、かうした夜、例のとほり紅茶と菓子とを靖也のデスクに運んで置いて、翌朝その紅茶や菓子が、ほとんど口もつけずに殘されてゐるのを見ると、自分の昨夜のみじめさが、一層みじめに自分の心に彈きかへされて來るやうに感じた。恨めしい——とはさら〳〵思はない。美知子さまの美しい姿には、反抗しようとしてもしきれぬものを深く感じてゐる。自分は自分の姿をよく知つてゐる。自分はたゞ、なぜか、苦しいのだ。なぜか、つらいのだ。——お加代の顏は、誰にも見られぬ時、いつも暗かつた。彼女は壁一重のむかふから、靖也の心をヂツと見つめてゐるのだつた。

——が、靖也には、壁一重のむかふから、絕えず注がるゝもう一つの妖しい眼があつた。それは、あの退院以來、スツカリ影をひそめてゐる、龍子の執念ぶかい眼であつた。

——築地の或る奧まつた川魚專門の料理屋「たつみ」の一間である。若竹を植込んだ中庭を隔てゝ、鉤の手なりの緣づたひに、まつたく離れた八疊。呼鈴を押さねば女中も來ないし、かなり高聲の話もよそには漏れないといふので、某々政客などは、よくこの部屋を利用するといはれてゐる。

紫檀の大きな卓を置いて、向きあつてゐるのは、龍子と小宮であつた。

盃洗にちよつと盃をそゝいで、小宮が龍子にさすと、

「もう、澤山。」

といつて、龍子は手に觸れようともしなかつた。右肱を卓の緣に、上體をひねりながら、見ると もなく天井を見あげてゐるので、蒼味を帶びた强い電燈の光は、彼女のきらびやかな全身に、吸ひよせらるゝ樣に集まり輝くのであつた。

小宮は、その水からあがつた人魚かと見る妖艶な姿態に、いまさら貪るやうな眼をやりながら、

「まあ、もう一つ受けて頂きたいですな。まだ、さつぱり、あなたの妖術が出ませんよ。」

「わたしの妖術？　なにがわたしの妖術なの？」
「さあ、なんの妖術でせうかな？　墓の天竺徳兵衛だが、あなたは女だから玉藻前の殺生石といふところですな？　はゝゝ。」
「ふん、殺生石……」
「龍子さんの毒氣にあてられて見たいのですよ。龍子さんが、どうかして興奮すると、例の口を衝いて出る毒氣――あれにあてられて、のたうち廻つて見たいのですよ。はゝゝ。」
「ふん、それは殊勝ね。」龍子は、そろ〳〵例のとほり、皮肉らしく眞赤な唇をゆがめ出した。「しかしこゝに二つの場合があるのよ。」
「二つの場合？」
「甲蟲は、眼の前の恐ろしいことに、コロリと死んだ眞似をする。針鼠は、眼の前の嫌なことに、すぐ針を追つ立てる。小宮さんは、どつちの場合を選ばうとするの？」
「素晴らしい諷喩家ですな、龍子さんは！　僕は正直な針鼠よりもずるい甲蟲の場合を選びますな。」
小宮も、さる者だといふ風に、露骨にからんで來た。
「ずるいといはれない先に、自分でずるいと斷つたのは感心ね。」
「この男、なか〳〵油斷がなりませんからね。」

「見え透いた計畫をたてゝ、こんなところでわたしに會はうとする男に、油斷大敵なんて必要はないぢよ。小宮さん。」
「見え透いた計畫？　はゝゝ。そんな計畫なんかたてゝはゐません。もし今夜の僕に計畫があるのならむしろ、見え透かされるやうにたてた計畫です。はじめつから、すつかりわかつて頂くやうに計畫した計畫です。」
「さう。ぢやあ、すぐその計畫を、下手なぐうたらな計畫だとして、わたしは笑つてしまひたいの。」
「これは、お言葉ですな。」
小宮はとう〳〵苦笑しなければならなかつた。
「なんといつても、わたしには良人があるんですからね。」
「さう仰有いましたね！　……ふむ、たしかに、あなたの口から良人があると？……」
「あゝ、いひましたよ。たしかに。」
「そのあなたが、それではなぜ……」
「まあ、お待ちなさい。その次に出て來る言葉は、わかり過ぎてゐる。」と、龍子は冷ややかに小宮を遮つた。「これも、今夜、たしかに小宮さんにいつて置く必要があるのだが、わたしはもう、靖也といふ男は問題にしちやゐないのよ。だからかうして立派な口が利けるのよ。」

「えつ……君塚君が、あなたの問題ぢやない？　では、龍子さんは今の家庭生活に滿足しようとなさるのですか？」
「滿足しようもしないもない。わたしははじめつから、自分ですゝんで棟吉と結婚したのです。棟吉はわたしを愛し、わたしの桁はづれな我儘をゆるしてゐます。この生活はわたしに滿足なものでなくてなんでせう。ほゝゝゝゝ。」
小宮は、謂ふがごとく、毒氣にあてられたのであつた。彼はさすがに狡い眼を、パチクリさせた——
——がまだ屈しなかつた。
「ぢやあ、龍子さんも、隈部さんを愛してゐるといふのですな？」
「わたしは立派に隈部の妻です。——これだけを答へて置きませう。」
「はゝゝ。……とう〳〵あきらめましたね。龍子さんの妖術も、君塚君には、遂にきゝ目をあらはさなかつたわけですね。はゝゝ。」
「あきらめたといふ言葉には、すこし異論もあるが、面倒くさいから、まづ、さうならさうにきめて置くわ。」
龍子は、つめたくなつた盃を唇にあてた。
「異論がある？　いや面白い。どんな異論です。是非その異論を承はりたいですな。あなたは面倒

くさいと簡單に片づけたいかも知れぬが、僕にはそこが最も肝心な點です。」
「さう。ぢやあいひますよ。わたしは……」と、龍子はチラと鋭く小宮の氣合を見て、「わたしはどんな事でも、我儘にやり通す女です。今迄自分のしようとした總てを、諦めたことのない女なんです。」
「それは今の家庭生活に滿足してゐることを立派にいつてのけた龍子さんに、はなはだ矛盾した言葉ぢやないですか。どうでせう？」
「べつに矛盾しちやゐないと思ふわ。」
「こりやあいよ〳〵面白い。どうして？」
「わたしは隈部の妻として、これからあの男に、やりとほすべきことをやりとほすのです。」
「……妙だ。わからない。」
「わからないの？　——小宮さんの所謂、見え透かされるやうにたてた計畫なんだが——當然の計畫なんだが——」
「當然の計畫？」
「わたしは、それを、單に復讐とはいはれたくない。」
龍子は、驕慢らしく冷やかに笑つた。
「……復讐？」

「復讐といはれたくないつて、いつてゐるのよ。」
「……ぢや、なんです？」
「さあ、なんといつていゝか……やつぱり、これも小宮さんの所謂わたしの妖術ですねえ。ほゝ、ほゝゝゝゝ！」
「……妖術……ふうむ！」
小宮は呻つた。
「わたしは、今はどこまでも隈部の妻です。その立場から、靖也といふ男に妖術を使つてやるんです。」
「いや、なんだか話が面白くなつて來た。」
小宮は盃をさした。こんどは龍子はすぐ受けた。
「そこで小宮さん。あなたに相談があるわけよ。」
「面白い。どんな相談だつて乘りませう。」
「しかし、この相談に、嫌な交換問題は御免よ。隈部の妻としての取引になら、無論應じていゝわ。」
「と、仰有ると？」
「わたし、ハツキリいつて置くわ。わたし個人に對する小宮さんの以前つからの感情は、すつかり棄ててもらひたいの。そして隈部棟吉の――あなたを技師として使用してゐる隈部棟吉の妻として、當

然しなければならぬ取引には應じようといふのよ。」
「……」
「もつと露骨にいひませうか……」
「いや、もう澤山。」と、小宮はズバ〳〵いふ龍子の言葉を豫想して、持ち前の狡猾さをあらはすひまもなく、「つまり、この相談に、わたしの精神的な要求は斥けられて、物質的な要求なら容れられるといふのでせう？」
「わかつて？」
「よくわかりました。」
「で、後のはうの話で承知できますか？」
「隈部さんの奥様、使用人たるわたくしが今さら二つの中のどの要求を強ひる權利がございませう。」
小宮は、わざと語調を改めて、大仰に、王妃に對する家臣のやうな、禮拜の形をして見せた。そして今はもうすつかりあけすけな狡猾さを示しながら、あたりを見廻はして低く短く笑つたのであつた。
――それからの兩人の言葉は、急にヒツソリして聞えなかつた。時として、小宮は、盃洗に指を突込んで、水で卓の上に、なにか船の縱斷面や、側面圖のやうなものを描いて見せたが、すぐまた指でそれを消してしまつた。

龍子は、始終、満足げにうなづいた。彼女の眉は、痙攣的にはげしく動き、眼はいよ〳〵冷たく、まるで倒れた骸でも瞥視するやうに殘忍に光つて來た。

小宮も、栗鼠のやうに、すばしつこく狡るさうに、身體を伸ばして、卓越に耳うちでもするかのごとく聲を落した。

「……さあ、いよ〳〵面白くなつたぞ。これから先のことは、僕の術策にまかせて置いてください。僕の手腕を信じてください。」

「無論まかせもするし信じもするわ。こんなことは、小宮さんの本領なんだから。ほゝゝ。」

「本領——といふと、僕は性來の惡黨といふことになりますぜ。そりやあひどい。僕はたゞ、龍子さんの御相談だから、身を挺してこの危險千萬な役をひきうけたのですよ。僕は決して惡黨になりたくはないのです。」

「しかし、小宮さんは、善黨とはいへないわ。柄がゆるさないわ。藝風がゆるさないわ。ほゝゝゝ。」

「柄がゆるさないとは、ひどいですな。そんなに僕は惡黨面ではないつもりだがな。」と、小宮はひとりごとのやうに苦笑した。「いや、惡黨面かも知れません……だから、どうも君塚なんかとはちがつて女性にはもてないのだ。」

「どうして、小宮さんでなくちやならないといふ女があるから大丈夫よ。」

「はゝ、どうですかね。……」

「大丈夫あるから安心していゝわ。わたしの知つてゐる女にも一人あるわ。」

「誰です？　そんな奇特な女は？」

「菊江さんよ。」

「え？」

「隈部の妹の菊江さんよ。そりやあ小宮さんに夢中だわ。お喜びなさい。」

「どうして……あの菊江さんが……？」

「そんな不思議らしい顏を、わざわざしないだつていゝでせう。いつか帝劇であなたに會つたはじめから、父の家でクリスマスの祭りをやつた晩などの菊江さんの態度で、それに氣がつかない小宮さんぢやない筈だ。ちやんとわかつてゐて、今さらそんな驚いた顏をして見せたつて駄目よ。」

「……しかし……いや、まつたく……僕はそんなことには鈍感ですからな。」

「鈍感？　……ほゝゝ。しかしまあ、なんでもいゝ。とにかく菊江さんは夢中よ。一生懸命よ。まじめに、熱烈に小宮さんを愛してゐるのよ。この間、しきりにあなたのことを聞きたがるから、菊江さんは小宮さんを愛してゐるのでせうと突込んだら、あの快活なお跳ねさんが、急にモヂ〳〵顏を眞赤にして、しをらしく默つてうつむいたのですもの……ね」

「龍子さんに會つちやあかなはない。誰にでも、ヅツカリやるんだから。」
「どう？　小宮さん。ほんたうに菊江さんはあなたのことを思ひつめてゐるわ。わたし、あの人とあなたなら、いゝ似合ひの御夫婦だと思ふわ。……どう？　小宮さん。ほんたうに菊江さんが、あゝ思ひ込んでゐるところを見ると、可哀さうになるわ。だから、わたし、いつてあげたの。菊江さん、小宮さんだつて、あなたを愛してゐるにちがひない。きつとお姉さんがひきうけてあげるから、安心していらつしやいつて……」
「そんなことをいつたのですか？」小宮は眼をキヨロリとさせて、「僕の心持も知らないで……そりやあ獨斷すぎる。そりやあ亂暴だ。」
「だつて、あのまじめな菊江さんの心を、あなただつて憎むことはできますまい。」
「そりやあ、憎むことはできない……だが、僕は……」
小宮が意氣ぐんでなにか續いていはうとする口さきへ、龍子はツイと盃ををさしつけた。
「あゝ、遲くなつた。今夜はこの邊でお別れしませうね。」
それ以上、なにもいはせないところに、やつぱり龍子の「妖術」はあつた。

或る反抗

午飯がすんで十二時半までの休憩時間を、靖也は鐵裝工場のそとの、山形鐵材の堆積に腰をおろして、煙草をふかしながら、青空の遠くに、一片の羊毛のやうに輕く浮んだ雲をながめてゐた。四月の太陽は、膚ざはりのいゝ空氣の層から層を梳いて、いちめんに照り渡つてゐた。
「君塚さん。お休みですか。」
油に黑く光つたハンテイングの庇に、ちよつと手をかけて、挨拶するやうに聲をかけたのは、田島といふ伍長であつた。
「えゝ、ボー(汽笛)が鳴るまでは、こつちの身體ですからな。」靖也は微笑で迎へながら、革の卷煙草入をポケツトから出した。「一本いかゞ。」
「や、難有う。」と、田島は頭をさげて手を出して、「どうも、午飯の後と、五時のボーが鳴つて、會社の門を出ながらふかす煙草は、實にうまいですなあ。」
「さうです。たしかにうまい。この一本はたしかに生命の洗濯ですよ。」
「以前とちがつて、毎日かうした肉體勞働は、さぞお疲れでせう。」

田島は靖也の作業服姿を見なほすやうに見ながらいつた。

「いや、さうでもありません。はじめの間は、すこし苦しかつたが、なに糞つとやつてるうちに、この頃はすつかり馴れてしまつて、もう平氣になりましたよ。愉快になりましたよ。本を讀んだり、製圖道具をいぢくつたりしたゞけではわからぬものが、次第にわかつて來るので、ほんたうに愉快です。鉸釘一つうつにも、船をつくる以外に、そこにどれだけの深い意味があるか、そんなことまでわかつて來るので愉快ですよ。」

靖也はあくまで元氣にみちてゐた。

「どうです。鐵槌でまめでも出しやあしませんか？」

「出しましたよ。手のひらに四つも五つも出しましたよ。はゝゝ。」

「さうですか。あれは手の皮が剝けないうちに、小刀かなんかのさきで、ちよつと切ると血が噴き出るから、そいつをすぐ鹽でもむと輕くなほります。ピツクや卽效紙を貼ると蒸れて膿をもつたりするから、鹽でもむにかぎりますよ。」

「えゝ、この間教へられたので、さうしてゐるんです。」

「わたしなんざあ、この工場に入つた時分には、大下といふ我武者羅な伍長がゐましてね。その男に隨分いぢめつけられたもんですよ。手にまめが出て、ちよつと鐵槌を下に置きでもすると、なにを愚

圖〳〵々してやがるんでえ、間抜け奴、なに、まめを出したつて？まめなんざあ、食つちまつてサツサと仕事をしねえか、馬鹿野郎！　と頭ごなしにやつゝけられたもんです。はつはつは！」

「さうですかねえ。しかし威勢がいゝ男ですな。」

「まつたく威勢のいゝ男でした。さうして誰彼なしにガミつくから「大狼」といふ仇名をもらつて隨分憎まれもし恨まれもしましたが、そんな口をたゝくだけに、鐵槌を持たせると、そりやあえらいもんでした。講釋師のいふ鬼神の荒れ狂ふがごとくに——と、その通りで、普通の職工の倍の力で倍の數ほども、ガーン〳〵とうちおろすんです。見てゐると勇ましいといふより恐ろしいといふやうな氣持になりました。疲れてヘロ〳〵した鐵槌でも一つうたうもんなら、すぐグツと毛の生えた胸をつき出して、そんな弱い鐵槌なら、この胸で受けてやる。さあ、うつて見ろ。おれの胸は鐵床の代りにもなるつていふんですから、凄い意氣ぐみでした。——酒と博奕でしくじつて、會社にもゐられなくなり、なんでも今は九州の鑛山で働いてゐるときゝましたが、あんな力そのものといつたやうな男は、めつたにありませんよ。惜しい氣持がします。」

「さうですねえ。なんだか、それだけ聞いてゐても、溜飲がさがるやうだ。」

靖也は笑つた。

——その時、彼等の眼の、眞正面にあたるドツク・ハウスの建物の横で、姿は見えぬが、

「なにを、この贅六奴！」
と、どなりつける聲が聞えたかと思ふと、パシリと人をなぐりすゑたやうな音がした。
田島は、ちよつと口から煙草をはなして、耳をすました。――
「そら、無茶や。なにも人を撲んかてえゝやないか。……」
「あんまりうるせえからよ。」
「なんにも、うるさいことをいひたうはないのんや。貸した金をきちんと戻してくれたら、こつちは文句はないのんや。」
「だから返さねえとはいはねえ。今はないから待つてくれといつてるんぢやねえか。」
「いつ會ふても、そないに逃げてもう三ケ月の餘にもなるがな。」
「なんだ。逃げるつて……なにをいやがる。おれは生れて逃げるのなんのと卑怯な眞似あ、一度だつてしたことのねえ男だ。逃げるたあなんだ。やいこいつ、もう一遍ぬかして見やがれ。」
また、ピシリとはげしい一撃が聞えた。
「あつ、痛つ……また撲ちよつたな。」
「えゝ、面倒くせえ！」
續いて羽目板へ、押し飛ばして喉でも締めつけてゐるやうな、怒鳴る聲とうめく聲とが聞えた。

「誰だ？　また喧嘩をしてゐるな。しかたのない奴だ。」
と、田島は煙草を投げすてゝ、急いでドツク・ハウスのはうへ駈け出した。
靖也も續いた。
トタン塀のまはりには、もう十五六人の職工たちがむらがつて、二人の格闘者を、とめようとするでもなく、面白さうに遠巻きに見物してゐた。格闘者といつても、餘りに段がちがつてゐた。一方は年も若く、あくまで筋骨のたくましい男、一方はもう五十にちかい、痩せて羊皮紙のやうに黄色くパサついた顏の、見るから氣力のない男であつた。死物狂ひに、突つかゝつてゆくのであるが、忽ち若い男の巖丈な拳を喰つて、羽目板へ、犬つころのやうにたゝきつけられた。そして最後の一突きで、彼は鼻血を出したまゝ、地上に倒れてしまつた。それをなほ若い男は靴で蹴飛ばさうとしてゐるところであつた。
田島はパツとうしろから、若い男を抱きとめた。
「なにをしやがるんでえ。この贅六野郎をたゝつくぢいてやるだ。放せ。こいつ離さねえか！」
「庄太！　まあ、待て亂暴しないでも話はわかる。」
「なにが亂暴だ。こいつが餘りわからねえ獣だから、わかるとこまでやつゝけてやるんだ。」
庄太と呼ばるゝ若い男は、力にまかせて田島をふりもぎつた。彼の靴は倒れた男の横腹を蹴つた。

男はたゞ「ウーン」とうめいた。

「やつ、蹴りやがつたな……こんなにおれがとめてゐるのに、まだ亂暴するとはなんだ。おい、庄太！　おれの仲裁が氣に入らないのか！」

と、田島は怫然として、庄太の前にまはつて兩手をムンヅと摑んだ、そして周圍の職工に、

「おい、その宮野をあつちへつれて行つて、介抱してやれ。とめようともしないで、喧嘩を面白がつて見てゐる奴があるものか？」

職工たちは、倒れてゐる宮野といふ男をたすけ起して、連れ去らうとした。

「やい、まだ話はつかねえんだぞ。話がつきもしねえのに、そいつを勝手に連れてつて見やがれ、あとでこの庄太は承知しねえから！」

庄太は凄味のある太い眉をピクりと動かして、職工たちを一喝した。

「かまはない。連れてゆけ！」

「連れてつて見ろ。こんどはそいつがおれの相手だ！」

職工たちは、後難をおそれてか、躊躇して立つたまゝでゐた。

「おい、庄太！　そんなに喧嘩がしたいなら、この田島が相手になつてやらう。貴樣をこの工場へ入れてやつたのはおれだぞ。そのおれが相手になつてやるんだ。文句はなからう。」

「ふむ面白れえ。なんぞといふとおれをこゝへ入れたことを恩に着せやがつて、くだらねえ兄貴面や伍長面あしやがるのが癪だ。さあ、相手をしたけりや、すぐ突つかゝつて來い。こいつ奴！」

庄太は、猛然と田島に擊つてかゝつた。

田島は、パツと飛びしさつて、腕まくりしながら身がまへた。が、

「まあ、待ちたまへ！」

靖也はなかへ飛び込んだ。

「君塚さん。危ない。おどきなさい。こいつすこし小力があるのを自慢にしやがつて、この頃、大分ほかの職工たちをいぢめやがるんです。こんな奴にのさばられてたまるもんか！　やい、庄太、やつて來い。この田島は宮野のやうな理窟にやあいかねえぞ！」

「なにを、しやらつ臭えこと、ぬかしやがんな！」

庄太は豹のやうに前身をかゞめて彈みをつけたかと思ふと、奮然と田島に躍りかゝつた。

「この野郎！」

「この野郎！」

四つの拳が、空をきつて戰つた。

「待ちたまへ！」

靖也は大手をひろげて、拳の間に立ちはだかつた。
「君塚さん。どいてください。こいつ、うつちやつとくと癖になるから、一つ土性骨をぶつ挫いてやるんだ。」
「なにを糞つ！　やい若ん造、どかねえか。生意氣にとめ立しやがると、手前から片づけてやるぞ！」
「待てつ！　待ちたまへつ！」靖也は田島をうしろに圍ひながら、はげしく庄太を叱咤した。「腕づくでなくても、話はわかるんぢやないか！」
「話がわかる？……」庄太は、憎さげに靖也をキツと睨めつけたが、すぐ嘲笑するやうに、「ふん、手前だな、技師で職工になつたてえ野郎は……以前は技師でも、いま平職で働いてる以上は、どこまでもおれ達の身分と差別はつかねえぞ。話をわからせるなら、その積りで口を利きやがらねえと承知しねえぞ。」
「勿論、僕は君達の仲間だ。」
「ようし。それで、この話を、手前、どうつけようつてえのだ？」
「僕に、すべてをまかせて貰ひたいのだ。」
「ふむ、洒落たことをぬかしやがる。手前でこの話がつくか。」
「つけて見せる。君に悪いやうにはしない。まあ、僕にまかせてくれたまへ。」

「うむ、ようし……その言葉あ忘れるな。」
「とにかく、君はあつちへ行つてくれたまへ。」と、靖也はうしろでなにか言はうとする田島を無理に制しながら、庄太にいつた。一方ま　そこに宮田を抱へながら立つてゐる職工等に向つて、「おい、君達も。その人をつれて行つて介抱してやつてくれたまへ。」
職工等は鼻血を押へてゐる宮田をかゝへながら、洗面所のはうへ行つた。庄太も、この邊がひきあげ時だと考へたらしく、グルリと踵をめぐらすと、ことさらに傲然と肩を怒らしながら、第三船渠のはうへと歩み去つた。
「……君塚さん。ほんたうにこのまゝにして置くと、癖になるから……あいつ、弱い者いぢめばかりしやがつて……」
と、田島は齒がみをした。
「まあ／＼、田島君。君でもないことを……猛獸使ひは鞭や鐵の棒だけでは藝ができないのですよ。やつぱりうまい肉の一片を投げてやつて、愛撫してやることも必要なんですよ……」
「いや、あんな野郎は、肉の一片を投げてやれば、また次の肉の一片がほしさに吼え立てます。だから……」
「まあ／＼、今日は僕にまかせて置いてくれたまへ。」と靖也は笑つて、「……あの男は、一向見ない顏

だつたが、君がこゝへ入れたのですか？」

「えゝ、あいつは、矢島庄太といつて、東北あたりの山で石切人夫になつたり、土方になつたりしながら、横濱へまぎれ込んで來やがつたんです。つい、酒場で知りあひになつて、腕の力も相當にあるから、二ヶ月ほど前にこゝの移動起重機の工夫に使つて貰ふやうに話しこんでやつたんです。なんでも水兵あがりといふので、多少機械のこともわかるし働きやうによつては、いゝ仕事もできると思つてゐたんですが……その恩を忘れやがつて、今ではあんなにのさばりかへりやがつて……ほんたうに君塚さんがゐらつしやらなかつたら、奴の足腰をたゝねへやうにしてやるところだつたんだが……」

田島は忌々しげに舌打ちした。

波止場にちかい、と或る裏街の、ごみ〳〵した往來に面して、四枚のガラス戸の、多くは龜裂をでかして、半紙の膏藥貼りよろしくあるのを、蔽ひかくすやうに白木綿の半圓形の暖簾。「メリケン・バア」と名前だけは大層らしくしるされてあるが、十坪にたらぬ土間へ、四つ五つニス塗りの食卓を置いた酒場。——安煙草と酒と人いきれの臭ひで、なかの空氣は饐えたやうに粘つて、天井につるされた電燈の光も、妙に黄色く濁つてゐる。

張子の道化人形のやうに、頭をフラ〳〵させながら、肉叉で食卓に拍子をとつてゐた眇の男は、頓狂らしく大きな聲で呼んだ。

「おい、花ちやん。こんだ、威勢よく安來節を賴むぜ。おい。安來イ千軒エーン——つてやつを！」

「なにをいつてやがんだい。それよりやあ花公、浪花節だ。こゝにやあ、めづらしく雲月のがあつたなあ。いつか聞いたぜ。山科は雪の別れと來た。あいつがいゝ。樂燕や辰丸なんかよりやあ雲月だ。おんなじ浪花節でも桃中軒の一派あ、節がこまつかで味があらあな。ひとつ、あいつを探してかけてくれ。」

「へん、節がこまつかで味があると？　べらぼうめ。そんなもなあ猫のお飯にかけてやれ。もう浪花節あ、二番たて續けに聞いたあ。こゝいらで陽氣に安來節とやつゝけべい。おい賴むよ。安來千軒だ。」

蓄音機のレコードをかけ替へようとする女給に、双方から註文がつけられた。

「そんなことといつて、一度に二枚もかけられやしないぢやないの？」

白粉を厚く塗りたてゝ、頸のながい、肩をすくませた駝鳥のやうな感じのする女給は、把手を捲きながら、かたばかりに構へてある計算臺のわきから振りかへつて笑つた。

「だからよ。だから、いつかの雲月をやれつていふのよ。」

「やい、浪花節あ當分御法度だぞ。安來節だぞ。」

「おい、花公、どつちでも、お前の好きなのをかけて見ねえな。雲月をかけりやあお前は松山に氣があるのさ。安來をかけりやあ塚本に氣があるのさ。――その氣でやつてくれ。こつちあ審判官だ。」
「お氣の毒さま。松山さんも塚本さんもそんな飲んだくれは、あたし大つ嫌ひだよ。」
「やい。飲んだくれが來なきあ、こゝあ繁昌しねえんだぞ。うぬは主人に不忠義な奴だ。よし、主に代つて身共が成敗してやらう。」
一人の職工服を著た客は立ちあがつて、矢庭に女給を抱きすくめた。
「あれつ！　なにをするんだよ。嫌だよ、嫌だよ、嫌だつてば！」
女給がキヤツ〳〵と聲をたてればたてるほど、みんなよろこんで囃したてた。
「やい、うるせえな！」
一隅の食卓がドンと、強く拳でたゝかれた。醉つて充血した眼をカツとひらいて、あたりを睨め据ゑたのは、庄太であつた。
「や、矢島の兄い。とう〳〵お眼ざめだね？」
と、安來節主張論者である、眇の塚本が急に機嫌をとるやうに額をつき出した。
「眼をさますもさまさねえも……のべつ幕なしに騒ぎやがつて、なにが眠れるもんかい。」
「……だが、その食卓へ突つぷして、さつきから、もう二三十分は、いゝ氣持さうに鼾をかいてた

ぜ。」
と、浪花節黨の松山といふ男は、前齒のかけた口をパツクリあけて笑つた。
「なにをこんなとこで眠れるもんかい。手前たちやあ、おいしきせ酒だつていふと、からもう、飲まなきやあ損のやうに飲んで羽目をはづしやがる。いゝ加減にしろい。」
庄太は、ひつ叱つた。
「だが、折角兄貴におごられたんだからな。ひどく嬉しい氣持で、感謝の意を表してるんだあな。」
「感謝？　なにが感謝だ。そつちは感謝でも、こつちやあ癇癪が起らあ。ふん。」と、庄太は食卓に肱をついて、頤をさゝへながら、「……だが、まあ、いゝや、飲め〳〵。おれも飲む。おい、女！　酒だ〳〵……ふん。喧嘩のさばきに一杯飲めで十圓の紙幣びらあきりやがつた君塚つてえ野郎は、すこしやあ話せさうだ。はゝゝゝ。」
――その時、ガラス戸を重さうに開ける小さな手があつた。
「誰あれ……？」
もうひとりの女給が振り向いた。
「……あのう……」
小さな、おど〳〵した、女の子の聲であつた。

「駄目よ。また辻占なんか賣りに來たんだらう。駄目よ。」
「……あのう……」
「駄目だつたら！　誰も買やしないわよ。入つて來ちや駄目だよ。」
「……いゝえ、あのう。」
小さな手は、まだガタ〳〵ガラス戸を開けようとした。
「しつつこい子だね。入つて來ちやいけないつていふのに！」
女給は小さな手をつかまへた。
「あのう……お父ちやんがゐるから……」
「えゝ、お父ちやん？」
「うちのお父ちやんが、こゝでお酒を飲んでるから……」
「お前、どこの子だい？」
「あたい、おみきちやんつていふの……」
「おや、この子は、自分の名に、ちやんづけをしてゐるよ。はゝゝ。」と、女給は笑つて、屋内を振り向きながら「こゝにおみきちやんつて子供をもつた人がゐるの？」
「おみきちやん？　おらあそんな子は持たねえ。もつとも、よく考げえて見たら、嬶あがなかつたつ

け」
ひとりの職工は笑つた。
「おみきちやんか……そいつあ、たしかおれのむかしの情婦の名だつたがな？　色白のポツチャリで年の頃は二十四五、眼の凉しい、銀杏がへしのよく似合つた女つたがな。うふゝゝ。」
他のひとりが、トボケた顏でいつた。
「なにをいつてるんだえ。際どいとこでのろけてるよ。」
小さな手は、それでもとう〳〵ガラス戸を開けてしまつた。垢じんだ木綿の袷を着て、頰のあたりに淋しい影があるが、眼鼻だちの悧發らしい十二、三の女の子である。
彼女は、かまはず女給の手をくゞつて、また食卓に突つ伏して眠つてゐる、庄太のそばへ駈け寄つた。
「お父ちやん〳〵！　またこんなとこで酒飲んでるねえ。おつ母ちやんが、お前を呼んで來いつていつたよ、あたい、はう〳〵さがしたよ。お父ちやん〳〵！」
女の子は庄太の膝をゆすぶつた。
職工たちは顏を見あはせた。
「矢島兄いの子かい？」

「おゝ、さうだ。おら、一度兄いの家へ行つたことがあるから思ひ出した。たしかに兄いのうちの子だ。」
「そんなら兄いを起してやれ。」
「お父ちやん〳〵！」
「おい、矢島の兄い。お前んとこの子が來たよ。おい、お迎えだ〳〵。」
「お父ちやん〳〵、おうちへお歸りつてばよう！」
ゆすられて庄太は眼をあけたが、
「おや、おみきか……」
「お父ちやん、おつ母ちやんが呼びに行つて來いつていつたよ。あたい、はう〴〵、お酒飲みのゐる家をさがしたんだよ。お歸りよ〳〵！」
「うむ……すぐ歸る。お前さきに歸つてゐろ。」
「嫌だ〳〵、あたいお父ちやんと一緒に歸るんだ。」
「おれはあとから歸るよ。」
「嫌だ〳〵、一緒に歸るんだ。」
「うるせえ奴だな。すぐあとから歸るからいゝやな。」

「だつて……嫌だ〳〵……」
「まあ、こんなとこに愚圖々々しねえで、早くおうちへ歸つてろ。」
「嫌だよ〳〵。」
「えゝ、歸れといつたら歸らねえか！」
庄太は面倒臭さうに、片手でおみきの肩を突き飛ばした。
ひとつたまりもなく、仰向けにおみきは土間の上に轉がつた。
「あらつ、ひどいことをするのねえ！」
お花といふ女給は、驚いておみきを抱き起した。
「歸れつ！」
庄太は怒鳴りつけた。
おみきはシク〳〵泣き出した。
「歸れつ！　やい、いつまでも愚圖々々してやがると、一つ、痛えやつを喰はせてやるぞつ！」
庄太は拳固で、ドンと食卓をうつた。
「……だつて……だつて……」
「えゝつ、まだ歸らねえといふのか。まだ强情を張りやがるか！」

「まあ〳〵、兄い、待ちねえ。こんな小さな子を、無體に折檻したつてはじまらねえやな。可哀さうに、泣いてるぢやあねえか。」

「おい、松山！　そいつを往來へ出してくれ。……えゝい、折角の酒がさめつちまつたあ。」庄太は忌々しげに、おみきを睨めつけたが、「おい、酒だ〳〵、酒を持つて來い！」

「お父ちやん……お酒飲んぢや嫌だよ〳〵……」

「なにを、こまつちやくれたことぬかしやがんな！」

パシリツと、庄太の投げつけた盃が、土間を跳ねて壁に飛んだ。

「危いつ！　まあ、なんて亂暴をするのよう。この子に怪我をさせて、どうしようつてんだらう？」

お花といふ女給は、おみきをかばふやうにして叫んだ。

「どうもかうもねえ。その餓鬼を早く往來へたゝき出すんだ。」

「……矢島の兄い……あんなに泣いてるんだ……可哀さうに……もう、みんな歸ることにしようぢやねえか……？」

急に氣が弱くなつた松山は、なだめるやうに庄太の前に來た。

「なにをいつてやがるんだい！　折角の酒がまづくなつちまつた。これから飲みなほしだ。おい、女！酒を持つて來い。酒だ〳〵！」

みんな、ちよつと顏を見あはせた。

「おい、酒だ〳〵、酒を持つて來い！」

二人の女給は眼で合圖して、酒を運ばうともしなかつた。

「おい、女！　酒だ〳〵。おい、なぜ酒を持つて來ねえんだ？」

「もう、お酒はおやめなさいよ。」

お花がいつた。

「金錢を拂つて飲む酒に文句はなからう。手前んとこは酒を飲ますが商賣だらう。こつちはお客樣だぞ。――やい、酒を持つて來ねえのか！」

女給は動かなかつた。

ガチヤン！　と、突然、庄太の前の食卓は、彼の靴さきでひつくりかへされた。德利も皿も、重なつて土間の上に碎けた。

「馬鹿にしやがんな！」庄太は仁王立ちになつた。「酒を持つて來ねえといふなら、家中、ブツ潰してやるぞ！」

料理場から、白いコツク着をつけた亭主が飛び出して、なにかいはうとするのを、二三の職工が、氣轉よく押し止めた。庄太の前後にも、松山と塚本とが、彼の身體をさゝへるやうにして、これ以上

の騒動を起させまいとした。二人の女給は、いちはやく往來へ、おみきの手をとつて逃げ出した。火のつくやうな彼女の泣き聲が聞えた。ガラス戸の前には、もう見物の彌次馬が十四五人も、覗き込んでゐた。

——その見物を押しわけるやうにして、ツカ〳〵と入つて來た、一人の紳士があつた。彼はポケットから紙入を出して、大きな紙幣を素早く亭主の手ににぎらせた。そして微笑しながら庄太のそばへ來た。

「おい、君、こんなとこの酒はまづいや。ほかでもつとうまい酒を御馳走しようよ。」

庄太は氣を抜かれて迂散くささうに紳士を見た。

「知らん顏だな？　誰だい、お前は？」

「は〻〻、誰でもいゝよ。おい、僕と一緒に飲みなほさうぢやないか？」

さう笑つて、紳士は庄太の肩を、氣輕にポンとたゝいた。

「さあ、ひとつ、飲んでくれたまへ。」

——紳士は、小綺麗な女給が、二つのカップにジョン・ブラウンを注いで角鑪ごと置いて部屋を去

ると、くはへた葉卷を灰皿にはたきながら、食卓のむかふからのぞくやうに庄太の顏を見た。

あれからどうしたのか……庄太はこの紳士に無理やりに自動車に乘せられたまではおぼえてゐる。彼は車にゆられて、またすこし居眠つたらしい……そして知らぬ間に、このあかるく靜かなカフェーの一室に、自分を運びこまれてゐるのであつた……

「……あなたは一體、誰ですね？」

庄太は、カップに手をやらうともせず、トロンとした醉眼をあげた。

「僕かね。」と、紳士は笑つて、「僕は小宮といふものさ。」

「小宮さん……？」

「あゝ、さうだよ。小宮徹郎といつてね、人間はあんまり賢くはないが、飲んだくれのはうぢやあひけを取らない男さ。はゝゝゝ！」

「ふむ……」

「どうだい。さあ、とにかく威勢よくグツとやつてくれたまへ。」

「ふむ……小宮さんか……名も知らねえし一度も會つたことのねえお人だが……ふむ……」と、庄太は怪訝らしく舌なめずりして、「なんだかわけがわからねえが……ぢや、一杯、御馳走になりますよ。」

「一杯ぢやない。二杯も三杯も——これから二人で大いにやらう。」

「ふむ、面白れえ。ぢや、遠慮なく頂戴しますよ。」
庄太はカツプを呷つた。
「君は、あの××造船會社に働いてゐる人だらう？」
「えゝ、さうですよ。」
「なんといふ名だえ。」
「わたしかね。わたしは矢島庄太つていひますよ。」
「矢島庄太……名からして威勢がいゝね。元氣があるね。そこで、もう一つ。」
と、小宮は角罎からウヰスキイを庄太のカツプに注いでやつた。
「いゝ、ウヰスキイだ。久しぶりだよ。何年目かだよ。こんないゝ酒を飲むのは。」
「これを緣に、これから時々一緒に飲まうぢやないか。僕は、君みたいな人と飲むのが大好きなんだよ。ザツクバランで愉快だからな。話に嘘がなくつて、あけすけで、正直なのが嬉しいんだよ。」
「はゝゝ。わたしはあんまり正直者ぢやあねえよ。」
「さうかね。自分で正直者ぢやないと斷るところが氣に入つた。僕も、時と場合によつては、なかなか正直者ぢやないのさ。そこでます〳〵肝膽相照すのだな。」
「かんたん……は夢の枕かね？」

「夢の枕はいゝね。面白い。……さあ、そこでまた一杯だ。君はなか〳〵飲ける口だね。」
小宮は、また庄太のカツプへ注いだ。
「御馳走するなら、いくらでも飲るよ。」
「いくらでも飲る？　そいつは痛快だ。よし、二人で大いに飲らう。」
「大いに飲らうつていひながら、お前さんは一向飲まないぢやないか。」
「なに、やるさ。」と、小宮は自分のカツプをグツと干して「矢島君……これからは友達づきあひを賴むぜ。親友だ。なあ、一蓮托生だ。」
「友達！　……ふむ、よからう。」
「なつてくれるかい？」
「なる。なるとも！　……だが、なんだか、まだわからねえな……」
「なにがわからんのだい？」
「お前さん、わたしと友達になつてどうしようてんだね？」と、庄太は、口にあてたカツプの蔭から小宮の顏を怪しむやうに見やつて、「お前さんとわたしとは、だいぶ身分がちがやしないかね……」
「身分？　……はゝゝ、なにが身分だ。おい、矢島君、酒飲みにも似合はないことをいふぜ。酒の上に身分もなにもあるもんか。こゝが酒の難有いとこぢやあないか。……それに僕は、君と同じ職業だ

よ。この點でも、以後ます〳〵御別懇にお願ひしたいのだよ。はゝゝゝゝ！」
「へえ、お前さんがわたしと同じ職業？」
「さうだよ。」
「ぢや、どこかの船渠の技師さんかね？」
「まづ、その見當だ。……だが、今夜は野暮な職業の話なんかよさう。それよりも酒だ。友達づきあひをはじめようつていふ飲み分けだ。さあ、なんでもいゝ、心おきなくカツプを擧げてくれたまへ。」
小宮は角壜を取つてまた庄太についでやつた。
「うむ、面白れえ。さうザツクバランに出られると、こつちも、もう遠慮なんかしねえ。」と庄太はフツと大きく醉を吹いて、「旦那はえれえ人だ。おれあ旦那が無闇と好きになつたよ。」
「僕を好きになつてくれる？　そいつはなにより嬉しいな。矢島君！　これからはほんたうに心と心で、僕とつきあつてくれるんだぞ。いゝか。」
「心と心……うむ、面白れえ！おれあ旦那のためなら、どんなことだつてするぜ。火の中へでも水の中へでも飛び込んで見せらあ。どんなお役にでも立つよ。喧嘩ならおれの一手で引受けてあげる。おれあほかに能はねえが、腕つ節ならどんな奴にだつて敗けやしねえ。」
「さうか、そいつは頼もしい。いや、難有い。」と、小宮は紙入れから名刺と五圓紙幣を二枚出して、

「僕は東京の、こゝに書いてあるところに住んでゐる。失敬だが、君の生活にすこしでも不自由があつたら、葉書を出すなり、電話をかけるなりしてくれたまへ。……さあ、これは挨拶代りだ。むき出しで失敬だが、取つて置いてくれたまへ。』
「……御馳走になつた上に、こんなことをして頂いちやあ恐れ入ります。どうも、これやあ……」
「まあ、なんにもいはずに取つて置いてくれたまへ。……時に、君の住所はどこだね？」
「わつしの住居かね。西戸部の××番地さ。塵埃つ溜みたいな長屋でさあ。はゝゝ。」
「家族は？」
「嬶あと女の子だ。」
「はゝあ、子供はさつきの女の子一人なんかね？」
「さうです。」
「僕はもつと子供が澤山あるのかと思つた。」
「このセチ辛れえ世の中に、そんなに子供をへたやたらに産まれてたまるもんか。」と、庄太は笑つて
「そこはちやんと、産兒制限を實行してますからね。」
「産兒制限？　はゝゝゝ……えらいことをいふね。」
「産兒制限ぐれえ、誰だつて知つてまさあね。馬鹿にしちやあいけねえ。」

「いや、馬鹿にしてやしない。君がなか〳〵新人であることに驚いてゐるのさ。」
「これで、勞働爭議の二つや三つは、自分が主になつてやつつけたことのある男ですよ。」
「さうかね。ではいつか、君の勞働運動に對する新意見を拜聽しようかね。」
「是非きいて頂きたいね。今の工場規則には、隨分不平があるんだ。」
「大いに聽かう。君達の言葉がほんたうの參考になる。學者の机上の空論や、資本家の自分勝手な算盤珠をはじいた上の辯護は、實際なんにもならん。汗をパンに代へる君達の聲が、ほんたうの勞働政策の基調をなすものでなくちやならんのだ。」
「難有いな。旦那みたいな人の下に、おれあ働きてえよ。」
「うむ……今に、僕が君に是非一つ働いて貰ひたいといふ相談を持ちかけるかも知れない。僕も君みたいな血の氣の多い人を、どこまでも自分の片腕に頼んで、なにか仕事をして見たいのだ。いゝかね頼むぜ。」
「さつきもいふとほりだ。おれあ、自分を知つてくれる人のためになら、火の中だつて、水の中だつて、喜んで飛び込む男だ。この心持を忘れて貰ひたくねえ。」
「さういつてくれりやあ、僕あ滿足だ。よし、その意氣でもう一杯！」
「旦那も飲むんだよ。」

「よし來た。」
兩人はカツプを同時に高くあげて、グツと呷つた。
——珈琲店を出る時、小宮は庄太に、明日の晩またこゝで再會することを約束した。一禮をして、醉つた足をフラリ〳〵運んで暗い闇のはうへ去る庄太の後姿を、彼は例の輕薄らしい狡み笑ひを洩らしながら見送つてゐた。

誓

靖也は働いた。——働きぬいた。滿身に力をこめて鐵槌を振ふことは、來るべき仕事への、どれほどの強い信念、尊い信仰となつて體驗されたことであらう。學問知識といふもの、それは要するに仕事に對する手段であり方便である。眞に人間の氣魄をうち込んで、仕事に血を通はせ、正しい生命をこれに與へるものは、やつぱりわが肉と心との力を直接に試むべき勞働そのものでなければならぬ。わが腕の動いて、發矢と打ち下ろす鐵槌は、わが胸に一つ〳〵深い意義ある響きをかへすものである。數字の計算も、圖式の考究も、畢竟は、この火花を散らして錬へ錬はるゝ一片の鐵板を基としてゞなければならぬ。この一片の鐵板にこそ、「一つの道」の眞實がはじまる。——

「おゝ、わがゆく一つの道！」

彼は心に叫んだ。彼の眼は輝いた。息ははずんだ。

彼は打つた。打つた。――傍目もふらずにグツと大地を踏みしめて、打ち續けた。

もう彼の以前の同僚であつた技師連も、彼のかうした眞劍な態度について、なんの批評も加へなかつた。いや、加へる餘地がなかつた。次第に彼等は彼に敬服しはじめた。職工たちも彼には心からの尊敬と同情とを持つた。

「君塚君の働いてゐるところを見ると、ほんたうの仕事とはどんなものであるかを敎へられるやうな氣がする。」

と、或る技師はいつた。

「君塚さんはえらい人だ。あの人こそ人間の仕事を働いてゐる人だ！」

と、或る組長はいつた。

「君塚さんにはかなはない。おれはあの人よりもズツと強い身體をもつてる筈だが、あの鐵槌ほどの強い力が出せない。どうも不思議だよ。」

と、或る職工は頭を掻いた。

――しかし、かうして周圍がみな靖也に好感情をもつてゐるなかに、一人、なぜか妙な、理由のわ

からぬ反抗の眼で、冷やかにそれ等の言葉を嘲らうとする者があつた。

それは、あの、庄太であつた。

庄太はあの晩から、續けて三四回小宮と一緒に酒を飲んだ。小宮が彼にどんなことをいつたか、それは誰も知らぬことであつたが、小宮に會ふごとに、彼が靖也に對する奇怪な反抗的態度は、ますます濃厚に露骨になつてゆくのは事實であつた。いつかの喧嘩のさばきを、「あの野郎にしちや、わかつた話をつけやがつた。」といふ風に笑つたのが、この頃では、すつかり反對にそれを根にもつて、「あの野郎の扱にやあ、まだ一文句も二文句もあるんだ。あの野郎、あれんばかりの口をきいて、おれをすつかりまるめ込んだつもりでやがる。甘く見てやがるのが癪だ。まだ〳〵承知ならねえ。こんどはあいつが相手だ。今に見ろ。」といふやうな、不快らしくからんだ棄臺辭を。誰彼になくいひ散らした。

なかには心配して、ソツとそれを靖也に告げる職工もあつたが、靖也は一切氣にかけなかつた。彼はたゞ仕事といふ信念に燃ゆるほかは、身邊に起るどんな言葉にも耳かたむけようとしなかつた。たゞ「一つの道」を正しく強つ、まつしぐらに生きてゆかうとする彼には、庄太の反抗などは、一顧にも價しない問題であつた。

或る日の朝、彼が用事のため、模型工場のはうへ急ぎ足に歩いてゆくと、突然、彼の肩越に、大きな石炭骸が飛んで、前方の鐵屑の小山にあたつて碎けた。驚いて振りかへると、そこに移動起重機を

レールに走らせてゐる庄太の冷笑するやうな眼があつた。
「やあ、御免よ。どつからか犬がまぐれ込んで來やがつたのでね。そいつを追つ拂はうと思つて投げたんだが、お前さんがそこを通つてるたぁ氣がつかなかつた。」
「いや、なんでもない。僕がウツカリこのレールを傳つてゐたのが惡かつた。や、仕事のお邪魔になつて失敬した。」
靖也は氣輕に笑つて、サツサと用事を片づけに行つた。——もとより、あたりに犬一疋ゐたわけではなかつた。が、靖也はそんなことにも眼をくれなかつた。——
——榮藏は、靖也の仕事振りをそれとなく注目して、まつたく滿足してゐた。彼は靖也に、なにか立派な仕事の與へらるゝ機會を待つた。
そしてその機會は、遂に來た。靖也が工場で働きはじめて約二ケ月目——初夏の新綠の鮮かな陰影を窓ガラスにそよがせてゐる或る日の午後、榮藏は會社の重役室で、給仕のついで出す茶をグツと飲みながら靖也と相對してゐた。
「どうだね、仕事は？」
と、榮藏は大きなデスクの上に堆積した青寫眞やら、報告書類やら、工事豫定表やらを脇に寄せながら微笑した。

「は……たゞ愉快ですとお答へするよりほかはありません。」
靖也は自分の言葉に自分でうなづくやうにいつた。
「さうかね。それはなによりだ。さういふ答へを聞くことは、わしも愉快だ。君がさうして勞働を根本的に理解して、自分の將來の仕事を完成することに、一歩々々力强く進んでくれるのはなにより嬉しい。……そこで今日は、君が當然酬はれるべき時期の來たことをお祝ひしたいのだよ。」
「わたくしに酬はれるべき時期……？」
「さうだ。その時期が來たのだ。靖也君、よろこびたまへ。今度、この會社で一萬二千噸の船をつくることになつた。その建造のすべてを君に一任することに、昨日の重役會議できまつたのだ。わしは、君の叔父としてゞなく、この會社の重役として、君に、これを命令もし、且つ、およろこびの言葉を述べる。」
榮藏の語調は嚴肅であつた。
「えつ、わたくしにそんな大きな仕事を……？」靖也の息ははずんだ。が、「しかし、わたくしは、まだまだ勞働の眞意義をつかむまでの經驗を得てゐませんし。わたくしはすくなくとも一箇年はかうして一職工のまゝ働きたいと思つてゐるのです。」
「そりやあ君としてさうあるべきだらうが、今度の仕事は別にわしが君のために機會をつくつたので

レールに走らせてゐる庄太の冷笑するやうな眼があつた。
「やあ、御免よ。どつからか犬がまぐれ込んで來やがつたのでね。そいつを追つ拂はうと思つて投げたんだが、お前さんがそこを通つてるたあ氣がつかなかつた。」
「いや、なんでもない。僕がウツカリこのレールを傳つてゐたのが惡かつた。や、仕事のお邪魔になつて失敬した。」
靖也は氣輕に笑つて、サツサと用事を片づけに行つた。——もとより、あたりに犬一疋ゐたわけではなかつた。が、靖也はそんなことにも眼をくれなかつた。——
——榮藏は、靖也の仕事振りをそれとなく注目して、まつたく滿足してゐた。彼は靖也に、なにか立派な仕事の與へらるゝ機會を待つた。
そしてその機會は、遂に來た。靖也が工場で働きはじめて約二ケ月目——初夏の新綠の鮮かな陰影を窓ガラスにそよがせてゐる或る日の午後、榮藏は會社の重役室で、給仕のついで出す茶をグツと飲みながら靖也と相對してゐた。
「どうだね、仕事は？」
と、榮藏は大きなデスクの上に堆積した青寫眞やら、報告書類やら、工事豫定表やらを脇に寄せながら微笑した。

「は……たゞ愉快ですとお答へするよりほかはありません。」
靖也は自分の言葉に自分でうなづくやうにいつた。
「さうかね。それはなによりだ。さういふ答へを聞くことは、わしも愉快だ。君がさうして勞働を根本的に理解して、自分の將來の仕事を完成することに、一歩々々力强く進んでくれるのはなにより嬉しい。……そこで今日は、君が當然酬はれるべき時期の來たことをお祝ひしたいのだよ。」
「わたくしに酬はれるべき時期……？」
「さうだ。その時期が來たのだ。靖也君、よろこびたまへ。今度、この會社で一萬二千噸の船をつくることになつた。その建造のすべてを君に一任することに、昨日の重役會議できまつたのだ。わしは、君の叔父としてゞなく、この會社の重役として、君に、これを命令もし、且つ、およろこびの言葉を述べる。」
榮藏の語調は嚴肅であつた。
「えつ、わたくしにそんな大きな仕事を……？」靖也の息ははずんだ。が、「しかし、わたくしは、まだまだ勞働の眞意義をつかむまでの經驗を得てゐません。わたくしはすくなくとも一箇年はかうして一職工のまゝ働きたいと思つてゐるのです。」
「そりやあ君としてさうあるべきだらうが、今度の仕事は別にわしが君のために機會をつくつたので

なく、昨日の會議で社長の口からその話が出たのだ。この命令は會社から君に對する命令なのだ。君はこの社に働いてゐる以上、この命令に服從しなければならない。君一箇の勝手な都合はこの場合棄てゝくれなければいけない。」榮藏の言葉は、どこまでも公正無私な嚴かなものであつた。「わしは今、社長からの任命書を君にお渡しする。この仕事から君に技師として働いて貰はねばならぬ。……これからわしは叔父としていふが……靖也君、よろこんで君はこの仕事を引受けねばなるまいよ。技師であつても地爐の前に鐵槌を揮ふ勞働の心持は續けてゆけないことはない筈だ。よろこんで、この仕事をお受けしたまへ。それは當然君の信念と努力とに酬はるべき時期が來たのだ。わしは心からお祝ひする。」

「はい。有難くお引受けいたします。」と、靖也は椅子から立つて頭をさげた。「仰有るとほり、心堅い信念をもつて、生命にかけてもこの仕事を立派に完成して御覽に入れます。」

「おゝ、それで滿足だ。早足このことを社長にお話しする。……いふまでもないことだが、どうか立派に第二の雄康丸をつくつてくれたまへ！」

「は、たしかに！　誓つて會社の御希望に副ふことを期します。」

「では、これを……」

榮藏は改めて、デスクの抽斗の中から一通の封書を渡した。靖也は謹んでそれを受けた。

——靖也が、この仕事に主任として働くことになつたことは、速刻、社内の掲示場へ掲示された。彼の以前の同僚たる技師も、また職長や組長も、みんな彼の周圍に集まつて、心からの「お目出度う！」を連呼した。彼は欣然としてこれらに答禮した。

「君塚さんの仕事には、是非僕は使つて貰ひたいよ。ひとつあの人と、力一杯の仕事がして見たい。」

「第一回の仕事だつて、決して君塚さんの失敗ではないのだ。それを飽くまで自分で責任を感じるやうなあの眞實さにはまつたく敬服する。僕はどうしても君塚さんの下に働いて、あの人の今度の仕事を意義あらしめるものにしたい。」

——かう、伍長や平職等はいひかはした。

「ふむ。技師になつたら、急に胡麻をすりはじめやがる。……へん、仕事を意義あらしめる？　生意氣あいふない。笑はかせやがら！」

その時、やゝはなれて彼等の聲をきいた庄太は、冷罵といふよりも、どこか敵意と邪智とをほのめかすやうな眼をくれて、ペツとあたりに唾をはいた。

なかには咎めるやうに、キツと庄太に顏をむけた職工もあつた。伍長の田島もそこにゐた。彼は憤然と庄太のはうへ踵をかへさうとしたが、靖也はおだやかに笑つて、彼の左手をつかんでひきとめた。

庄太はいかにも殊更らしく傲然と肩をゆすつて、製帆工場の彼方へ立ち去つた。

「あの野郎、いつかは土性骨をブツ挫いてやらなくちや……」
と、田島は拳をかたく握りしめた。
――庄太は廣場に出て、そこに投げ出されたZ鐵棒に腰をおろした。ポケットをさぐつてバットを一本つまみ出して口にくはへたが、燐寸がなかつた。彼はあたりを見まはした。誰もそこを通りかけなかつた。
「……ふん。」
彼はひとり鼻先でせゝら笑つた。――と、思ひ出したやうに煙草を耳にはさんで、また胸のあたりの内ポケツトをさぐつたが、一通の西洋封筒をひき出すと、急いで封を切つて、中の用紙をひろげながら讀みはじめた。彼の太い眉は、折々ピクリと動いた。
「……へつ、難有てえ。今夜はまた一杯飲めるな。……で、當座の褒美の十圓と來る。悪くねえな。だが、小宮つて奴も、見かけに寄らねえ悪黨よ。まだおれに肝心な話は持ちかけねえやうだが、なんかおれを利用して一仕事やらうといふ腹あ、こつちもちやんとお見通しだ。今夜は是非相談に乘つて貰えてえことがあると書いてよこしたが、どんな魂膽か、そいつを聞くのも樂しみだ。……あつちもおれを利用すれば、こつちも利用されながら甘え汁を吸つてやらなきや……役に立つてやる代りに、うんとこつちのためにもならせてやる分だ。お德用とお德用の鉢合はせか……ふゝゝ、面白れえ！」

彼は手紙を、また胸に捻ぢ込んで立ちあがつた。
「矢島兄い。なにをひとりでニコついてるんだい？」
うしろから聲をかけたのは、彼の機嫌を買つて、時々酒場の安ブラン一杯にありついてゐる、塚本といふ鐵工工場の職工であつた。
「おゝ、塚本か。」
「なんだな。いま遠くから見て居りやあ、手紙を出してひとりでニコ〳〵やつてたぜ。え？　お樂しみ筋なんかね？　――今夜はぜし〳〵おん眼にかゝりいろ〳〵と來たね。」
「なにをいつてやがる。おれに來る手紙なんざあ、お樂しみでなくてお苦しみだ。みんな借金の催促よ。」
「うんにや、なんでも怪しいその一通。」と、剽輕らしく聲色を使つて、「駄目だよ。宵越しの天婦羅だ。たゐはちやんとあがつてゐらあ。」
「なにを……くだらなく酒落やあがる。」
「とにかく證據をつかんだからにやあ、唯ぢやあすませねえよ。」
「どこかで一杯飲ませろか。お株ういつてやがら。」
「どうだい。メリケン・バアは？」

「ふん。メリケン・バア……あんなけちつ臭えとこあ、もう當分おつきあひ御免だ。」
「だつて、あすこの酒あ、ほかよりはグツと上等だぜ。お前、あすこの定得意ぢやあねえか。」
「もうあんなとこの酒あ飲めねえ。」
「どつかほかに、うめえ酒を飲ませるとこを見つけたのかね？　ぢやあ、そこへお伴してえね。」
「そのうち飲ませてやるよ。」
「そのうちといはねえで、今夜あどうだね？」
「今夜あ、すこしほかに約束があるんだ。」
「約束がある？……いよ〳〵今の手紙が怪しいぞ……怪文書だぞ。」
「なにをいつてやがる。は〻〻。」
「ぢや、今夜とはいふめえ。折角のお樂しみを、邪魔あして野暮がられたくはねえからな。しかし、二三日うち、きつと渡りをつけてもらふぜ。い〻かえ。」
「あ〻、い〻とも。」
「じや、左様なら。」
「おい〳〵塚本、燐寸を持たねえか。」
「持つねるよ。そつくり進上すらあ。へん、どうだ。氣前がい〻だらう。」

塚本はポケットから燐寸函を出して、氣輕に投り出しながら起り去つた。
庄太は耳から煙草をとつて、吸ひつけた。
「ふん、怪文書だつていやがつた……なるほど、怪文書にやあちげえねえや……」
彼はフツと煙を吹き出しながらひとり笑つた。

……もう二時を過ぎてゐた。靖也の書齋にはまだ灯がともつてゐた。
興奮した彼は、まだ眠られさうにもなかつた。デスクの上には幾つもの製圖がひろげられてゐた。
針のやうに鋭くとがらした3Hの鉛筆を、彼は折れんばかりに堅く握りしめてゐた。
見る〳〵會心の笑みが、彼の唇にのぼつた。鉛筆を置いて、フツと息を吹きながら、椅子に強く四肢を伸ばした彼は、全身のどの端くれにも、新しい力が流る〻血を、感じずにはゐられなかつた。
鉛筆をつかんだ五指は、張りつめに意氣の拔けやらぬまゝに、まだかすかに震へてゐた。
大きな希望と、それに對する感謝！
彼は震へる五指をジツと見つめた。やがてこの手によつてさゝげらる〻、五彩の綾絲で飾つた榮譽の斧！　進水式の壯嚴な光景が、まざ〳〵と彼の眼にうかんだ。この手は船の構圖を案じ、船の生命

である鉸釘を締め、さうして當日の第一賓客である人に、龍骨盤木はづし方の合圖なる、シヤムパンの祝酒支線切斷の斧をさゝげるのだ。そして――それから――

「それから……」

彼は思はず、ひとりつぶやくのであつた。微笑するのであつた。

――それから――この手は、次ぎになにを――？

彼は、百雷の一時に落つるがごとく起る、歡呼喝采のなかに、つゝましやかに、しかし誰よりも感激にみちて動く、白い手を思ひうかべた。病床にある時、わがさし出したこの右手に、靜かに置かれたあの白い手を！

靖也はプシ〳〵指を鳴らした。

愛と、希望と――すべては、あの信念の「一つの道」につながり進む、轍の跡である。雄々しく勇ましい六月の太陽は、この轍を黃金に照らすであらう。愛と希望とは相並んで、直ぐなる目標へ、輝かにめぐり續けることであらう。

靖也は、そこに、さつきお加代が運んでくれたまゝ忘れてゐた紅茶を靜かに飲んだ。甘美なつめたさが、彼のやゝ熱ばんだ喉から胸を、さはやかに流れてゆくのを覺えた。

彼は椅子から立つて、室內をあるきはじめた。ふと、壁上に映つたデスクと、そこに積みあげた製

圖や洋書の影が、不思議に一つの船の形をなしてゐることに氣がついた。彼は思はず立ちどまつた。なにか知ら吉兆があらはれて來たやうな氣がした。彼はちよつとデスクの上の堆積を變へて見た。また別の形の船が出來た。

「はゝゝ、こいつは面白い。こいつは愉快だ。」

彼は口笛をふいた。子供のやうに、足で進行曲の拍子をとつた。首と肩とを、躍り出すやうに振つた。

壁上の船は、彼の眼に、ゆるがぬ黑鐵の城塞のやうにも見えた。泡立つ青潮を蹴返して、堂々とゆるぎ出す大船！　わが信念をそのまゝに形としたる大船！

彼はガンと床を強く足ぶみした。

「よし、やつて見せるぞ！　生命がけでやつゝけてやるぞ！」

彼はグツと腕をつき出した。

――いつまでも、彼の口笛はあかるい窓から漏れてゐた。

――さうして寢に就いた靖也は容易に眠ることはできなかつた。青い絹の蔽ひに漉された電燈の光は、天井にその刺繡の花模樣をいくつもの同心圓にひろげて、心なしか僅かにゆらいでゐた。明日からの仕事の計畫が、その大きな圓周を、走馬燈のやうにあとからあとから現はれては消え、消えては

現はれて驅けめぐるのであつた。

彼は輕く眼を閉ぢた。眠らうとして靜かに呼吸を整へた。

が、まぶたの裏に、彼の呼吸につれて、明滅する美しい形象があつた。それは、つゝましやかに、しかし意志强く彼に見入る美知子の顏だつた。その顏は彼を信じ彼を勵ますやうであつた。……と、映畫の二重露出のやうに、輪廓が次第にボヤけて、次の顏が滲み出した。その顏は彼を淋しく悲しげに見た。喘ぐやうに訴へるやうに、唇はかすかに震へた。そして次第に遠のいて、はかなくつらく影は薄れて行つた。

「おゝ、お加代！」

彼は低く呼んだ。

その聲に、影はまた生きかへつたやうに、ハツキリした形を見せやうとしたが、突然、横合からスル〳〵と黑い影が蜘蛛のやうに走つて、顏の前を遮つてしまつた。と、思ふと、今度の黑い影は見る間に、濡れたガラスの面に落したインクかなぞのやうに颯と四方へまるくひろがつて、奇怪な惡魔の假面のやうな形を印した。次の瞬間、その假面がハラリと脫げ落ちると、美しくまどはすやうな眼と貝の肉のやうな、なま〳〵しく濡れた唇とが、もう、彼の顏と一尺も隔てずヂリ〳〵近づいて來るのを、どうすることもできなかつた。

「……靖也さん、忘れたの？　この唇を……」

彼は跳ね起きようと焦つた。——が、蒲團にのしかゝつた影はまるで大盤石のやうに、彼の五體をすきなく押へつけて放さなかつた。

「惡魔！　汚女！」

彼は叫んだ。

「……さあ、どうなの？　息がくるしいの？　もがいたつて駄目よ。あなたはこの唇がもつ、誰もに觸れない誘りを奪つたのよ……そして、今更この唇から逃れようとしたつて、それは卑怯よ。それは駄目よ！」

「おのれ惡魔！　この汚女！」

「ほゝゝ、そんなにこの唇が恐ろしいの？　憎いの？　……だが、この唇は、あなたに決して苦く冷たくはなかつた筈よ。そして今でも、むかしの通りの、美しい赤さは褪せてない筈なのよ。」

「おのれ……まだいふか……」

彼は滿身の力をこめて、この毒に爛れた唇を擊ちのけようとした。——が、彼の兩手は重い鎖につながれたやうに、すこしも動かなかつた。

「……さあ、この唇をあなたはよろこんで受けて、くれなくちやなりませんよ……さあ、わたしの

この唇を……あなたの、その唇を……」

もう、一寸と離れてはゐない。妖しく笑ふ唇は、次の一瞬で……

「あつ……おのれ！　……あつ！」靖也は自分の聲に眼がさめた。

いつの間にか、彼は眠つてゐたのであつた。

彼は、いまの魔夢に、額に脂汗をにじみ出させてゐた。

蒲團からムツクリ飛び起きて、彼は縁に出た。夜更けた初夏の空氣は、どこか粘々と蒸してゐた。

彼は縁をつたつて再び書齋に入つた。

スヰツチをひねつて電燈を點けると、彼は椅子に寄つて、はじめてホツとひと息した。

「なん時だらう？」

彼は書棚の上の、小形の置時計を見た。二つの針は、五時半を示してゐた。

「馬鹿々々しい夢だ！」と、彼は吐くやうに苦笑した。「僕のどこに、龍子なんかのうち込む隙がある んだ。僕の信念の力に、惡魔は一足だつて寄りつくことができるもんか！」

彼は拳をかためて、ブンと空を拂つた。

――臺所のはうで、ザアと水を流す音がした。もうお加代は起きて働いてゐるのらしかつた。

×　×　×

郊外、調布から多摩川のはうへむけて、踏む足に輕く砂埃の舞ひ立つ道を、ゆつくりあるいてゐる男女がある。女のさしかけたグリーン琥珀地に、縞タフタをあかるくつけた洋傘は、半町ばかりを離れて走つてゐる電車からは、肩をならべた男の顏と自分の顏とを、時々蔽ひかくすやうに、まぶしげに傾けられて見えた。低く漂ふやうに、彼の頭上を練雲雀がチー〳〵啼き過ぎて行つた。

やがて彼等は、綠の斜面に出た。そこからは、急に展望がひらけた。やゝ黃ばみそめた麥畠、村の藁屋、赤い崖下の小學校――こんもりした森が、切れたり續いたりする間を、磧の石が白く光つてゐる。帶のやうに伸びた川面に、帆をあげた船や筏がすべるやうにゆきかつてゐる。遠い追分石の見ゆるあたりを、車ひく馬と人とが、玩具のやうに通る。――空は天鵞絨を垂れたやうに、やはらかに霞んでゐる。

男女はどちらがいひ出したでもなく、そこの草原に足をとめた。

「すこし疲れたでせう？」

「いゝえ。」

「美知子さんは案外足が達者ですな。」

「だつて、まだ半里くらゐしかあるいてはゐませんもの。わたくし、二里や三里は平氣であるけます

×　×　×

わ。」

「さうですかねえ。そりやあ感心だ。」男は――靖也であつた。「これからゆつくりあるいて丸子へ出てあすこで夕飯を食はうと思つてゐるのですが、大丈夫ですかね。」

「えゝ、大丈夫ですわ。」

「僕は、美知子さんがこんな健脚家だとは思つてゐませんでしたよ。どこにゐらつしやるにも自動車でおでかけなんだから、もうこの邊で、そろ〳〵跛足をおひきなさるだらうと思つてゐました。はゝ。」

「あら、あんな……」と、美知子はポツと汗ばんだ顏に手巾をやりながら、「わたくし、自分ひとりの用の時は、決して自動車なんかに乘りはいたしませんわ。お稽古にまゐります時なども、先生のお宅は江戸川端なんでございますが、大抵はあるいてまゐりますの。歸りのおそくなりました時には、電車に乘ることもございますが……」

「お稽古……なんのお稽古です？」

「いゝえ、お恥かしくつて、申しあげられるやうなものではございません。」

「美知子さんのお稽古つて、なんだらうな……お花やピアノなどは、もう充分におできなさるのだし……なんだらうな？」

「あら、お花もピアノも、まだ〳〵勉强せねば駄目でございますわ。しかしこの頃はすつかりなまけてをりますの。」

「今熱心にやつてゐらつしやるのはなんです？」

「そんなこと、お聞き遊ばしちや困りますわ。ほんたうにお笑ひを受けるやうなものなんでございますもの。」

「ぢや、ダンスですか？」

「わたし見たいな引つ込み思案の者に、ダンスはとても習へませんわ。」

「あ、さうでしたな。いつかの日比野先生のお宅のクリスマスの晩にも、あなたは踊られなかつたやうですな。あの晩、若い連中で踊らなかつたのは、あなたと僕と二人きりでしたな。……ぢや、なんだらう？　美知子さんのお稽古は？」

「ほゝゝゝゝ。」

「さつぱり見當がつかない。」

「つまらないものなんですもの。君塚さんには、どんなことがあつても、おわかりになりませんわ。ほゝゝゝゝ。」

「わからない……殘念だな。なんだらう？」

靖也はしきりに首をひねつた。
「ほゝゝゝゝ。もうそんなこと、お考へ遊ばすのはおやめくださいまし。」
「いゝや、やめません。なんだらう？　お花でもなし、ピアノでもなし、ダンスでもなしと……美知子さんらしい趣味からいつて、なんのお稽古かな？　はてな？」
「そろ〳〵行かうぢやありませんか。」
「いゝや、そのお稽古を考へつくまでは、こゝを一寸も動きませんよ。」
「まあ、駄々つ兒のやうに……」
美知子は笑つた。
わざとのやうに靖也はドツカリ草原に腰をおろした。
「なんだらう？　美知子さんの趣味がわからないとは殘念だ。」
「もういゝぢやございませんの。」
「いゝや、よくはありません。僕は美知子さんをよく知つてゐる積りだつた。それが美知子さんの趣味を知ることができないのだもの。どうにも殘念です。」
「まあ。」と、美知子は、靖也の顏色が案外眞面目であるのに驚いて、「わたくし、なにも君塚さんに隱しだてしようとしたのぢやないのでございますわ。……實は、能の鼓と仕舞とを習つてゐるのでございます。ほんたうにお恥かしいほど初歩なので、お話する氣になれなかつたのでございますわ。」

「あゝ鼓と仕舞……なるほど、これは美知子さんらしい趣味だ。そこには氣がつきませんでした。」
「べつにわたしの趣味と申すのではございません。父に勸められましたので……」
「お父さんもおやりになるのですか？」
「えゝ、りやあ大自慢なのでございますよ。朝起きて顏を洗ひますと、もうお座敷へ歸る廊下で、謠ひなんでございますもの……そして時々はわたしに鼓をうたせるのでございますが、まだ習ひはじめて一年にもならぬ者を、刻みの手がわるいの、乙のうちやうがいけないの、姿勢が崩れるの、構へがなつてゐないのと、お講釋が大變なのでございます。ほゝゝゝゝ。」
「さうですか。それはいつか是非拜聽いたしたいものですな。お父さまの謠ひとあなたの鼓と、妙技神に入つたところを……」
「あら、そんなにおからかひなさつて……君塚さんも、お見かけによらない皮肉を仰有るのでございますねえ。」
「皮肉ぢやありません。ほんたうに拜聽したいのです。」
「だつて、妙技なんて、ひどい皮肉でございますわ。」
「では、お上手なところをと訂正します。」

「それでも皮肉でございますわ。」
「では、お下手なところをと訂正しませうかね。」
「えゝ、お下手なとこなら、なんぼうでもお聽かせいたしますわ。ほゝゝゝゝ。」
「どうです。僕が大皷のかはりに、習ひおぼえの鐵槌の一手を入れませうか。」
「え、結構でございますわ。」
兩人は顏見あはせて笑つた。
しばらく彼等は、燦々と降りそゝぐ陽光のもとに、甘い草いきれにつゝまれながら、あたりの景物に見入つてゐた。
彼等は、こんな他愛もない言葉をかはして、たゞ輕く笑ひ興じてゐるのであつたが、そこに、彼等の心と心のうちには、なにか言はうとして切ない、觸れようとして苦しいものがあつた。そして切なく苦しいものではあつたが、それゆゑに、また不思議に樂しく嬉しい感情を、おの〳〵二つの心に泡立たしてゐたことも事實であつた。……今日、靖也の久しぶりの休み日を偶然に、美知子は康子を訪問して、こんどいよ〳〵靖也が大きな仕事にとりかゝることになつた話を聞いた時のよろこび。それから仕事にとりかゝつては、一日も休養せぬといふ靖也の意氣込みを聞いて、この一日をせめて呑氣な郊外散歩をしようと相談がまとまつたのである。義理堅い康子は、一應朝倉家へ電話をかけて、美

知子の母なる壽子に、兩人を遊びに出していゝかどうかをたしかめた。壽子の信じきつた心置きない許可の返事は、美知子にも靖也にも――そして康子にも――どんなに嬉しく有難いことであつただらう？　家を出てからしばらくは、兩人は妙に默りあつて、省線から蒲田で乘り換へ、この調布の停留場へつくまでは、形容のつかぬ恥らひが、彼等に一語をもかはさせなかつた。いや、彼等は、眼と眼をあはすのさへ、いつも康子をまんなかにして、笑ひさゞめく時とちがひ、なぜか改まつた氣持で愼しまれるのであつた。改札口を出て、一町ばかり歩いて、やつと人目から逃がれた時、靖也はすこし後れてあゆむ美知子に、ふり振りむいて微笑んだのであつた。それからやうやく、兩人の間に一言二言がはじまつたのであつた――
「……美知子さん。」
やゝあつて靖也は、ステツキの先で草の根を、コツ〳〵突きながら、空唾をのむやうにいつた。
「え？……」
美知子は洋傘を疊んで、手巾をひろげ、彼と半間ばかりはなれたところに腰をおろした。
靖也はなにか言はうとして、また空唾をのんだ。
「いよ〳〵明日から、ほんたうのお仕事におとりかゝりなさるのでございますねえ。さぞ御滿足でございませう。」

美知子は、靖也の今の題目に、即かぬやうなことをいつた。
「えゝ、難有う。」
「わたし、心から御成功をお祈りいたしますわ。」
「難有う。」
これですぐまた話が途切れた。美知子は、もとより改めて、よろこびの言葉を述べた譯であり、靖也も改めて嬉しくその言葉に謝した譯であつた。が、彼等の高まらうとする感情は、かうした單に挨拶めいた祝辭と謝辭とを今更らしく交換することゝは、全然別の問題にあるのであつた。彼等はおのおの充分よくそれを知つてゐた。知つてゐながら、どうにもそれを處理することができなかつた。
美知子はうつむきながら、指先で、そこに、名も知れず小さく咲いた白い花をソツと彈いてゐた。靖也も、なにか自分の心に焦々するやうに、ステツキで、草の根をグン〳〵突ついた。
「……美知子さん。」
彼は、たゞステツキの先を見つめながら言つた。
「え？……」
美知子も、白い花ばかり見つめながらいつた。
彼等は互ひに向き合はうとはしなかつた。彼等同士の會話といふよりも、まるで靖也はステツキに

美知子は白い花に、かたくなに話しかけてゐるやうであつた。
――ちぐはぐな沈默が、そこにあつた。
遂に思ひきつた樣に、靖也は美知子に力强い眼をやつた。彼はもうステツキの手を動かさなかつた。
「美知子さん。」
彼の調子は、當然求むべきものを求むるやうに、充分眞劍であつた。
「はい。」
美知子の返事にも、これに應じて正しく愼しみ深い響きがあつた。
「美知子さん。僕は今日、いまこゝで、改めてあなたに申しあげたいことがあるのですが……」
「……」
「美知子さんは、僕がいふ言葉を、きつとあなた自身の眞實をもつて、聞いてくださることゝ思ひます。……美知子さん。さう聞いて頂けるでせうね？」
「えゝ。」
彼女は幽かに、しかし躊躇するところなくうなづいた。
「美知子さん。僕はいつか病院で、僕のさし出した手に、あなたの手が靜かに堅く置かれた瞬間を、僕の今までの生涯の、どの記憶よりも深く記憶してゐます。あなたも……あなたもあの瞬間を、記憶

してゐてくださいますか？」
美知子は無言のまゝ、伏眼に再びうなづいた。
靖也はちよつと唇を嚙んで、化石したやうに空間を見つめてゐた——が、肺臓の空氣を、フツと絞るやうに肩のあたりを搖ると、すぐ——
「美知子さん。僕の無躾、僕の無作法は、あとから幾重にもお詫びするとして、僕は今、この機會にこの與へられた惠まれた機會に、僕の心の底の底にある一つの言葉を、ハツキリ言はせて頂きたいのです。たつたひと言……けれど、それは僕のすべての眞實の基底となつてゐるひと言……」
「……君塚さん。」美知子はキツと顏をあげた。が、さすがに聲は震へてゐた。「君塚さん。……あなたのそのひと言は、わたしにはわかつてゐます。」
「え？　わかつてゐてくださる？」
靖也の息は熱かつた。
美知子はつゝましやかに、三度びうなづいた。
「え？？ほんたうに……ほんたうに……それをわかつてゐてくださいますか？」
「……はい。」
「美知子さん。そして……そしてあなたは……」

聲帶が乾いたやうに、靖也の聲はかすれるのであつた。
美知子はいよ／＼うつぶしになつた。なめらかな頸のあたりにほつれた髮が、幽かに震へてゐた。
「美知子さん。そしてあなたは……あなたは僕のこの眞實を……受けいれてくださるでせうか？」
「……」
「美知子さん。御返事ください。どうか……たゞひと言でいゝのです。受けいれてくださるか、くださらぬか、そのたゞひと言を承はりたいのです。」
キツと、美知子は顏をあげた。
「君塚さん。」
「え……」
「君塚さん。わたしはあなたの、そのお言葉をお恨めしいと思ひます。」
「えつ……？」
「わたくしは……」美知子の言葉は、感情に灯をともされたやうに、ハツキリして來た。「わたくしは、あなたの病床のおそばにゐて、決してふしだらな心や戯れの氣持で、あのやうなことをしたのではないつもりなのでございます。あなたは今さらあの時のことを、保證しなほせと仰有るのですか？　それは、ほんたうにお恨めしう存じます。わたくしを信じてくださらないあなたを、いま改めてお恨み

いたします。」
「僕が悪かつた。お詫びします。……お詫びします。僕は勿論あなたを信じきつてゐたのです。しかし……あの時のことを、僕は、ただ、熱に浮かされて興奮して、僕の手にあなたの手を要求したとだけ考へられたくはなかつたのです。あの時の心持を、たゞ高ぶつた心持としてゞなく、ほんたうの誓ひとして、あなたから眞實のお言葉を聞きたかつたのです。いや、決して、保證しなほせとかなんとかいふ、憫れむべき卑しい考へではないのです。たゞ……」
「君塚さん。わたくしは眞實以外に、あのやうなことはできません。わたくしはあの時、あなたの眞實のお心持に、わたくしの眞實をお返ししただけでございます。わたくしはあの時のわたくしを、自分も、決して恥づべき、はしたないことをしたとは思つてをりません。それは自分に堅い眞實があつたからこそでございます。」
美知子の言葉は、拭はれた鏡のやうに、ハツキリ彼女の強い意志を反映してゐた。
その正しく強い態度は、靖也をどんなによろこばせたか知れなかつた。彼は感謝と希望とに、身がひきしまるやうであつた。
「今更らしく、僕がかうしたことを口にしたのは、われながら淺間しい氣がします。勿論、僕はあなたの眞實を信じきつてゐたのです。だから、轉地した時も、高柴君になにもかもうちあけてしまつた

のです。」
「あら、高柴さんに?」
美知子はパツと耳まで顏を赤くした。
「高柴君は僕の唯一つの心の友達です。兄弟です。あの男には母にいへぬことも僕はうちあけてゐるのです。……僕は高柴君に貴女の事を話して、僕は貴女を……」靖也はグツと唾を呑み込みながら、
「あなたを……愛してゐるといひました。そして……そしてあなたも……あなたも僕を愛してゐるといひました。僕は、あの病院の生活以來、あなたを信じきつてゐたのです。だから立派にそれがいへたのです。」
「……」
「……かうしてあなたを信じきつてゐながら、まだあなたに、先刻のやうな言葉を口にしたのは、いかにもあなたを試してゐたやうで、まつたく恥ぢ入ります。眞實はたゞ眞實であつて、試されるものではありません。試されるものは眞實とはいへません。それは氣まぐれな感情とか理智とかいふものです。僕はあなたのそのお心持に對して、ほんたうに恥かしい。お詫びします。おゆるしください。」
「いゝえさう仰有つて頂きますと、わたくし、どう御返事いたしていゝかわかりません。あなたに、試すとか確かめるとか、そんなお心持のないことはわかつてゐます。もしそれが試されたのなら……

やつぱりわたくしの眞實が足なかつたのだと、自分を悔ひ、自分を責めるよりほかはございません。お恨みすると申しましたわたくしの言葉こそ、ほんたうに失禮でございました。わたくしこそお詫びしなければなりません。おゆるしを願はなければなりません。」

美知子の一句々々には熱情が籠つてゐた。

「難有う！　美知子さん。もう僕はなんにもいひません。難有う！　――たゞこれだけです。ほんたうに僕は清々しました。僕はこれから働けます。よろこびと希望をもつて思ふ存分働けます。かうした更に新しい力と勇氣は、美知子さんの眞實から僕の手足に湧き出るのです。僕は幸福だ！。」

靖也は低く自分に叫び込んだ。

「わたくしも……幸福ですわ。」

「おゝ、幸福！」

兩人の手と手は、どちらからともなくさし出されて、堅く〳〵握り合はされたのであつた。

感謝と感謝の幾分間が過ぎた。

靖也は靜かに起ちあがつた。

「さあ、そろ〳〵出かけませう。丸子までは、まだかなり道程がありますよ。すこし急ぎ足にしなければなりませんが、美知子さん大丈夫ですか？」

「大丈夫ですわ。」

美知子も心やすく笑ひながら立つた。

「僕はグン〳〵あるきますよ。ついて來られますか？」

「どんなにグン〳〵おあるき遊ばしても、わたくし、敗けずについてまゐります。」

また、彼等は顏見合はせて笑つた。綠の斜面を、靖也は元氣よく下りて行つた。

「あら、そんなに大股でおあるき遊ばしては、わたくし苦しうございます。」

「それ御覽なさい。やつぱりついては來られますまい。」

「だつて、ことさらそんなにおあるきさなるのですもの。わたくしをいぢめようと思つて……」

「いぢめる？　……どうして僕があなたをいぢめるんです？　僕はそんな意地惡ではありませんよ。」

「だつて、あなたは男の足なんですもの。」

「あなたは、たつた今、敗けずについてゆくつて威張つたぢやありませんか。」

「あら、威張りなんぞいたしませんわ。ただあなたのゆけるとこまでは、わたくしどこまでもついてまゐると申したのでございますわ。」

「僕のゆけるところまで、美知子さんはどこまでもついて來てくださる……」靖也はジツと美知子を見返へつた。「さうです。美知子さんは、一生涯、僕のゆく道に――僕のあゆみ續ける一つの道に――

どこまでもついて來てくださる人だ！」

「えゝ、一生涯！」

「一生涯！」

兩人の眼には、感激に光る或るものがあつた。——咽ぶやうな熱情は、彼等を默らせてしまつた。

彼等は肩をならべて、靜かにまたあるき出した。

やゝ傾き暮つた陽は、銅粉をふり撒くやうに、あたりの森や磧や水面を、にぶく赤く輝かした。

再び彼等は街道に出た。

長い二つの影は、もつれ合つては離れ、離れてはもつれ合つて、進んで行つた。——どこまでも、惠まれた今日の一日をあゆみつくすやうに……どこまでも、どこまでも、それは祝福さるべき彼等の一生涯をあゆみつくすかのやうに——

最後の問題

「あゝ、あゝ！ なんて退屈な日が續くんだらう？ 毎日々々、こんなに退屈ぢや、まつたくやりきれない。なんのために、かうして生きてるのか、まるで無意味な馬鹿々々しい日ばかり送つてゐるの

だわ！」

龍子は安樂椅子から、重ねた右足をトンと跳ねるやうに絨氈の上に落した。

これと向き合つて、棟吉は、搖り椅子をギイ〳〵漕いで、さかんに葉卷の煙を立てゝゐた。

「ほんたうにやりきれない。この頃のやうに、朝起きて顏を洗つて、食堂へ行つて、それからボンヤリして、風呂に入つて、それから食堂へ行つて、電燈が點つて、またボンヤリして、寢室に入る——それだけのことを繰りかへしてるんではたまらない。あゝ、退屈だ！ 馬鹿々々しい毎日だ！ ほんとうに、どんなことでもいゝから、なんかびつくりするやうな、世の中がひつくりかへるやうなことでも起つてくれゝばいゝ！」

龍子は、ひとりごとのやうにいつて、拳で輕く額をたゝいた。

「世の中がひつくりかへるやうなことが起ればいゝつて？ ——大いに思想が惡化したね。はゝゝ、面白い。」

「なにが、はゝゝなの？ ないが面白いの？ ふん、ちつとも面白くないわ！」

「面白くしたらいゝぢやあないか。」

「こんな生活を、どう面白くできるの？ ふん、馬鹿々々しい！」

「いくらでも面白くしようがあるぢやないか。——芝居、音樂、テニス、乘馬、讀書、刺繍、水彩畫

――お前は澤山の趣味をもつてゐるぢやあないか？」

「そんなものは、今のわたしに、どれだけの退屈しのぎになると思ふの？」龍子はクンと鼻を鳴らして、「わたしは刺戟のある生活がほしいのだわ！」

「刺戟のある生活？　――刺戟はいくらでもつくられないことはないが、お前の註文のやうに、世の中がひつくりかへるやうな物騒な刺戟は、相なるべくば避けたいものだね。はゝゝゝ。」

「默つてゐらつしやい。わたしの心持なんか、あなたにわかるもんですか！」

「ほい、叱られた。」と、棟吉はなほ呑氣らしく椅子を漕いで、「しかし、僕はなんといつてもお前の身體に、一番近く住んでゐる人間だ。お前の心持がわからないことはないよ。」

「ぢや、いつて御覽なさい。わたしの今の心持がどうだか、わかつたところをいつて御覽なさい。」

「いつたところで、はじまらんさ。」

「いゝえ、はじまります。さあ、いつて御覽なさい。……わかりもしない癖に！」

「ではゝいつてあげようかね。――つまりお前の我儘が、威力を失つたのさ。それで刺戟がなくなつたのさ。」

「變ね。それだけの言葉ぢや意味が通らないわ。もつとくはしく說明して頂きたいわ。」

「これを更に說明すれば、お前は或る刺戟物にかなはなくなつて、刺戟されることをあきらめたのさ。

刺戟物に失望して、我儘のやりどころがなくなつて、それで退屈してゐるのさ。」

「いやに廻りつ煩い、ゴタ〳〵した說明ね。わたしが或る刺戟物にかなはなくなつたつて、なにがわたしの刺戟物なの？」

「それは說明の限りにあらずだよ。」

棟吉は、椅子をとめて、ニヤリと龍子の顏を見た。

「いゝえ、說明して頂きたいわ。なにがわたしの刺戟物なの？」

「君塚靖也といふ刺戟物さ。」

「……」

こんなに鋭く觀破する力が、棟吉にあるとは思はなかつた。虛を衝かれた形で、龍子はさすがに默らされた。

「どうだね。この說明は？」と、棟吉は追擊の手をとめなかつた。「こんどは、僕のはうから、お前に說明を要求する番だよ。はゝゝゝ！」

――しかし、龍子は決して屈しなかつた。

「なにをわたしが說明するの？」

「君塚靖也對隈部龍子の、これから先に展開すべき事件さ。それこそ、僕にとつては、世の中がひつ

くりかへるやうな大事件さ。」

この言葉の内容からいへば、棟吉には烈しい憤怒が爆發すべきものであつた。すくなくとも、冷罵か嘲笑が來るべきものであつた。――が、彼は案外無神經に、言葉を言葉としてならべただけで、再び暢氣らしく、椅子をギイ〳〵漕ぎはじめた。のどかに吐き出す葉卷の煙を、椅子の搖れる幅だけ、彼は鼻先で搔き分けた。

龍子はチラと光る眼を棟吉にくれたが、

「君塚靖也對わたしの、なにを説明しろつていふの？　わたしが説明しなければならないどんな事件があるつていふの？」

「はゝゝ、駄目だよ、龍子。かくしたつて……」

棟吉はまるで他人ごとのやうにいふのである。

「なにもかくしはしないわ。靖也さんは以前わたしに愛を強ひて、わたしから拒ねつけられたのぢやないの？　そしてわたしはあなたの妻になつたのぢやないの？」

「さうさ。そこまでは至極簡單さ。……しかし、いまでは、問題がさう簡單に説明されなくなつてゐるぢやないか。」

「いまだつて簡單よ。わたしがあなたの妻である以上簡單よ。」

「いや、お前が僕の妻である以上、簡單には説明がつかんさ。」

「ぢや、なんていふの？」

「人の妻が、他の、第二の男に愛情らしいものを振りむければ、道德的にも、社會制度の上からも、決して簡單には片づけられない問題だらうぢやないか？」

「それはさう。たしかにさう。……けれど、わたし達夫婦の間には、かうした問題に對して、そんなことのいへない、一つの約束が結ばれてゐた筈よ。」

「え？　約束……？」

「もうそれをお忘れなすつたの？」

「僕はお前と愛の約束はしたつもりだが、そのほかにべつに約束はないと思ふ。」

「さう、それなの、その愛の約束なの。」と、龍子は例の眞赤な唇をゆがめるやうに、冷やかに笑つて、「その、わたし達の間に約束された愛は、どんなものでしたかね？　――あなたはわたしの美しさを愛する、わたしの美しさを自分のものにすればいゝといひましたね？　――もと〳〵わたしはあなたと結婚することを望んではゐなかつたのです。あなたもそれを承知の上で、無理にわたしの父に迫つて、わたしを妻になすつたのでせう？　わたしは我儘者で、結婚しても、あなたに愛がもてないかも知れないし、第一、家庭の主婦になれさうにもない女だからつて、幾度もわたしの口からお斷りし

たのに、あなたは、家庭の主婦となれなくつていゝ、僕の生活の飾になつてくれゝば充分だといひました。結婚當時、あなたはよくわたしをつかまへて、僕はお前の美しさを愛してゐる。お前に愛がないといつても、僕には力といふものがある。この力をお前は今に愛しないではゐられなくなるのだ――つていひましたね？　わたしが、それではわたしの「美しさ」と、あなたの「力」とを交換した譯ですね――つていつたら、さう考へたつてかまはないと、あなたはハツキリいつた筈です。わたし達は、べつに實利主義者ぢやないのだが、わたし達の愛は、かうした交換問題で無理に解決して、こゝまでやつて來たのです。かうした取引によつて結ばれてゐるわたし達の生活には、互の責任にも義務にも、簡單な箇條書の說明で解決がつく筈のものです。」

「そろ〳〵龍子一流の我武者羅な理論がはじまつたね。……しかし、いくらあの約束から簡單に說明されるものであつても、お前が良人たる僕をさしおいて、他の第二の男を愛することは許されないよ。」

「他の、第二の男――それが君塚靖也つて男だといふの？」

「さうでないことを望むがね。」

「さうだつたら、あなたはどうするの？」

「お前の良人として、飽くまでお前を責めなければならん。」

「さうでなかつたら？」

「さうでなければ、それでいゝのだ。僕はさうでないことを望んでゐるのだから。」

「いゝえ、いけません。それでいゝのだ位の言葉ではゆるせません。そんな言葉を、良人としてのあなたが、かりそめにも妻としてのわたしにいつた以上は、それでいゝのだ位では濟せません。かうした疑ひの言葉は、もし間違つてゐた時、子供だましの樣な、御免なさいでは通されません。言ふあなたにも覺悟がいり、聞くわたしにも決心がつかねばなりません。」

「覺悟？　――なんの覺悟だ。」

「わたしと離婚なさることです。」

「え、離……婚？　そんなこと……そんなことをいつちやいけない。そんな輕卒なことをいつちやいけない。そりやあ無茶苦茶だよ。亂暴だよ。離婚といふことは大問題だ。僕達の生活を、そんな自棄的なものにしちやいけない。……お前はどうも、なにごとにも一足飛びに最後の斷案をくださうとするからいけない。そんなことは、僕達の生活に、考へてはならないことだ。いつかお前は、僕達の生活を、挑戰と挑戰だといつたことがある。挑戰はまだいゝ。しかし、それが家庭を破壞する程度に進められることは愼まねばならん。……いや、こんなことを二度といつてくれては困る……」

棟吉はすつかり狼狽してしまつた。彼は半身を伸ばして龍子の顏に自分の顏を蔽ふやうに寄せつけた。龍子は右手で棟吉の肩を、うるさゝうに突きのけた。そして險しく彼を睨みかへした。棟吉はい

よ〳〵周章た。
「え、龍子……僕のいつたことが氣にさはつたら許しておくれ。え、龍子……僕の失言だ。許しておくれ！」
「失言！　――こんなことが、たゞ失言といふだけで許せますか？　あなたはわたしを侮辱したのです。」
「いや、失言……まつたくの失言……」
「まあ、鬱陶しい。」
棟吉はまたも突き出さうとする顏を、龍子の手で追のけられてしまつた。
「や、これは僕が惡かつた。まつたくの失言だ。取消しする。」
「……あなたは、君塚靖也つていふ男をわたしの刺戟物といひましたね。そしてその刺戟物に、わたしがかなはなくなつて、失望して、我儘のやりどころがないから、退屈してゐるのだといひましたね？」
「いや、それも……すべて失言だ。取消しだ。前言一切を取消しだ。」
「取消さなくつてもいゝわ。」龍子は、ます〳〵反抗的に、「失言といふひと言で、なんでも許されるのなら、わたしも一つ、失言して見たいことがあるのだから。」

「え？　失言して見たい？　……おい、龍子、それはまるで駄々っ兒だよ。駄々っ兒のいふ言葉だよ……」
「わたしは失言してよ――わたしは、もうこの、わたし達の生活には飽き〳〵してしまつて、他の刺戟の強い生活に逃れてゆきたいと――」
龍子は、ヒステリカルな、癇高な笑ひを笑つた。
「もう……もう、いゝおやあないか。こんな話はこの邊で打切りだ……話頭一轉だ。」
「わたしは失言してよ。わたしは、君塚靖也つていふ男の強さ、えらさに、今更、わたしの愛情に似た心持を感じて來たと――」
「や、もう……降參だ。この通りだ。」
棟吉は閉口したやうに、頭をさげた。
「わたしは失言してよ。――わたしは、あなたと結婚する前に、あの男に、この唇を許したことがあるのだと――」
龍子の顏は、恐ろしいばかりに蒼ざめて來た。彼女の充血した眼と、例の唇だけが赤いものであつた。彼女の息は彈んでゐた。椅子の手すりにかけた指は、痙攣的に震へてゐた。
「えつ！　それは……それは龍子、ほんたうの話なのか？」

さすがに棟吉は、驚いていつた。

「えゝ、ほんたうだかどうだか、あなたとの結婚以前のことまで、わたしには責任がもてません。しかしわたしは失言したのよ。」

かういつたかと思ふと、龍子は衝と立つてドアの把手をひねると、身を翻へす樣に部屋を走り出た。

呆然と、棟吉は立つた。——搖り椅子がひとり彼の後へに躍つてゐた。

日比野博士が、龍子の口から家庭の不滿について訴へられたことは、これまで、もう二度や三度ではなかつた。博士は龍子が、たゞの訓戒や忠告に聽き入る女でないことを知つてゐた。彼女の驕慢と我儘とは、強い反撥力をもつてゐた。押へられゝば押へられるだけ、一層はげしく跳ねかへつた。ます〳〵意固地な自尊心と主我心とが現はれてくるのであつた。殊にそれが近頃では、まつたく病的だといつてもいゝ位、放縱極まるものとなつた。彼女の唇が、皮肉らしく冷やかにゆがみ出すと、そこにはもう、道理とか情味とかでは屈服さすることのできぬ、傍若無人の態度が示されるのであつた。

「いや、困つた人間だ。」

と、嚴格ではあるが一方寛容な博士は、龍子を一種のヒステリイ患者と見て、苦笑するより外はな

かつた。

——そして今日も、彼女の訪問をうけた博士は、この苦笑を餘儀なくしなければならないのであつた。

應接間から緣づたひにあるいて來た龍子は、座敷のそとに籐椅子を出して、あかるい庭木の日ざしに、フツと葉卷の煙を吐き出してゐる博士の姿を見つけるとすぐ、

「お父さま！　どうしたらいゝでせう？　ほんたうに……ほんたうに……この頃のわたしの生活はひどすぎるのですもの……」

と、駈け寄るやうにいつた。

博士は驚いたやうに龍子を見あげ見おろした。

「……また、なんか棟吉さんと言ひ爭つたのか？　どうも困るな……生活がひどいつて、棟吉さんとお前との生活に、ひどいと形容するやうなことは起らない筈だ。精神的にも……そして、嫌な言葉だが物質的にも……」

「お父さまは、御存じないからそんなことを仰有るのよ。わたし達の生活が、どんなに無氣力で、どんなに無理解で一日々々を、つまらなく、生彩なく、過してゐるかを知つてくだされば、きつとお父さまはわたしに同情してくださると思ひますわ。」

「一家の生活が、無氣力だとか、無理解だとかいつても、それを氣力あらしめ、理解を持たしめるのは、むしろ妻たるお前の任務ぢやあるまいか。」

「それはさうかも知れません。しかし、棟吉にはその氣力とか理解とかの根本になる、感情や理性といふものに、まるつきり缺けてゐるのです。」

「さうはいへまい。棟吉さんは中途で退學したとはいへ、K大學の理財科に學んだ人なのだ。事業に對する抱負や主義主張には、なか〳〵立派な考へをもつてゐることを、嘗てわしは聞いたことがある。工場の經營——ことに勞働問題に對しては、熱情的で理智的な解釋をもつてゐる。わしはその時まであの人が、たゞ富豪の家に、なに不自由なく育つた、お坊つちやんだとばかり、失敬なことだが考へてゐたが、それからは大いに敬意を拂つてゐるのだ。——あの人を、感情や理性に缺陷のある人とは思はないがね。」

「あの人の勞働問題は、みんな雜誌の拾ひ讀みか、ほかからの聞きつかじりなんです。それをいつぱしな自分の主義のやうに、仔細らしい顏をして受け賣りしてゐるんです。だから、いつでも同じ文句を誰にも繰りかへしてゐます。樂屋の見え透いたことをいつてゐます。お父さまが、あんな淺薄な粗雜な横ぐはへの議論や耳學問に、どうして同感なさるもんですか？ ——お父さまはきつと、わたしを制しようとして、そんなことを仰有るんだわ！」

「いや、決してそんなことはない……」

「お父さま。」と、龍子は椅子に腰をおろして、改まつた口調で、「もう、そんな一時しのぎの思ひかへしで自分の心を自分で誤魔化して、これからさきの毎日を、自分でなだめすかしたりすることは、わたしにはできなくなつてしまひました。今日は、家庭の不平不滿を、クド〳〵言ひ立てに來たのではありません。今日は、ひとつ、ハツキリした御相談にあがつたのです。」

「ハツキリした相談？」

「えゝ。」

「それは、なんの相談だね？」

「わたし、あの、隈部の家を去りたいと思ふのでございますわ。」

「なに、隈部の家を去りたい？」

さすがに博士は、まつたく驚いて、眼鏡の奥から、いそがはしく龍子の顏を見た。

「えゝ、ほんたうにわたしは、あの生活には耐へられないのですもの。……このまゝで押て行つたらわたし……」

「龍子。……お前はどうも輕忽にものをいふ癖があつていけない。隈部の家を出るといつても、出るには出るだけの當然の理由がなくてはならないのだよ。」

「お父さま。今までわたしが申しましたことが當然の理由にならないのでせうか？　わたしあの生活にはなんといつても耐へられないのです。」

「龍子。お前が耐へられないといふのは、わしから見て、どうしてもお前の我儘とよりしか受取れん。お前の我儘だけで、わしはお前の考へを、もつともだとうなづいてやるわけにはいかないね。……耐へられないといつても、棟吉さんとお前の生活には、まだ幾らも改良し反省する餘地がある。餘地がなければ、兩人は別居するもよからうし、場合によつては離婚するもよからう。餘地のないところには、ほかゝら批評することも意見を加へることも許されない。わしは沈默するばかりだ。——が、お前の所謂耐へられない生活は、どう見ても耐へられるべき生活に、取りかへしがつくやうだ。それはお前の我儘を押へればいゝのだ。お前がもつと自分を愼めばいゝのだ。」

「お父さま。では、わたしがあの生活に耐へられぬといふのは、わたしの我儘からばかりなのでせうか？」

「さうだね。お前の我儘ばかりとはいはないが、お前の我儘が七分の原因にはなつてゐるらしい。どうだね？　龍子。」

龍子はちよつと口をつぐんだ。不平らしい色が、彼女の眼に動いた。

「……龍子。」と、博士は改めて諭すやうに、「お前はいつまでも若々しい華やかな氣分でゐるが、その

間に、もう女として、拔きさしのならぬ年齢になつてゐるのだよ。お前がいまさら、ほかの新らしい生活を求めようとしたところで、その生活は、お前が心の中で評價してゐるだけの難有味をもつて、お前を迎へてくれはしないのだよ。新らしい生活に入らうといつても、お前の今までの生活を、奇麗さつぱり拭ひ落として入れるものではない。なんといつても、今まで踏んで來た生活の、記憶や感情が、次の生活に古血のやうに續いて來るものなのだ。お前がたとひ棟吉さんとの生活に不滿だとか耐へられないとかいつて、他の新らしい生活を求め得たところで、そこに棟吉さんとの生活の經驗や意識は、知らず〳〵入りまじつて來るものなのだ。因循姑息とお前はいふかも知れないが、最善の方法は、いまの生活を努力して改良して、住み心地のいゝ、コムフオータブルなものにするにある。わしは決して御都合主義をとなへるのではない。が、もうお前は、どんなに氣ばかり焦々させても、お前の年齢が、次の生活を計畫するには、融通のつかぬところまで進んでゐる……」

「お父さま。わたしの年齢からいつて、拔きさしならぬとか、融通がつかぬとか仰有いますが、わたしはなにも、隈部の家を出てから、次の結婚生活を考へてゐるのではありませんわ。わたしは獨身で、自分の思ふまゝの道をゆかうとするのですわ。獨身を決心したものに、年齢を縣念する必要なんかありませんわ！」

「獨身？……　そんな生活は、お前にはできない。」

「いゝえ、できます。なぜ、お父さまは、わたしに獨身生活ができないと斷言なさるのです？　わたしは英國にゐた頃から、一生を獨身で勉强したいと、よくお父さまにいつてゐたではありませんか？」
「あの頃はお前はまだ若い快活な娘で、たゞ青空の下に、鳥が歌つたり花が咲いたりする世界だけを夢見てゐたのだ。――なんといつても今のお前は一旦結婚した女だ。以前の夢は、もう、以前どほりに、無邪氣な無垢な形ちでは返つて來ないのだ。」
「以前と意味がちがつてゐても、獨身生活で、わたしはまた新しい自分の世界を見出すことができると思ひます。」
「それはできるだらう。しかし、その世界はどんなに不自由で不愉快なものか、お前の我儘は、いまの生活に耐へない以上は、それに耐へられまいと思ふ。」
「どうしてでせう？　我儘女の最後の問題は、獨身生活が結論となるよりほかはないと思ふのですけれど……」と、龍子は肩をゆすつて、「お父さまは、なにを不自由で不愉快だと仰有るの？」
「わしは、お前のやうに文學趣味をあまり持つてをらぬから、甚だ話が實證的で、所謂野暮くさくなり勝だが、要するに獨身生活といふことは、自然律に悖つてゐる。人間は自然の支配をうけ、これに服從しないでは一瞬も生きてはゆけない以上、自然が制定した性の問題、愛の問題から離れては、とても不自由で不愉快で、やつてゆけるものではないのだ。……それは獨身生活で押し通して隨分立派

な仕事をした人も多いにちがひない。しかし、仕事は立派でも、その人達は人間生活に成功した人とはいはれない。獨身生活者の多くが、妙に世をすねて、人生を白眼視しながら暮してゆくのを見るとわしは實際氣の毒になる。お前のやうな氣象の烈しいものは、一層その惡影響を受けることが多いに違ひない。だから……」
緣に通ずる應接間のドアを開けて、アンナ夫人が出て來た。
「おゝ、龍子さんよくきました。」
「阿母さま。しばらく」
龍子は挨拶した。
「アンナ、また龍子がわしを困らしてゐるのだよ。」
博士は笑つた。
「あなたをこまらす？　……どうしたのです？」
「いゝえ、阿母さま。べつにわたしお父さまを困らせてはゐないのですよ。わたしの心持がお父さまにわかつて頂けないので、わたし困つてゐるのですよ。」
「まあ、アンナ、聞いてくれ。龍子は獨身生活に入りたいといつてゐるのだ。」
「ほう！　獨身生活？」アンナ夫人は眼をまるくして龍子を見たが、「龍子さん。あなたは獨身生活を

しようといふのですか？」
「それがね。とても今の生活には耐へられないから、棟吉さんと離婚して貰ひたいといふのだ。」
「離婚！」夫人はいよ〳〵眼を瞠つて、「それはいけません。それはどうとくの上からもいけません。いつたい、どうしたのですか？」
博士は、龍子の主張を夫人に話した。夫人はます〳〵驚き呆れたやうに、
「龍子さん。それはいけません。そんなことは――あなたのわがまゝだけで、そんなことをいふのは――だれからもゆるされません。わたしはあなたの自由をゆるしてあなたを教育してきました。しかし、自由といふものは我儘ではありません。」
「わかつてゐます。阿母さま。みんなよくわかつてゐます。けれど、わかつてゐても、わたしとても今の生活には耐へられません。……このまゝでやつていつたら、わたし、きつと今あの家を出るよりも、もつと不快な破壞的な結果で棟吉の手から去ることだと思ひます。そのほうが、より多く悲慘ではありますまいか？」
「……とにかく龍子、わしが惡いことはいはぬから、このまゝで耐へられるだけ耐へて見てくれ。まだ、なんといつてもお前の生活には、耐へられる餘地があると思ふ。そのうちわしも棟吉さんに會つて、あの人の意見もたゞして見る。かうした問題は、輕々しく唐突に處斷さるべきものではない。

わしはすべてをお前と棟吉さんの幸福を基として考慮して見ねばならない。いゝか、とにかくこのまゝで、おとなしくしてゐて貰ひたいのだ。」
「では、わたしはこの生活に、突かい棒をたてゝ、どうにかやつてゆかねばならないのですねえ。」と龍子は捨てばちらしく笑つたが、「しかし、お父さま。突かい棒は要するに突かい棒で、これをとりのけられた日はやつぱり生活は崩れて倒れることを、よく御承知置き願ひます。」
「まあ〳〵、そんなことはまたの日の話だよ。その突かい棒をしてゐる間に、生活の母家は案外健全に修理されるかも知れんからな。はゝゝゝゝ。」

メデユウサの首

靖也の仕事ははじめられた。
彼は會社に出て、製圖室に駈け込むと、もう午飯の休みの時間も惜んで、縣命に、製圖盤にのりかゝつて、定規や兩脚規を手からはなさなかつた。彼のノートには、抵抗や動搖や迫力や復原性などに關する複雜な困難な高等數學の計算が、いつぱいに書き散らされたゐた。仕事に熱中してゐる時、彼はパンと砂糖とあつい紅茶さへあれば充分であつた。給仕が沸かしてくれる湯を、紅茶の罐子につぎ

こんで、無造作にパンをちぎつては皿の砂糖に押しつけて頬張る。頬張りながらも、眼はつねに製圖にそゝがれてゐるのであつた。

家に歸つても、彼は書齋に入つて仕事を續けた。康子は無理な勉强をしてゐるとは思ひながらも、靖也の眉宇にみなぎる意氣を見ると、身體を休めてくれとはいひ得なかつた。彼女は心配の言葉よりも、勵ましの言葉をいはねばすまぬやうな氣がした。そして蔭にまはつてせめて靖也の食物に精力のつくものを與へ、肌着にすこしでも清潔なものを注意し、それからさきは——たゞ眞心からわが子の成功と健康のために、神に祈るのであつた。

——その日も、靖也は會社から歸る途中、今夜書齋で一くぎりつけねばならぬ圖式や計數の豫定を頭腦にいろ〳〵描きながら、電車に搖られてゐた。萬世橋驛で省線から市内線に乘り換へ、一高前で下車する時も、彼は仕事に心を奪はれて、あぶなく乘り越しをするところだつた。

あわてゝ切符を車掌に渡して飛び降りた時、彼はちよつと自分を苦笑した。——むかし、どこかの天文學者が、夢中で天の星を見ながらあるいてゐるうちに、野中の空井戸に落ちた諷喩的が逸話を思ひ出した。

急ぎ足に西片町のわが家に歸ると、ふと、そこの門口に、一臺の立派な自動車がとまつてゐるのを見た。

「誰だらう？」

彼は立ちどまつた。

自動車のわきに立つてゐる運轉手は、彼を見知つてゞもゐるやうに、帽子をとつて愛想笑ひしながら頭をさげた。

「君塚樣でいらつしやいますか？」

彼は、靖也がなにか訊かうとするさきに聲をかけた。

「あゝ、僕は君塚ですが、君はどこの運轉手ですかね？」

「えゝ、わたくしはあなた樣を、お迎ひにあがつた者でございます。ちやうど今頃はお歸りだらうといふので、車でお迎ひにあがりましたので……」

「僕を迎ひに？　どなたからですね？」

「お手紙を持つて參りました。唯今、お家のお方にお渡しいたしましたところで……わたくしは、あの、朝倉男爵樣からのお使ひで參つたのでございます。」

「なに、朝倉さん……？」

靖也は忙しく玄關に入つた。

康子が、ちやうどそこへ出て來た。

「おゝ、靖也、いゝところへ歸つておいでだ。今ね、このお手紙をもつて、自動車のお迎ひが來られたのだよ。」

「朝倉さんからのお迎ひだといふことですが……」

「あゝ、さうだよ、朝倉さまが、今夜御多忙中だらうが、是非晩餐をともにしたいからこの車に乘つて來て頂ききたいと仰言るのだよ。このお手紙は美知子さまからお前に宛てたお手紙なんだが、わたしが封を切つて拜見したら、なんでも美知子さまも御一緒で、築地のお料理屋でお前をお待ちになつていらつしやるのださうだよ。――突然お呼びして御迷惑だらうが、父が今夜ちやうどいゝ暇ができたので、勝手ながらお會ひしたいと申してゐるから是非おいでくださるやうにと書いてあつた。」

康子はなにか嬉しげに靖也を見やりながら、小さな西洋封筒を渡した。靖也は表書を見た。ペンでつゝましやかに美知子の署名がされてあつた。

「さうですか……困つたな……今夜は、仕事に一くぎりつけたいと豫定してゐたのだが……」

「でも、折角、朝倉さまがお前と一緒に話したいと仰有るのだものねえ。あのお方は、お前の幾倍か御多用でいらつしやる中を、かうしてお前のために一晩の時間をお繰り合はせになつたのだもの喜ばなくてはならないよ……お前、なんでもすぐ行くがいゝ。お前の仕事も大切にはちがひないが、かうした御親切にそむくことはよくないよ。」

靖也は男爵の好意を難有いと思つた。そして――美知子にも、あれからしばらく會はなかつたことを考へた。

「えゝぢや、まゐりませう。」

彼は勢ひよくいつた。

「あゝ、それがいゝよ。――どうだね、日本料理のやうだから、着物と着かへて行つては？」

「なあに、このまゝでいゝですよ。」

「だつてそれはふだんの洋服だから、失禮になりはしまいかね？」

「お嬢様は、お歸りになるところをすぐそのまゝお連れ申すやうにと仰有いました。お忙しいところをお呼びするのだから……そしてほんの晩餐だけの時間を割いて頂くのだから……と仰有いました。」

と、運轉手はうしろから頭をさげながらいつた。

「さうですかねえ――あちらでもお待ちになつていらつしやるのだから、すこしでも時間をとつては却て失禮だらう――では、そのまゝで御免蒙るがいゝよ。」

「では、どうぞ……」

運轉手は自動車の扉をあけた。

靖也が座をしめると、車はまつしぐらに、灯されたばかりの街を走り出した。

後頭部を箱の隅に輕く押つけながら、靖也はまた豫定した仕事の計畫について、こまかな區分々々を、樂しみさうに考へはじめた。船體の各部の平面圖や側面圖、それからこまかな横と縱との斷面圖……ことに彼が精神を籠めてゐる抵抗と迫力の問題……彼の頭腦のなかには、いまノートの上に計算しつゝある微分積分の諸種の曲線が、まるで影繪の花車のやうに相交錯するのであつた。……と、それ等の楕圓や拋物線が、さま〳〵の對稱をなしてうごめいてゐるうちに、もつとも柔かな靜かな曲線だけが次第に集まつて、一つの美しい輪廓を象どつた。

彼は微笑した。

「美知子！」

そして心にかう叫んだ。

……自動車がとまつた。

「こちらでございます。」

運轉手が扉をあけたので、彼は氣がついたやうにそとへ出た。

「どうも御苦勞でした。」

「どうぞ、こちらへ……」

運轉手は彼の手をとらんばかりに、植込みの奥の、あかるく電燈のともつた玄關へ案内した。出て

來た女中に、彼は素早く目くばせして、

「君塚様をお連れ申しました。」

「あ、君塚さま……あらちのお座敷で、お待ち兼ねでございます。」

女中は式臺に手をついた。

靖也が靴をぬぐと、女中は彼から帽子を受取つて先に立つた。

綺麗に拭き込まれた廊下を幾つか曲つて、靖也は、誰屋形に灯の入つた、茶がかつた奥庭に面した一室の前にみちびかれた。

「……おいでゞございます。」

女中は縁にかしこまつた。

「おや、さう……」

パツと障子に大きな影が動いたかと思ふと、急いで中から白い顏がのぞき出した。

——靖也は驚いて身を退かうとした。が、キラリとダイヤの指環が光つて、彼の手は彼女の手に強くつかまれてしまつた。

「あなたは……！」

「なにをびつくりしてゐるの？　ずゐぶん待つたわ！」

女中はいつの間にか姿をかくしてしまつた。
靖也は立ちすくんだ。
「どうしたの？　靖也さん。さあ、おはひりなさいよ。誰もほかにはゐないの。わたしひとりつきりなのよ！」
「あなたは……僕を……」
「ほゝゝゝ。まあ、美知子さんだと思つてやつて來たの？　……だが、わたしの名ぢや來てくれないにきまつてゐるから、ちよつといたづらして見たのよ。なにも、靖也さんをだまして可笑しがるつもりぢやないのよ。わたし、ほんたうに靖也さんに會ひたくなつたのだもの……話があつてもなくつてもいゝ、靖也さんの顏が見たくてしかたがなくなつたのだもの……」
無理に、ひき据ゑるやうに靖也をチヤブ臺の向うに坐らせて、燦然と笑つたのは——龍子であつた。
彼女はかまはず言葉をつゞけた。
「——ねえ、靖也さん。わたし、あなたにしばらく會はなかつたから、むやみに顏が見たくなつたのよ。なんの用事で呼んだのだとか、お前から別に話なんか聞きたくないとか、そんな野暮は今夜はいはぬことにするのよ。とにかくわたしはあなたの顏が見たかつたのよ。單にそれだけの理由なのよ。……默つてゐたければ、どこまでも默つてゐらつしやい。今夜はお互に自由で我儘でゐませう。わた

しはまた、いひたいだけを勝手氣儘にしやべります。聞きたくなければ聞かないでもいゝの。兩人ともすべて自由に我儘にやるのよ。わたしたゞ靖也さんの顏を見て、ひとりでしやべつてゐればいゝの。」
「他人の名で僕を呼ぶとは、あまりな不德義だ。」
靖也は憤慨した。
「えゝ、その點はお詫びしてよ。しかし、わたしが靖也さんに會ひたくて耐らなくなつた心持が、この不德義を敢てしたほかに、わたしの名では、靖也さんが來てくれないといふことも、この不德義を敢てさせたことを考へて頂きたいわ。」
「もうあなたの嫌味や皮肉をまぜた理屈には飽き〳〵した。僕これで失禮します。」
靖也はソツケもなく座を起たうとした。が、龍子はすぐ身體を伸ばして、チヤブ臺越しに靖也の上著の襟をつかんだ。
「お待ちなさい。わたし今夜はいひたいだけのことをいつてしまひたいの。わたしが思つてゐるだけをいつたら、わたしのはうから、さあこれでおしまひ、どうぞお歸りくださいつていふわ。それまでは、どんなことがあつても歸さないわ。」
「龍子さんは、たつた今、今夜はお互に自由で我儘でゐようといつたぢやありませんか？　それに僕

が自由に我儘に歸らうとするのを、なぜいけないつていふんです。しかも、あなたは聞きたくなければ聞かないでもいゝといひました。僕はあなたの話さうとすることなんか、絶對に聞きたくない。そして實際、あなたも僕にいひたいだけのことは、いつてしまつてゐる筈です。」

「絶對には御挨拶ね。あんまり侮辱したお言葉ね。」

その位に強い言葉でなくては、あなたにこたへるもんですか——と、靖也はいはうとしたが、自ら制して默つてしまつた。

龍子は座敷團を押しやつて、チヤブ臺の彼方から靖也と一尺と隔たらぬところへ座を移した。

「逃げられちや困るから、こゝへお引つ越しよ。」

「……」

「そして、この位まで近寄らないと、折角見たいと思つた靖也さんの顏が、存分に見られないわ。」

「……」

「靖也さん。」

「……」

「靖也さん。」

「……」

「ほゝゝ、いつもの沈默の戰法が敷かれたのねえ。」

龍子は輕くチヤブ臺に肱をもたせて笑つた。彼女の息に、酒の香がまじつてゐることがわかる位まで、彼女は靖也に顏を突きつけた。

「……」

「……靖也さんは、どうしてわたしを、そんなに蛇蝎のやうに忌み嫌ふのでせう？」

「べつに僕は、あなたを蛇蝎視してはゐません。」

「あら、ほんたう？ほんたう？ まあ嬉しい！ ほんたうに靖也さんは、わたしを蛇蝎のやうには思つてゐないのねえ。」

「あなたの位置——あなたが隈部棟吉氏の奥さんであること、それから、恩師日比野先生のお孃さんであつたこと——それだけでも、僕にはあなたを忌み嫌ふといふ理由を持ちません。しかし、近來のあなたの態度と心持には、なんといつても同感ができません。いや、不快です、不潔です。僕はこの點には、あなたを飽まで罵つてやまないのです！」

「わたしの態度と心持を罵る？」と、龍子はバネ仕掛のやうに顏をあげたが、「……嬉しいわ。わたし靖也さんの口からなら、どんな言葉でも聞きたいわ。それで滿足なんだわ。さあ、いゝやうに、思ふ存分に、それこそあなたの自由と我儘とから、どんなにでもわたしを罵つてください。ほんたうに、

わたし、この頃自分の身體へ、ピシ〳〵鞭をあて〻貰ひたいの。血のにじみ出るほど、ピシ〳〵擊つて貰ひたいの。い〻え、鞭ぢやあまだ足りない。この額へでも、胸へでも、ところかまはず、眞赤になつた燒鏝を、ヂリ〳〵煙の噴くまで押しつけて貰ひたいの。」

「……」

「え、靖也さん、わたしは今、ほんたうにわたしを取り挫いで、顏もあげられない位、恥知らず、業さらし！　と、罵つて罵つて、罵りぬいて貰ひたいの。さうしたら、せめてわたしの苦しい感情は度を失つて、昏まされてしまふかも知れないわ。」

「……」

「さあ、靖也さん、思ひきりわたしを罵つてください。責めてください。虐んでください。」

「なぜ默つてゐるの？　靖也さん。わたし靖也さんに、なにか言つて貰ひたいのよ。どんなことでもい〻、なにか聲をかけて貰ひたいのよ。……どんなえぐい、どんなにがい言葉でもい〻、靖也さんの口から、なにかわたしに、思ひつきり靖也さんの感情を現なまで見せる樣な言葉をかけて貰ひたいのよ！」

「……」

「さあ靖也さん！」

龍子は靖也の堅く閉ぢた唇を瞬もせず見つめた。

兩人の間には、鉛のやうに重く、冷たく、青ざめた奇怪な氣はひが、折りかさなつて落ちて來た。

——次第に、龍子の呼吸はせはしく彈んで來た。彼女のふつくらと膨れた二つの乳のあたりは、波うつやうに高く搖れて來た。

「さあ、靖也さん。なんといつてわたしを罵るの？　……なんといつて……？」

「……」

靖也は、たゞ、强く〳〵唇を嚙んでゐた。

「え？　靖也さん……なんといつてくれるの？　……なんといつて……？」

「い〻わ。罵れないなら……罵れるやうにわたしがキツカケをつくつてあげるわ……？」

と、いつたかと思ふと、龍子は瓦破と身を起して、突然、靖也の胸を目がけて飛びついていつた。

——あつ！　といふ間もない。靖也は、のしかゝつて來た龍子の上半身の重味で、仰向に倒された。彼の頸は、龍子の兩手の、あらん限りの力で抱きしめられてしまつた。

不意をくつた靖也は、驚いて跳ね起きようとした。が、彼は龍子の胸に手勝手を押へられて、どうすることもできなかつた。

彼は見た。——眞赤な、血をすゝつたやうな唇が、彼の眼から、二三寸を隔てず、刳り出された

生貝の肉の様に蠢動しつゝあるのを！

「……なにを……なにをするんだ！　……なんの……なんの眞似だ！」

彼は憎悪にみちて低く叫んだ。叫びながらも、龍子の手から逃れようと焦つた。

「……靖也さん！　あなたは……あなたは……わたしのものよ！　わたしのものよ！」

龍子は、靖也の上で喘いだ。

「お離しなさい。手を！」

「いゝえ、離さない。離さない。死んだつて離さない！」

「無作法だ！　無禮だ！　恥を……恥を知れ！」

「もつと……もつと……罵るがいゝ！　これはわたしの……わたしのものだ！」

「馬鹿！　馬鹿！」

「……もつと……もつと……」

「汚女！」

「……もつと……罵るがいゝ！　なんとでも、いふがいゝ！」

靖也は、渾身の力をふるつて、遂に跳ねかへした。怒りと恥ぢに震へる彼の手は、執念くもからみついた龍子の兩手を、折れよとばかり突きほどいた。咄嗟に立ちあがらうとする彼、さはさせじと、

またも飛びかゝる彼女――

靖也は片足をあげて、龍子の肩をグンと蹴つた。ひとたまりもなく、彼女は床柱の脇に、木偶人形のやうに、たゝきつけられてしまつた。

「……靖……靖也さん！」それでも彼女は叫んだ。「あなたは、どうしてもわたしのものよ！　わたし……わたしあなたを離しはしない！　あなたを誰の手にも渡しはしない！　わたし、生命にかけてもあなたをわたしに返さずにはおかない！」

「……なにをいふ……惡魔！　惡魔！　惡魔！」

「惡魔でいゝ。惡魔の醜さと恐ろしさを、どこまでも見せてあげる！」

龍子はキツト、下から靖也を睨みあげた。蒼ざめた彼女の額には、崩れた髪が、生あるものゝごとく震へてゐた。――たしかにそれは、あの、メデユウサの首であつた。千筋の毛髪の一つ〳〵が、生きてうごめく蛇に化した、あの希臘神話に見る恐ろしいメデユウサの、呪ひの焔を籠めた眼を、靖也は今、まのあたりに見たのであつた。人が、ひと目これを見たならば、忽ち呪縛にかゝつて石になるといふ凶兆にみちた首！　――その首を、今こゝに、彼は見たのであつた。

「惡魔！」

彼は、思はず再び叫んだ。

「どんなにでも罵るがいゝ。あなたがどんなに罵らうと憎まうと、龍子には龍子の力がある！　悪魔には悪魔の力がある！」

彼女はカタ〳〵と齒を鳴らした。

「もう……もうどんなことがあつても、今夜限り、この汚はしい、道はづれな女に會ふものか？　僕は敢ていふ。僕は正しいのだ。僕の心には恥も悔ひもないのだ。僕はかうして人間の一つの道をまつすぐに歩いてゐる。僕には、なにものにも恐れぬ勇氣がある。淨い魂がある！　……この前に、どんな力だつて、邪魔立てができるものか！　……僕の行手に、なんの障碍もあるものか！」

「さう立派にいひきつた靖也さんに、悪魔と罵られた龍子が、ひと言ハツキリいつて置くことがある。……わたしは……この龍子は、生命にかへても、靖也さんを他人のものにはしない。わたしのものにして見せる。きつと、きつとわたしのものにして見せる。……たとひ、わたしのものにできなかつたとしても、他人の手には渡さない。……龍子には龍子の意地がある！　……悪魔には悪魔の一念がある！」

――笑ふのか泣くのか、龍子の唇はゆがんだ。

「もう、あなたに、これ以上のひと言いふのも汚らはしい。今夜限り、永久に――左様なら！」

靖也は障子を開けると、パツと部屋の外へ飛び出した。

幾つか曲つて、よくはおぼえてをらぬ廊下を、どう駈けぬけたか、彼は夢中で玄關へ走り出た。

「まあ！　お歸りでございますか？」

彼の足音を聞きつけたか、さつきの女中があとを追つて來た。

「靴を！」

「……まあ、あなた……」

血相を變へてゐる靖也を、前に廻つてとめようとしたが、忽ち彼の手に女中は突きのけられてしまつた。

「靴だ！　靴を出せ！」

「……お歸りなれば、自動車をお呼びしませうから……」

靖也の權幕に恐れたらしく、彼女は式臺に靴をそろへながらいつた。

それには答へもせず、靖也は靴を兩足にひつかけた。

「お帽子……」

と、さし出す帽子を、女中の手からひつたくるやうに取るや否、靖也は、ろく〳〵靴の紐も結ばないで、植込の間から門口へ飛び出してしまつた。

× ×

……靖也が去つたあと、龍子は、いつまでも、あけ放された障子を、半身を起したまゝ見つめてゐた。

×　　×

彼女の顏は、臘細工の樣に、憎しみとも嘲りともつかぬ一つの表情を刻まれたまゝ動かなかつた。

女中が走つて來た。

「……あの、お連れ樣は……お歸りになりましたが……」

と、たゞごとならぬ樣子を知つてか、龍子の機嫌をうかゞふやうに、恐る〳〵緣に手をついた。

「あゝ、さう……」

龍子は、極めて平靜を粧つて、居住ひをなほした。

「よろしうございますか？」

「よろしうございますもございませんも、歸つて行つたものはしかたがないわ。」

「わたくし、隨分おとめ申しあげたのでございますけど……」

「とめたつて、歸つたものならしかたがないわ。」

「ほんたうに申譯ございません。」

「なにもお詫びをいふ必要はないわ。あの人、歸りたくなつたから歸つてしまつたまでよ。」

「でも……ほんたうに一生懸命におとめ申したのでございますよ。しかし、どうなすつたのか、大變な御權幕で……いきなり、靴を出せ！　つて、お玄關で、叱るやうに仰有るのでございますもの……。」

「……ふん。」

龍子は鼻のさきで、强ひてせゝら笑つた。

「あちら、隨分、お癇癪もちのやうでいらつしやいますわねえ。ほゝゝゝ。」と女中は再び龍子の氣色をうかがふやうにいつたが、「いつたい、どうなすつたのでございます？」

「御覽のとほりだわ。」

棄てばちのやうに、また龍子は笑つた。

「へえ？」

「わたしが嫌がられたまでのことよ。」

「まあ？　……あんなことを仰有つて？　ほゝゝゝゝゝ。」

「ほんたうよ。もつと笑つていゝわ。」

「まあ……あんな……」女中は、ちよつと返事に困つて手を揉んだが、「……で、奧さま、どう遊ばしますの？」

「まさか、追手の人數を繰り出すといふわけにもゆくまいわねえ。ほゝゝ！」

「……ほんたうに面白いことを仰有います。ほゝゝゝゝ。」
龍子は、煙草盆を引きよせて、ペツと吐月峯に唾をはいたが、
「とにかく、お酒を、もうすこしばかり通しておくれ。それから御飯にして歸りませう。」
「はい。」
女中は一禮して去つた。
龍子は、床の間に置いた銀鎖の手提から、小さな象牙張の鏡を出して、亂れた髪をなほした。
「……ふん、みじめな顏だわ！」
彼女はみづから罵つた。
「はゝゝゝゝ！　まさにその通り、ほんたうにみじめな顏です。お氣の毒な顏です！」
障子のそとで、大きく笑ふ聲があつた。
びつくりして、彼女は鏡を膝に置いた。
「誰？」
「僕です。ごめんください。」
ガラリと障子をあけて入つて來たのは、思ひがけない、小宮徹郎であつた。
「あ、小宮さん。」

さすがの龍子も、呆氣にとられた形で、男の顏を見あげた。
「はゝゝゝゝ！」
小宮は、立つたまゝ、いかにもしてやつたといふやうな顏をして、グツと反り身に、また高く笑ふのであつた。
龍子は、グツと唾を飲んだ。
「龍子さん。こゝへ僕があらはれるとは、思ひがけなかつたでせう？」
「……ほんたうに！　……どうしてこゝにわたしがゐることを知つたの？」
「そこが妖術ですよ。」と、小宮は得意らしく坐り込んで、「あなたにも妖術があるんですが、僕にも、これで相當妖術の心得はあるんですからね。……あなたが今夜君塚君をこゝへ呼び出して、最後の賽の目がどう出るかを試みようとなすつたことまで、ちやんと見通して來たのです。どうです。龍子さん。」
「感心してあげるわ。ほめてあげるわ。小宮さんにしちや、大出來のはうね。」
「大出來ですとも！　所謂、術競べに勝つたといふ譯ですからな。……龍子さんを、はじめてやつつけて愉快ですよ。」
小宮は飽くまで皮肉であつた。

「さうね。この程度までなら、わたしやつつけられて置くわ。小宮さんも、時には威張らせてあげないと、それこそみじめで、お氣の毒だからねえ。」龍子はこともなげに笑つて應じた。「どうせこれは、ここの家の女將か女中か、それともあの自動屋の運轉手かが、買收されてゐる位のことなんだらうけれど……」

「まあ、どんな手段だつていゝ。これを小宮一流の妖術といふことにして置きます。」

「……ふん。」

龍子は、また鼻さきでせゝら笑つた。

女中が、酒の用意をして、入つて來た。

「おや、小宮さま。……まあ、いつの間にいらしつたのでございます。」

驚いたやうに、彼女は眼をやつた。

「僕は忍術使ひだからねえ。いつでも思ふところへ、忽然と姿をあらはすことができるのさ。はゝゝ」。

「まあ、あんなことを仰有つて……でも、ほんたうに不思議でございますわねえ。いつの間にいらしつたのでせう?」

「はゝゝ。お前だつて、今、奥さんから僕の一味ぢやないかと疑はれてゐるのだよ。」

「へえ、どうしてわたくしが、小宮さまの一味?」

女中はいよ〳〵怪訝な顏をした。

「まあいゝさ。僕の一味といふことになつておくさ。」

「……へえ……ですけれど……わたくしが小宮さまの一味つて、それは、どうした譯なんでございます?」

「まあいゝさ。わからなければそれでいゝさ。いや、お前でなかつたら、或はこゝの女將だつたかも知れないよ。はゝゝ。」

「なんだか、變でございますわねえ。」

「とにかく、失禮して、僕がおさきに、さあ、一つ頂戴しようかな。」

小宮は、話をそらすやうに、杯をとりあげた。

龍子は默つて、小宮がしたり顏に杯を乾すのを見てゐたが、よそごとのやうに、

「小宮さん。あれから例の請負仕事のことはどうなつて?」

「え、あの仕事のことですか……まづ、著々と效を收めてゐるつもりですからその點は……」

「さう、それなら安心だけど。」

小宮は、思ひ出した樣に女中に、

「お前、ちよつと……」
と、眼くばせした。
「はい。……では、御用の時、呼鈴をお鳴らしくださいまし。」
女中は去つた。
「ほんたうにうまくいつてゐるの？」
「大丈夫です。……だが、龍子さん。あなたも案外思ひきりのわるい人ですねえ。」と、小宮はコトンと音をたてゝ杯を置きながら、僕はあなたの態度が、かうグラついてゐるのぢやあ、どうも仕事に氣乘りがしませんよ。え、さうぢやありませんか？ ……この仕事が下手にいつたら、僕は僕の一生を棒に振らなきやならないのですぜ。いや、はじめつから、一生を賭る覺悟でかゝらなくちや、こんな仕事は成功するものぢやない。これ位のことは、あなたにちやんとわかつてゐる筈です。そんな恐ろしろ仕事を僕にやらせて置きながら、またあなたの心持がかう動いてゐちや……あんまり僕の役廻りは馬鹿々々し過ぎる。いや、さつきの言葉ぢやないが、みじめ過ぎる。お氣の毒過ぎる！」
「そんなに攻撃しなくつてもいゝわ。」
「攻撃してるんぢやありません。あなたの決心を、改めてお伺ひしてるんです。」
「決心？ ——決心は、充分してゐるわ。」

「なにが充分です。こんな態度で、なにが充分の決心です？ よくお伺ひして置かなくつちやなりません。これだけの恐ろしい仕事を、あなたのために、喜んでおひきうけした僕として、よくこの點を明瞭にして置かなくちやなりません。さうでないと、結局僕ひとりが、飛んだつまらない籤をひくことになるんですからねえ……」小宮は龍子をジツと見て、「龍子さん、あなたはいつか、それは單に復讐とはいはれたくない、隈部の妻として、これからあの男に、やりとほすべきことをやりとほすのだといひましたねえ。さうでせう？ 僕はちやんとあなたのあの時の言葉を記憶えてゐる。——こんどの仕事は、あなたの復讐といふほかに、隈部鐵工所對日東造船會社の問題も加はつてゐるのでせう？ ——日東造船は、隈部鐵工所に對して、業務のゆきちがつた感情の上から、今は絶縁といふよりも、敵視といつたはうがいゝ位な態度をとつてゐる。それはみんな、あの、君塚君の叔父である室田榮藏の意見から出てゐることなんです。だから、君塚君の仕事を失敗させることは、あなたの良人である隈部さんの勝利にもなることなのでせう？ ——だからこそあなたがあゝいふ言葉でいつたのでせう？ それを、あなたが、いつまでもこんなフラ〳〵した態度をとつてゐられるといふやうなことでは、僕も思ひきつてこの仕事に乘りかゝることができない。一身を賭ての大博突をうつことができない。」
「わかつてよ。小宮さん、わたしが悪かつたわ。」
「わかりましたか。ぢや、なほ一應念のためにお訊きして置きますが、あなたは向後、どこまでも君

塚君の敵であるといふ、あなた自身の位置を守つてくださるでせうね？　――君塚君を、もう二度と再び、こんなところへ呼び寄せるやうなことはしないでせうね？」

「そりやあ大丈夫よ。あの男は、今夜わたしに、永久にさやうならといつて、プン〳〵怒つて歸つたんだから。」

「そりやあ、あの男は、永久にさやうならでせう。しかし、龍子さんが、あの男に、永久にさやうならでなくちや困ります。」

「え〻、もうかうなりやあ、わたし、未練なしよ。」

「たしかに？」

「え〻、たしかに……」

「なんだか、まだどうも不徹底のやうだ。」

「なぜ？　……ぢや、どういつたらい〻の？」

「どういつたらつて、あなたの言葉の調子が、まだフラついてゐる。」

「ぢや、もう一度、改めていつてあげるわ。――龍子は、あの男に、綺麗さつぱり、未練なしよ！」と、龍子は一語々々を強く句切つて、「さあ、これでい〻せう？」

「よろしい。滿點です。」

兩人は顏見あはせて笑つた。

しばらく彼等の間に、杯がかはされた。

小宮は案外早く醉つた。彼の眼は、時々、とろけるやうに、龍子の姿にそ〻がれた。

「……しかし、考へて見れば、君塚つて男も幸福者だ。……こうして龍子さんに、いろ〳〵搔口說かれるんだものな。僕なんか、この點ぢやあ實にみじめだ。お氣の毒だ。」

彼は歎息するやうに、口から杯をはなした。

「さうでもありますまい。……いつかちよつとお話したが、菊江さんは、まつたく夢中よ。可憐そうな位ね小宮さんのことを思つてゐるのよ。……どう？　小宮さん。あの人と結婚する氣持はない？……小宮さんにその氣持があつたら、わたし、よろこんで仲に立つわ。隈部だつてあなたをあんなに信用してゐるし、きつと贊成してくれるにちがひないわ。さうすれば、菊江さんだつて、どんなに感謝するか知れないわ。え？　どう？　小宮さん。」

「……さうですな。しかし、僕にはまだ菊江さんといふ人がよくわかりませんからねえ。まあ、その話は考へて置きませう。」

「きつと似合ひの、い〻御夫婦ができるわ。」

「……どうですかな……」